史跡 鴻臚館跡

鴻臚館跡26

― 中世編 ―

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1524集

2024

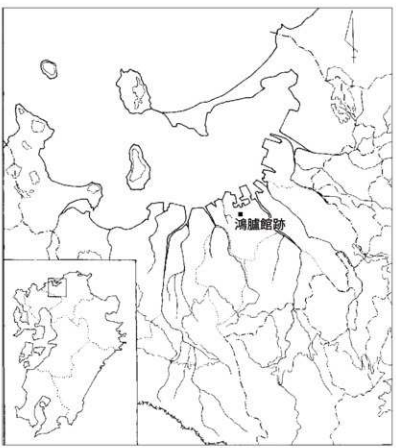
福岡市教育委員会

史跡 鴻臚館跡

鴻臚館跡 26

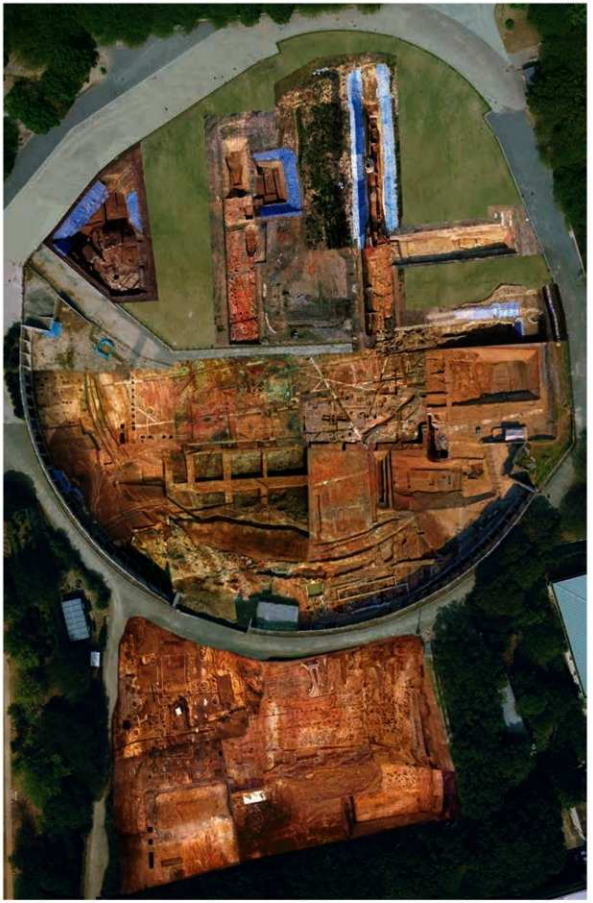
— 中世編 —

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1524集



2024

福岡市教育委員会



鴻臚館跡調査区全景デジタルモザイク写真

1.第23次調査 平坦面SX17711上層（東から）

2.第23次調査 グリッド2南壁土層（北から）

3.第29次調査 斜面SX23200周辺状況（南東から）

4.第30次調査出土 孔雀釉梅瓶
(Fig.95-20)

5.第9次調査表採 石製香炉（Fig.93-97）

序

かつて国内に三ヵ所あった鴻臚館のうち、筑紫鴻臚館跡は唯一その存在が確認された遺跡で、平成16年(2004)には国史跡指定を受けました。九州大学医学部教授で考古学者であった中山平次郎博士が、鴻臚館の所在を福岡城内であると提唱されてから70年あまり経った昭和62年(1987)末、平和台野球場の外野スタンド改修工事に伴った調査で、建物の礎石や、千年前にもたらされた中国陶磁器・イスラム陶器などが発見されました。この発見は当時のメディアを賑わし、市民、国内外の研究者の注目を浴びました。つづく発掘調査については、調査研究指導委員会のご指導を賜り、調査成果については概要報告書を作成し、広く情報発信を行ってきました。平成21年よりは古代の成果についてまとめた報告書を刊行し、多くの皆様に活用されているところです。

発掘調査では、古代のみならず中世から近世の遺構や遺物も多く発見されています。このほど、鴻臚館が役割を終えたのちの時代についてまとめることとなりました。鴻臚館終焉後とは言え、土地には色濃く鴻臚館の影響が残っています。鴻臚館があったからこそ次の時代の土地利用がかない、また、時を経て福岡城へとつながっていきます。本書では中世から築城までの時代、鴻臚館の跡地がどのようになっていたのか、鴻臚館跡地が歩んだその後についてまとめました。

調査に際し「鴻臚館跡整備検討委員会」をはじめ文化庁、福岡県、財務省福岡財務支局等の関係機関にご協力を頂き、調査や整理を円滑に進めることができましたことを厚く御礼申し上げます。調査に関わられた全ての方々に深く感謝申し上げますとともに、この報告書が広く活用され、鴻臚館跡の保存と活用に対する理解を深める一助となることを願います。

令和６年３月22日

福岡市教育委員会
教育長　石橋　正信

例　言

1．本書は、福岡市教育委員会が行った 国指定史跡 鴻臚館跡における発掘調査報告書である。
2．鴻臚館跡の発掘調査報告書は、平成２(1990)年度から継続刊行され、本書は26冊目である。古代に関する報告については、『鴻臚館跡Ⅱ』(福岡市埋蔵文化財調査報告書第315集)、及び『鴻臚館跡18』～『同 23』(同第1022・1175・1213・1248・1300・1326集)で行い、『鴻臚館跡24』『同 25』(同第1357・1383集)では古代に関する総括を行った。上記以外のものは概要報告書である。
3．本書は、国指定史跡 鴻臚館跡の発掘調査において、第31次調査までに確認された中世遺構と中世遺物について報告するものである。
4．鴻臚館跡の発掘調査、及び本書の作成は、国庫補助事業として実施した。
5．本書に用いた座標系は、平面直角座標系第Ⅱ座標系(日本測地系：Bessel楕円体)である。鴻臚館跡調査実施途中で世界測地系への移行が行われたが、過去の調査数値を活かし調査地内の把握を連続して行うため、旧来の日本測地系によるグリッド把握での調査報告を行った。図に使用した方位は全て座標北を示す。国土地理院が公開するTKY２JGD使用により変換した本遺跡の世界測地系「日本測地系2000(=ITRF94系=JGD2000)：GRS80楕円体」は以下のとおりである。
鴻臚館跡南東側：X=64,700 Y=－56,700 ⇒ 世界測地系 X=65,073.0531 Y=－56,920.7000 (真北方向角＋０°20′21.22″)
鴻臚館跡北西側：X=64,950 Y=－56,850 ⇒ 世界測地系 X=65,323.0526 Y=－57,070.6981 (真北方向角＋０°20′24.54″)
6．グリッドは10m 間隔で、南北方向にａ～ｑ・Ａ～Ｉ、東西方向に710～860の番号をふったメッシュを用い、Fig.７に示した。本文や表にある「○○グリッド」はこのメッシュを指し、遺構や遺物が確認された大まかな位置を示す。
7．遺構図には遺構ごとに一連の遺構番号を付け、番号の前に以下のとおり分類記号を付した。
ＳＢ(建物)、ＳＤ(溝)、ＳＥ(井戸)、ＳＧ(池)、ＳＫ(土坑)、ＳＭ(埋立・盛土)、
ＳＰ(小穴・柱穴)、ＳＲ(土壙墓)、ＳＸ(特徴ある地形・不明遺構)
8．本書に使用した遺構実測図の作製は、各調査年度の調査担当者、及び調査員(技能員)・作業員が行なった。また本書作成にあたり要した地形図・遺構断面図等の作製は、主に光吉千里が行なった。
9．本書に使用した遺物実測図の作製は、各整理年度の調査担当者、及び調査員(技能員)・作業員が行なった。また本書作成にあたり要した遺物実測図の作製は、主に池崎譲二が行なった。遺物の詳細な観察は主に実測者により、場合によって池崎・光吉の観察により補記した。
10．本書に使用した図の製図は、既刊報告書に掲載された図を再掲したものを除いて、光吉・池崎が行なった。
11．本書に使用した遺構写真は、各年度の調査担当者が撮影した。
12．本書の執筆は、各調査年度の調査担当者と編集者があたった。既刊報告書の記述再掲にあたっては、場合によって編集者及び調査担当者が資料を追加掲載また記述等加筆した。編集者以外による記述に関しては文末に執筆者名を記した。
13．本書の編集は、中村啓太郎と池崎の指導のもと光吉が行った。
14．本報告書に関する記録と遺物類は、整理後、福岡市埋蔵文化財センターに収蔵しここで管理する。

発掘調査担当職員　(担当年度順)

山崎純男、吉武 学、瀧本正志、田中壽夫、塩屋勝利、池崎譲二、折尾 学、大庭康時、横山邦継、
久住猛雄、常松幹雄、中村啓太郎、菅波正人、吉田大輔

遺跡調査番号	8747・8829・8910・9005・9130・9218・9236・9326・9420・9432・9463・9537 9620・9736・9807・9831・9910・0008・0109・0218・0309・0415・0502・0617 0706・0821・0906・1013・1116・1205・1314		
遺跡略号	KRE(鴻臚館跡)、FUE(福岡城跡)		
所在地	中央区城内1-1	分布地図番号	60-0192
調査対象面積	48,027㎡(国史跡指定面積)	調査面積	28,129㎡(詳細はTab.3 参照)
調査期間	(Tab.3 参照)		

目　次

第一章　はじめに…… 1
1.調査の経緯と経過 …… 1
2.調査体制 …… 2
3.報告書の作成 …… 3

第二章　遺跡の位置と環境…… 5
1.遺跡の位置と周辺環境 …… 5
2.周辺地形 …… 6
3.土地利用の変遷 …… 8
(1)鴻臚館造営前 …… 8
(2)鴻臚館時代 …… 8

第三章　調査の記録…… 10
1.中世期の地形 …… 10
2.調査概要 …… 12
3.中世の遺構と遺物 …… 15
(1) 整地層…… 15
(2) 台地縁辺から斜面下の平坦面…… 19
①トレンチ4の平坦面（第28次調査）…… 19
②トレンチ5の平坦面（第29次調査）…… 26
③グリッド1~4の平坦面（第23次調査） …… 31
④トレンチ3北側の低地面（第25次・第26次調査）…… 41
⑤その他の平坦面…… 42
(3) 台地周辺のその他の地形…… 43
(4) 溝…… 45
(5) 池…… 57
(6) 井戸…… 72
(7) 生産遺構…… 73
(8) 枡形遺構…… 77
(9) 地下式土坑…… 80
(10) 土壙墓 …… 85
(11) 土坑 …… 87
(12) 遺構外の出土遺物 …… 99
(13) 銭貨 …… 111
4.古代の遺構と遺物 …… 112
5.まとめ …… 113

挿図目次

Fig. 1　鴻臚館跡発掘調査計画図（令和５年３月現在）…… 1
Fig. 2　周辺遺跡分布図（1/200,000）…… 5
Fig. 3　鴻臚館跡周辺における造成前の旧地形復元図・断面見通し図（1/5,000、1/2,000）…… 7
Fig. 4　鴻臚館跡出土の前時代遺物（1/3）…… 8
Fig. 5　鴻臚館跡建物遺構概略図（1/2,000）…… 9
Fig. 6　地形断面図（1/200）…… 11
Fig. 7　全体図（1/800）…… 13
Fig. 8　SM1208出土遺物実測図（1/1、2/3、1/3）…… 15
Fig. 9　SM24139出土遺物実測図（1/3）…… 16
Fig.10~11　SM25058出土遺物実測図（1/3、2/3）…… 17
Fig.12　第28次調査トレンチ４調査区中世期遺構配置図（1/150、1/300）…… 20
Fig.13　掘立柱建物SB21138・SB21139実測図（1/80）…… 20
Fig.14　SX21100出土遺物実測図（1/3）…… 21
Fig.15　溝SD21111実測図（1/120）、SD21111出土遺物実測図1（1/3）…… 22
Fig.16　SD21111出土遺物実測図2（1/3）…… 23
Fig.17　斜面SX21110周辺遺構配置図・土層断面図（1/80）、SD21122出土遺物実測図（1/3）…… 25
Fig.18　第29次調査トレンチ５調査区中世期遺構配置図・断面図（1/300）、斜面SX23200土層断面図（1/60）…… 26
Fig.19~20　SX23200出土遺物実測図（1/3）…… 27
Fig.21　SX23201出土遺物実測図（1/3）…… 28
Fig.22　平坦面SX23210実測図（1/80）…… 30
Fig.23　SX23210・SD23207出土遺物実測図（1/3）…… 30
Fig.24　第23次調査グリッド1~4調査区中世期遺構配置図（1/200）、断面図・土層断面図（1/100）… 32
Fig.25　SX17003出土遺物実測図（1/3）…… 33
Fig.26　瓦溜りSX17025周辺遺構配置図・グリッド２南壁土層断面図抜粋（1/80）…… 33
Fig.27　SX17025出土遺物実測図（1/3）…… 33
Fig.28　SX17061出土遺物実測図（1/3）…… 34
Fig.29　平坦面SX17710遺構配置図・断面図（1/80）…… 36
Fig.30　SX17710・SD17033出土遺物実測図（1/3、1/4）…… 37
Fig.31　平坦面SX17711上層遺構配置図（1/200）、断面図（1/80）…… 38
Fig.32　平坦面SX17711下層遺構配置図・断面図（1/80）…… 39
Fig.33　SX17188出土遺物実測図（1/3）…… 40
Fig.34　第25次・第26次調査トレンチ3調査区北側中世期遺構配置図・土層断面図（1/100）…… 41
Fig.35　SX19600出土遺物実測図（1/3）…… 42
Fig.36　平坦面SX17709土層断面図（1/80）…… 43

Fig.37　平坦面SX19501実測図(1/80) …… 43
Fig.38　旧地形SX1037実測図(1/100、1/80) …… 44
Fig.39　溝SD30・(SD244)実測図(1/600・1/200、1/200・1/100) …… 46
Fig.40　SD30・(SD244)出土遺物実測図(1/3) …… 47
Fig.41　溝SD873・SD892実測図(1/200、1/100) …… 48
Fig.42　溝SD1057・SD1060・SD1081実測図(1/200、1/100)、出土遺物実測図(1/3) …… 49
Fig.43　溝SD1222・SD1239・SD1240・SD1272・SD17059実測図(1/200、1/100) …… 51
Fig.44　SD1222・SD1239・SD1240・SD1272・SD17059出土遺物実測図(1/3、1/4) …… 52
Fig.45　SD1242・SD1244・SD1268出土遺物実測図(1/3) …… 53
Fig.46　溝SD19510・SD19601・SD25048・SD25056・SD25057・SD24137・SD24138実測図(1/200、1/100、1/50) …… 55
Fig.47　SD19510関連SX19511出土遺物実測図(1/3) …… 56
Fig.48　SD19601出土遺物写真(1/1) …… 56
Fig.49　SD25048・SD25056・SD25057出土遺物実測図(1/3) …… 56
Fig.50　池SG1046実測図(1/500、1/300) …… 58
Fig.51　池SG1046土層断面図(1/100) …… 59
Fig.52~54　SG1046出土遺物実測図(1/3・1/4) …… 60
Fig.55　池SX1261・SX14340・SX14340B・SK14341実測図(1/100) …… 64
Fig.56　SK1261・SX14340・SX14340B出土遺物実測図(1/3) …… 66
Fig.57　池SK14341写真(東より) …… 67
Fig.58　SK14341出土遺物実測図(1/3) …… 67
Fig.59　池SG23206実測図(1/80、1/40)、SG23206出土遺物実測図1(1/3) …… 69
Fig.60　SG23206出土遺物実測図2(1/3) …… 70
Fig.61　SD23212関連SD23204出土遺物実測図(1/3) …… 70
Fig.62　池SG25047実測図(1/80)、出土遺物実測図(1/3) …… 71
Fig.63　井戸SE1102実測図(1/50)、出土遺物実測図(1/4、1/3) …… 72
Fig.64　梵鐘鋳造遺構SK29実測図(1/40) …… 73
Fig.65~66　SK29出土遺物実測図(1/3) …… 74
Fig.67　溶解炉SK139実測図(1/20、1/40) …… 76
Fig.68　枡形遺構SK361実測図(1/40)、出土遺物実測図(1/3) …… 78
Fig.69　枡形遺構SK366実測図(1/40)、出土遺物実測図(1/3) …… 79
Fig.70　土坑SK1235内枡形石積み実測図(1/40) …… 79
Fig.71　地下式土坑SK28実測図(1/80) …… 80
Fig.72　地下式土坑SK227実測図(1/80) …… 81
Fig.73　SK28出土遺物・SK227参考資料実測図(1/3、1/4) …… 82
Fig.74　地下式土坑SK271・SK863・SK15013・SK17004・SK17026実測図(1/80) …… 83

Fig.75　SK271・SK15013・SK17004出土遺物実測図(1/3、1/4) …… 84
Fig.76　土壙墓SR23211実測図(1/20)、出土遺物実測図(1/3) …… 86
Fig.77　土壙墓SR23211遺物出土状況写真 …… 87
Fig.78　土坑SK133・SK222・SK1103・SK1249・SK1251・SK1252実測図(1/40)、
SK222出土遺物実測図(1/3) …… 89
Fig.79　土坑SK360実測図(1/40)、出土遺物実測図(1/3) …… 90
Fig.80　土坑SK17005実測図(1/40) …… 91
Fig.81　土坑SK17023・SK17024実測図(1/20、1/40)、SK17024出土遺物実測図(1/3) …… 92
Fig.82　土坑SK17062実測図(1/40) …… 93
Fig.83　土坑SK17213・SK17222・SK17231・SK17240・SK17250・SK17290・SK17483実測図(1/40) … 94
Fig.84　土坑SK18353・SK19503実測図(1/40)、SK18353出土遺物実測図(1/3) …… 95
Fig.85　土坑SK19604実測図(1/40) …… 96
Fig.86　土坑SK21113・SK21118~21120・SK21137実測図(1/40)、
SK21113・SK21119出土遺物実測図(1/3) …… 97
Fig.87　土坑SK23140・SK23141実測図(1/40)、出土遺物実測図(1/3) …… 98
Fig.88~94　遺構外出土遺物実測図南館域(1/3、1/2、1/4) …… 99
Fig.95~96　遺構外出土遺物実測図北館域(1/3)谷出土遺物を含む …… 108
Fig.97　銭貨(2/3) …… 111
Fig.98　溝SD25054実測図(1/200、1/100)、出土遺物実測図(1/3) …… 112
Fig.99　中世の整地層SM24139出土遺物(1/4) …… 112

図版目次

巻頭図版1　鴻臚館跡調査区全景デジタルモザイク写真
巻頭図版2　1．第23次調査平坦面SX17711上層(東から)
2．第23次調査グリッド2南壁土層(北から)
3．第29次調査斜面SX23200周辺状況(南東から)
4．第30次調査出土孔雀釉梅瓶(Fig.95-20)
5．第9次調査表採石製香炉(Fig.93-97)

表目次

Tab.1　調査計画表 …… 1
Tab.2　鴻臚館跡調査研究指導委員会委員・整備検討委員会委員一覧表 …… 3
Tab.3　鴻臚館跡関係調査一覧 …… 4

表紙題字は、故進藤一馬元福岡市長揮毫

第一章　はじめに

1.調査の経緯と経過

昭和62（1987）年、福岡市中央区城内の平和台野球場外野席の改修工事に伴い、鴻臚館跡第３次調査として行った試掘調査により、遺構の残りが想定外に良いことが判明するとともに、土坑から出土した多量の中国陶磁器やイスラムガラス等により、この遺跡が鴻臚館跡である可能性が極めて高いことが明らかとなった。

翌昭和63年度から確認調査を開始し、緑地部分の南側テニスコート（第Ⅰ期調査）やその周囲の福岡城土塁下部（第Ⅲ期調査）、平成11（1999）年度からは撤去された平和台野球場跡地内南半（第Ⅳ期調査）、平成18年度から25年度に野球場跡地北半（第Ⅴ期調査）の調査を実施し、鴻臚館跡の主要部分の確認調査は終了した。これらの調査により、筑紫館以来の施設の構造や変遷が明らかになると共に、大宰府における外交、交易面での鴻臚館の在り方の理解につながった。

Tab.1　調査計画表

長期計画	調査対象地	調査面積	実施及び計画期間	調査目的
第Ⅰ期	平和台野球場 南側	4,585㎡	昭和63～平成4年度	鴻臚館跡の遺構の有無と範囲の確認
第Ⅱ期	舞鶴公園西広場	1,400㎡	平成5～6年度	鴻臚館跡の範囲確認、及び福岡城築城時旧地形の復元と藩主部の確認
第Ⅲ期	平和台野球場 南側土塁ほか	2,114㎡	平成7～10年度	平和台野球場南側土塁下の遺構確認・平和台野球場解体工事立会・試掘
第Ⅳ期	平和台野球場跡 南半分	15,095㎡	平成11～17年度	鴻臚館跡の史跡指定に向けての範囲確認・鴻臚館時代の地形復元
第Ⅴ期	平和台野球場跡 北半分	6,534㎡	平成18～25年度	鴻臚北館の構造確認と北側汀線の確認、外郭施設の検出
第Ⅵ期	福岡高等裁判所跡地とその周辺	3,120㎡	平成31～令和4年度	鴻臚中島館の可能性が指摘されており、その確認
第Ⅶ期	舞鶴球技場とその周辺	対象面積 12,000㎡	未定	鴻臚館跡史跡指定地に隣接する諸施設の確認

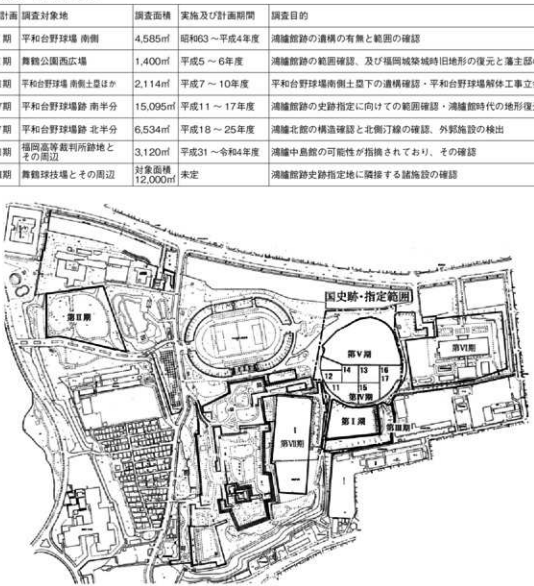


Fig.1　鴻臚館跡発掘調査計画図（令和5年3月現在）

鴻臚館の全容解明は、いまだ目標の域を出ないが、平和台野球場跡地でまとまった面積での遺構の状況や地形・建物の構造が推定可能になったことをもって、文化庁に国史跡指定を申請、平成16年9月30日付官報において指定が告示された。

現在、鴻臚館の全容解明に向けて、史跡指定地外の遺構確認調査（第Ⅵ期、第Ⅶ期調査）の継続とともに、発掘調査が終了した史跡指定部分の環境整備にどのように取り組んでいくかが課題となっている。このため、平成25年度にはこれまでの「鴻臚館跡調査研究指導委員会」に代わって新たに「鴻臚館跡整備検討委員会」を組織し（Tab.2）、発掘調査や今後の整備について学識経験者等の指導・助言を受け、また文化庁や福岡県とも協議を行いながら事業を進め、平成26年度には鴻臚館跡の将来にわたる整備の考え方を示す「国史跡鴻臚館跡整備基本構想」を策定した。基本構想では、整備理念の柱となる以下の４つの観点、

①「アジアの交流拠点の歴史－古来より続く国内外の人々が行き交う場－」の認識
②「鴻臚館とその時代－古代日本の交流の結節点の役割が理解できる場－」の再現
③「歴史の重層性－福岡の都市形成の歴史を物語る場－」の保存
④「交流と学び－国際交流で育んだ歴史・文化を継承する場－」の振興

を基本理念として、

「アジアの交流拠点都市福岡の原点 鴻臚館－時をたどり、人々が行き交う場に－」

を掲げた。さらに、平成27年度からは早期に整備事業を推進するため「国史跡鴻臚館跡整備基本計画」の策定に着手した。（菅波）

2.調査体制

第Ⅴ期調査より前の組織体制については『鴻臚館跡18』に、第Ⅴ期調査にかかる平成18（2006）年度から平成29年度の体制については『鴻臚館跡25』に詳細がある。ここでは、平成30年度から令和５（2023）年度の体制を示す。

調査主体	福岡市教育委員会教育長	星子明夫(～R３年度)、石橋正信(R４年度～)
	〃　教育次長	高田浩輝(～H30年度)、小西真弓(H30～31年度)、 小野田勝則(R２年度)、石橋正信(R３年度)、福田大二郎(R４年度～)
調査総括	文化財活用部長	髙山嘉樹(～H30年度)、田代和則(H31～R３年度)、川口英仁(R４年度～)
	史跡整備活用課長	長家　伸(H30年度 ～)
調査担当	鴻臚館跡整備係長	中村啓太郎(H30年度 ～)
	鴻臚館跡整備係	吉田大輔(R２～３年度)
	報告書作成専門員	光吉千里(H30年度 ～)
	史跡調査員	野村俊之(R４年度 ～)
調査指導員		池崎譲二(H30年度～)
整理協力		冨永静子、安田美哉、ステットソン敬子　(敬省略)

【鴻臚館跡整備検討委員会】　(令和6年3月現在)

池崎譲二（考古学）、伊東龍一（建築史学）、岩永省三（考古学）、包清博之（環境設計学）、河上麻由子（東洋史）、坂上康俊（国史学／委員長）、佐藤　信（国史学／委員長）、澤村　明（文化経済学）、杉本正美（造園学／副委員長）、箱崎和久（建築史学）、本中　眞（造園学）　五十音順、敬称略

Tab.2　鴻臚館跡調査研究指導委員会委員（昭和63～平成24年度）・整備検討委員会委員（平成25年度～）一覧表

専　門	氏　名	就任時の所属（就任期間 /退任時の役職）	氏　名	就任時の所属（就任期間 /退任時の役職）
国史学	平野邦雄	東京女子大学教授（S63～H8/委員長）	田村圓澄	九州歴史資料館館長（S63～H4）
	川添昭二	九州大学教授（S63～H16）	八木　充	山口大学教授（S63～H24）
	笹山晴生	東京大学教授（S63～H16/委員長）	狩野　久	岡山大学教授（H4～28）
	佐藤　信	**東京大学助教授（H6～）**	服部英雄	九州大学教授（H16～24）
	坂上康俊	**九州大学教授（H25～）**		
東洋史学	**河上麻由子**	**大阪大学大学院准教授（R3～）**		
考古学	坪井清足	大阪文化財センター理事長（S63～H22）	横山浩一	九州大学教授（S63～H16/委員長）
	小田富士雄	福岡大学教授（S63～R4/委員長）	西谷　正	九州大学教授（S63～H24）
	田中　琢	奈良国立文化財研究所所長（H6～10）	町田　章	奈良国立文化財研究所所長（H11～16）
	田辺征夫	奈良文化財研究所所長（H17～22）	松村恵司	奈良文化財研究所所長（H23～R2）
	河原純之	川村学園女子大学教授（H14～28）	高島忠平	佐賀女子短期大学学長（H16～24）
	渡辺正気	県文化財保護審議会委員（S63～H8）	石松好雄	九州歴史資料館副館長（H4～8）
	岩永省三	**九州大学教授（H25～）**	**池崎謙二**	**元福岡市埋蔵文化財センター所長（R5～）**
建築史学	鈴木嘉吉	奈良国立文化財研究所所長（S63～H27）	澤村　仁	九州芸術工科大学教授（S63～H16）
	上野邦一	奈良女子大学教授（H16～19）	島田敏男	奈良文化財研究所（H19～23）
	林　良彦	奈良文化財研究所（H23～24）	**箱崎和久**	**奈良文化財研究所研究室長（H25～）**
	伊東龍一	**熊本大学大学院教授（R3～）**		
造園学	中村　一	京都大学教授（S63～H20）	**杉本正美**	**九州芸術工科大学教授（S63～）**
	安原啓二	元文化庁調査官（H16～22）	田中哲雄	前 東北芸術工科大学教授（H22～24）
	本中　眞	**奈良文化財研究所所長（R3～）**		
都市工学	渡辺定夫	東京大学教授（S63～H24）		
環境設計学	**包清博之**	**九州大学大学院教授（H25～）**		
文化経済学	**澤村　明**	**新潟大学教授（H27～）**		

アミ掛けは現委員、（　）内は年度

3．報告書の作成

報告書は調査が先行した谷部分・南館部分の報告書作成にまず取り組み、次に北館へと移行し、平成20（2008）年度に『鴻臚館跡18 ―谷（堀）部分の調査』で谷部分について報告した。ついで23年度に『鴻臚館跡19 ―南館部分の調査（1）』で南館部分の建物遺構について、24年度に『鴻臚館跡20 ―南館部分の調査（2）』で建物遺構以外の遺構のうち第Ⅰ・Ⅲ期調査分について報告した。25年度に『鴻臚館跡21―南館部分の調査（3）』として、建物遺構以外の遺構のうち第Ⅳ期調査分（平和台野球場跡地南半）について報告し、南館部分の鴻臚館関係遺構の調査報告は完了となった。北館については27年度に『鴻臚館跡22―北館部分の調査（1）』として建物遺構を中心に報告し、28年度に『鴻臚館跡23 ―北館部分の調査（2）』として建物遺構以外の遺構について報告し、北館部分の鴻臚館関係遺構の調査報告は完了となった。29年度に『鴻臚館跡24― 総括概要編』として、南館、北館の遺構・遺物の概要を報告し、30年度に『鴻臚館跡25 ― 総括編』として、これまでの調査で確認した鴻臚館に関する遺構・遺物を総括した。（菅波）

今回の報告では、これまでの鴻臚館跡発掘調査で確認された中世の遺構と遺物について報告する。鴻臚館廃絶後の時期であり施設としての連続性は考えられていないが、鴻臚館跡発掘調査時に確認されたものであるので、同シリーズ『鴻臚館跡26 ―中世編』として刊行するものである。

Tab.3　鴻臚館跡関係調査一覧　　令和5年3月現在

年度	調査番号	鴻臚館跡調査次数	福岡城跡調査次数	調査地	調査原因	調査面積	調査期間	調査担当者	報告書ほか
S.26	5102	1		三の丸中央部	テニスコート建設		5108（3日間）	九州文化総合研究所	1, 30, 32
S.38	6301	2	1	三の丸東郭	裁判所建設	596	631007 ～ 631105, 640327 ～ 640331	福岡県教育委員会	26, 31
S.62	**8747**	**3**	**9**	**三の丸中央部**	**野球場改修**	**650**	**871225 ～ 880120**	**山崎純男・吉武学**	**1, 2**
S.63	**8829**	**4**	**10**	**三の丸中央部**	**範囲確認**	**856**	**880727 ～ 881210**	**山崎純男・吉武学**	**1, 19~21**
H.1	**8910**	**5**	**13**	**三の丸中央部**	**範囲確認**	**1,200**	**890420 ～ 891207**	**山崎純男・吉武学**	**1, 19~21**
H.2	**9005**	**6**	**15**	**三の丸中央部**	**範囲確認**	**1,300**	**900409 ～ 910131**	**山崎純男・吉武学**	**1, 19~21**
H.3	**9130**	**7**	**17**	**三の丸中央部**	**範囲確認**	**1,000**	**910501 ～ 920331**	**山崎純男・瀧本正志**	**3, 19~21**
H.4	9218	8	19	三の丸中央部	範囲確認	1,670	920615 ～ 921030	山崎純男・瀧本正志	4, 19~21
H.4	**9236**	**9**	**20**	**三の丸中央部**	**範囲確認**	**430**	**920910 ～ 930331**	**山崎純男・瀧本正志**	**4, 19~21**
H.5	9326	10	22	三の丸西郭	範囲確認	450	930816 ～ 940228	田中壽夫・瀧本正志	5
H.6	**9420**	**11**	**27**	**三の丸西郭**	**史跡整備**	**50**	**940606 ～ 940731**	**田中壽夫・瀧本正志**	**6, 19~21**
H.6	9432	11	28	三の丸西郭	範囲確認	850	940801 ～ 950320	田中壽夫・瀧本正志	6
H.6	9463	11	30	三の丸東郭	範囲確認	60	950201 ～ 950217	田中壽夫・瀧本正志	6
H.7	**9537**	**12**	**31**	**三の丸西郭・中央部**	**範囲確認**	**300**	**951101 ～ 960329**	**田中壽夫**	**8, 19~21**
H.8	**9620**	**13**	**35**	**三の丸中央部**	**範囲確認**	**450**	**960704 ～ 961204**	**田中壽夫**	**8, 19~21**
H.9	**9736**	**14**	**39**	**三の丸中央部**	**範囲確認**	**204**	**970818 ～ 980131**	**田中壽夫**	**9, 19~21**
H.10	9807	15	41	野球場跡	範囲確認	230	980410 ～ 980416	田中壽夫・池崎讓二	10
H.10	9831	16	42	野球場跡	範囲確認	930	980922 ～ 990120	塩屋勝利・池崎讓二	10
H.11	**9910**	**17**	**43**	**野球場跡南半**	**範囲確認**	**3,500**	**990422 ～ 000315**	**塩屋勝利・池崎讓二**	**11, 18~21**
H.12	0008	18	44	野球場跡南半	範囲確認	1,750	000425 ～ 010316	塩屋勝利・池崎讓二	12, 18
H.13	0109	19	47	野球場跡南半	範囲確認	2,000	010521 ～ 020329	折尾学・池崎讓二	13, 18
H.14	0218	20	49	野球場跡南半	範囲確認	1,200	020513 ～ 030331	折尾学・大庭康時	14, 15, 18
H.15	0309	21	50	野球場跡南半	範囲確認	2,425	030506 ～ 040331	折尾学・大庭康時	16, 18~21
H.16	0415	22	51	野球場跡南半	範囲確認	2,110	040401 ～ 050331	折尾学・大庭康時	17, 18
H.17	0502	23	52	野球場跡南半	範囲確認	2,110	050404 ～ 060331	横山邦継・大庭康時	17, 18, 22, 23
H.18	0617	24	57	野球場跡北半	範囲確認	820	060401 ～ 070331	大庭康時・中村啓太郎	22, 23
H.19	0706	25	59	野球場跡北半	範囲確認	504	070401 ～ 080331	吉武学・中村啓太郎	22, 23
H.20	0821	26	60	野球場跡北半	範囲確認	860	080701 ～ 090331	吉武学・中村啓太郎	22, 23
H.21	0906	27	61	野球場跡北半	範囲確認	900	090401 ～ 000331	吉武学・中村啓太郎	22, 23
H.22	1013	28	62	野球場跡北半	範囲確認	970	100602 ～ 110331	吉武学・久住猛雄	22, 23
H.23	1116	29	65	野球場跡北半	範囲確認	500	110601 ～ 111222	常松幹雄・吉武学	22, 23
H.24	1205	30	69	野球場跡北半	範囲確認	1,180	120417 ～ 130329	吉武学	22, 23
H.25	1314	31	71	野球場跡北半	範囲確認	860	130701 ～ 140328	菅波正人	22, 23
R.1	1959	32	80	三の丸東郭（福岡高等裁判所跡地）	範囲確認	3,120（㎡）	200110 ～ 220715	中村啓太郎・阿部泰之・吉田大輔	未報告

※アミ掛けの欄は本書に関係する調査

鴻臚館跡関係調査報告書等一覧

※ 番号横の○は本報告、◎は整備報告、それ以外は概報と論文など

1. 福岡市教育委員会『鴻臚館跡Ⅰ発掘調査概報』福岡市第270集 1991
○2. 福岡市教育委員会『鴻臚館跡Ⅱ』福岡市第315集 1992
3. 福岡市教育委員会『鴻臚館跡Ⅲ』福岡市第355集 1993
4. 福岡市教育委員会『鴻臚館跡4 ―平成4年度発掘調査概要報告―』福岡市第372集 1994
5. 福岡市教育委員会『鴻臚館跡5 ―平成5年度発掘調査概報―』福岡市第416集 1995
6. 福岡市教育委員会『鴻臚館跡6 ―平成6年度発掘調査概要報告―』福岡市第486集 1996
◎7. 福岡市教育委員会『鴻臚館跡第1期整備報告―』福岡市第487集 1996
8. 福岡市教育委員会『鴻臚館跡8 ―平成7・8年度発掘調査概要報告―』福岡市第545集 1997
9. 福岡市教育委員会『鴻臚館跡9 ―平成9年度発掘調査概要報告―』福岡市第586集 1998
10. 福岡市教育委員会『鴻臚館跡10 ―平成10年度発掘調査概要報告―』福岡市第620集 1999
11. 福岡市教育委員会『鴻臚館跡11 ―平成11年度発掘調査報告―』福岡市第695集 2001
12. 福岡市教育委員会『鴻臚館跡12 ―平成12年度発掘調査報告―』福岡市第733集 2002
13. 福岡市教育委員会『鴻臚館跡13 ―平成13年度発掘調査報告―』福岡市第745集 2003
14. 福岡市教育委員会『鴻臚館跡14』福岡市第783集 2004
15. 福岡市教育委員会『鴻臚館跡15 ―平成14年度発掘調査報告書―』福岡市第838集 2005
16. 福岡市教育委員会『鴻臚館跡16 ―平成15年度発掘調査報告書―』福岡市第875集 2006
17. 福岡市教育委員会『鴻臚館跡17 ―平成16・17年度発掘調査報告書―』福岡市第968集 2007
○18. 福岡市教育委員会『鴻臚館跡18 ―谷（堀）部分の調査―』福岡市第1022集 2009
○19. 福岡市教育委員会『鴻臚館跡19 ―南館部分の調査（1）―』福岡市第1175集 2012
○20. 福岡市教育委員会『鴻臚館跡20 ―南館部分の調査（2）―』福岡市第1213集 2013
○21. 福岡市教育委員会『鴻臚館跡21 ―南館部分の調査（3）―』福岡市第1248集 2014
○22. 福岡市教育委員会『鴻臚館跡22 ―北館部分の調査（1）―』福岡市第1300集 2016
○23. 福岡市教育委員会『鴻臚館跡23 ―北館部分の調査（2）―』福岡市第1326集 2017
○24. 福岡市教育委員会『鴻臚館跡24 ―総括概要編―』福岡市第1357集 2018
○25. 福岡市教育委員会『鴻臚館跡25 ―総括編―』福岡市第1383集 2019
○26. 福岡市教育委員会『史跡―福岡城跡―東の丸の発掘調査―』福岡市第546集 1997
○27. 福岡市教育委員会『福岡城址 内堀外壁石積の調査』福岡市第101集 1983
28. 池崎讓二・森本朝子『福岡市立歴史資料館所蔵の高野コレクション』福岡市第101集 1983
29. 弓場知紀『出光美術館の高野コレクション』福岡市第101集 1983
30. 田崎博之・矢野佳代子『九州大学考古学研究室所蔵の平松台出土遺物』福岡市第101集 1983
31. 福岡県教育委員会『史跡福岡城跡 発掘調査概報 1963秋・1964春』福岡県文化財調査報告書第34集 1964
32. 高野孤鹿『平和台の考古史料』橋本1972

第二章　遺跡の位置と環境

1.遺跡の位置と周辺環境

国指定史跡「鴻臚館跡」は、福岡市中央区に位置する国指定史跡「福岡城跡」地内にあり、重複指定を受けている。福岡城跡は、博多湾に注ぐ各河川が形成した沖積地（福岡平野）のほぼ中央に位置する丘陵（旧称福崎）上に築かれた近世の城郭で、鴻臚館跡は丘陵の東側、標高７～９ｍ地点で確認された。この丘陵は鴻巣山（100m）から派生する丘陵で、丘陵先端部の北方向にある荒戸山（荒津山／西公園、48m、Fig.2-B）とともに第三紀層から構成される。

鴻臚館跡が位置する城内での頂部は、福岡城天守台（33.5m）である。また築城時に南につづく丘陵を掘り切り、さらに北西にあった本丸よりも高い山（御鷹屋敷）を削ったことが知られる（『筑前国続風土記』）。なお、天守台と荒戸山では箱式石棺が発見されていて、それぞれ旧来の地形を概ね維持していることが分かる。

丘陵の西側は、沿岸に３列の砂丘が形成され、後背には湿地が広がっていた（下山ほか1991）。最も湾側の新しい砂丘上には元寇防墨が築かれた。砂丘後背については、福崎の汀まで入海で広い潮入の潟地であり、荒戸山の下は大船が泊まるほどの深い海であったという（『筑前国続風土記』）。この辺りの足場の悪さは、蒙古襲来の時、竹崎季長が鳥飼の汐干潟に向かった際に足を取られて敵を逃したというエピソードにもみえる（『蒙古襲来絵詞』、堀本2013）。この湿地の周辺には、モンゴル軍が段階的に陣取った赤坂山（北端は福崎丘陵）、別府、祖原山（Fig.2-J）がある。

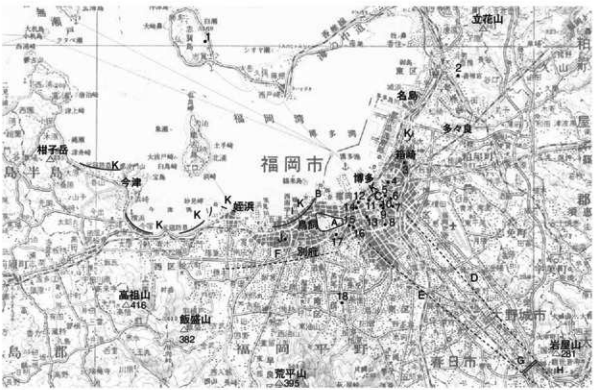


Fig.2　周辺遺跡分布図（1/200,000）

A 鴻臚館跡（福岡城内）　B 荒戸山（西公園）　C 博多遺跡群　D～F 官道　G 水城　H 大宰府政庁跡　I 百道原（紅葉原）J 祖原（亀原）
K 元寇防墨　1 志賀海神社　2 香椎宮　3 筥崎宮　4 崇福寺　5 善導寺　6 聖福寺　7 承天寺　8 住吉神社　9 櫛田神社　10 大乗寺
11 妙楽寺　12 天神ボーリング地点ａ　13 天神ボーリング地点ｂ（肥前堀第3次調査地点）　14 天神3丁目綻石出土地点
15 豊国丸山古墳（前方後円墳）　16 豊国茶臼山古墳（前方後円墳）　17 豊国茶臼塚古墳（前方後円墳）　18 櫛井川A遺跡

丘陵の東側は、西側よりも標高が若干高く、平坦な地形である。那珂川が運ぶ砂の堆積と海流による堆積が浜堤を形成するが、博多に比べ起伏が乏しい。浜堤の南側は標高が下がり、西側同様に低湿地の様相を示す。福岡城肥前堀第３次調査時に海岸方向の地形を地質学的に検証したところ、天神３丁目付近（Fig.2-12）から肥前堀第３次調査地点（Fig.2-13）のさらに南側まで砂層が展開することが明示された（市報293集）が、そのやや内陸側の天神３丁目では昭和48年のビル工事の際に碇石が発見され（Fig.2-14、現在の天神橋口交差点西側フタタビル、市報101集）、この地がかつて海であり、段階的に砂地が形成されたことを物語る。また肥前堀第３次調査では、肥前堀が箱崎砂層を掘ったものであり、出土した古墳時代の土器や中世の陶磁器が風化していないことが報告され、付近で人々の営みがあった可能性が指摘された。旧鴻臚館北館の北側でも中世のピットなど生活痕跡が見られる。北側に浜堤が形成され安定したのちは、人々の生活の場となっていたであろうことが分かる。この土地の形成に影響を与えた那珂川について、『蒙古襲来絵詞』に河口の様子を想像できる場面がある。竹崎季長が博多から赤坂に向かう際に住吉を通る場面である。現在では大回りに見えるルートであるが、13世紀ころの那珂川の河口は渡ることを断念するほど大きく開いていたことが想像できる（堀本2013）。

以上のとおり福岡城が位置する旧称福崎の丘陵は、北に海、東西に湿地・低地を配し、福崎の名のとおり湾に突き出した地形であり、福岡平野の中では高さのある山である。福岡城本丸の地には警固大明神と若一王子が祀られたことが知られる。若一王子は熊野信仰に由来するもので、いつから祀られたか文献には残っていないが、中世を描いたとされる住吉神社所蔵の絵馬博多古図には、由緒ある寺社とともに、丘陵上に「若一王子」と記されている。熊野信仰については、他宝坊が「他国の調伏をかへすべし」という夢想をうけ、永仁元年（1293）に肥後国の石築地と警固の分担である生の松原に熊野神を勧請したとある（川添1973）。福崎丘陵はその立地から常に警固の前線であり、蒙古襲来時には戦いの場となったことが知られる。頂部が周囲を見渡せる好立地であることを差し引いても、この地に警固大明神と若一王子が祀られたことは、中世期こそ意義深く思える。博多古図来歴にはやや難があるが、決して大きくない若一王子が重視されたことは、福崎の地が霊場として認識されていたと考え得る材料であり、またそのきっかけは蒙古襲来に端を発する祈りであったとも考えられる。

川添昭二1973「蒙古襲来と中世文学」『日本歴史』1973年7月号（第302号）
下山正一、磯望、野井英明、高塚潔、小林茂、佐伯弘次1991「福岡市鳥飼低地の海成第四系と更新世後期以降の地形形成過程」九州大学理学部研究報告、地球惑星科学.17（1）
林文理2005「博多湾の名所―生の松原―」福岡市博物館リーフレットNo.271
福岡市教育委員会1983『福岡城址』福岡市高速鉄道関係埋蔵文化財調査報告Ⅲ.福岡市埋蔵文化財調査報告書第101集（池崎謙二「遺跡の立地と歴史的環境」）
福岡市教育委員会1992『福岡城肥前堀第3次調査報告』福岡市埋蔵文化財調査報告書第293集（柳沢一男「まとめ」）
堀本一繁2013「中世博多の風景」『自然と遺跡からみた福岡の歴史』新修福岡市史特別編

2.周辺地形

鴻臚館跡が立地する旧地形（Fig.3）は、史資料や発掘調査で得られた地形データとあわせると、以下のように推定することができる。

南の大休山（現動植物園）から博多湾に延びる丘陵の先端が鴻臚館跡の立地する「福崎」であり、この丘陵は南東～北西方向に延び、福岡城天守台と本丸北部、御鷹屋敷の３ヵ所に丘陵の頂部があり、最も高い頂部は御鷹屋敷にあった。丘陵西側は入江（草香江）で、対岸（西岸）から荒津山に向かって砂洲が延びていた。荒津山の直下は水深のある海で、古代には大型船の停泊地になっていたとみられる。天守台から御鷹屋敷に延びる丘陵から枝別れした２筋の小枝丘が東へと延びており、この枝丘を古代に削平造成して二つの平坦地を造り、鴻臚館（筑紫館）を建設している。鴻臚館の東は谷部を

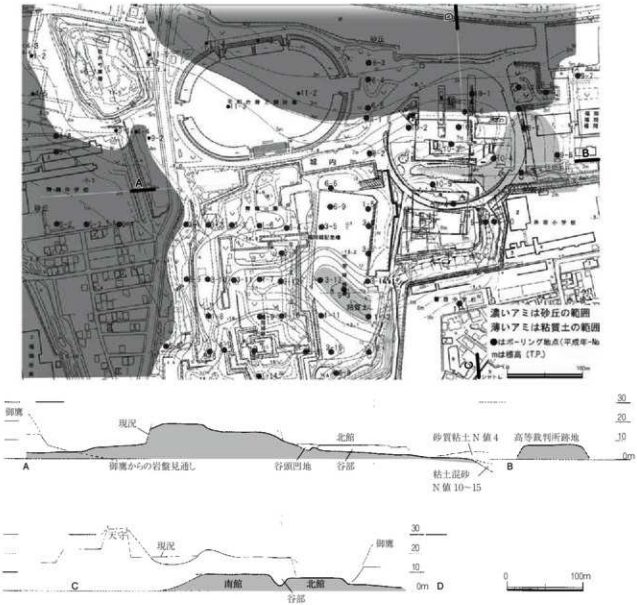


Fig.3　鴻臚館跡周辺における造成前の旧地形復元図・断面見通し図（水平 1/5,000、垂直 1/2,000）

経て小さな丘陵（高等裁判所跡地）があり、この周辺には陸地化して間もない沖積地が広がっていたと推定される。枝丘陵の北辺には海浜砂丘が形成され、砂丘は海へ向かって浅く窪んだのち一度高まり、遠浅の海へと続いていた。一方、枝丘陵の南辺は鴻臚館の南から福岡城本丸中央に向かって深い谷が食い込んでいた。

鴻臚館は自然の谷をそのまま４m以上の深い堀として取り込み、周囲も同程度の高さの崖面ないし斜面とした台地上の平坦地に築造されていた。客館とはいえ隔離性の強い構造をなし、新羅海賊などへの備えのための防御性も高く、かつ眺望がよく、逆に周囲からも良く見え、監視しやすいという地形的な特徴を備えていたと言える。中世後期には寺院が設置されたと考えられ、また近世初期には黒田長政により福岡城が築城されたが、長政が福崎の地を城の用地とした背景には、当時この地に城を思い描けるような、例えば石山本願寺のような砦的な何かがあった可能性も考えられる。時代ごとに改変が加えられ、各次代ではその地形的特徴を活かして土地利用された可能性が強い。（吉武）

3.土地利用の変遷

(1) 鴻臚館造営前

鴻臚館周辺の砂地では、古墳時代以前の遺物が出土する。1963年・1964年に福岡県が高等裁判所（当時）地内で行った発掘調査では、鴻臚館台地の東側から状態のよい弥生土器壺が出土した※1。Fig.4-2は台地北端斜面SX19500（n760グリッド）で出土した抉入柱状片刃石斧である。抉部は叩打成形で、硬質、縦軸で四面研磨、先端を折損している。西新、箱崎など安定した砂丘・海浜で古くから生活があったように、鴻臚館周辺でも人の営みがあったことが推測できる。

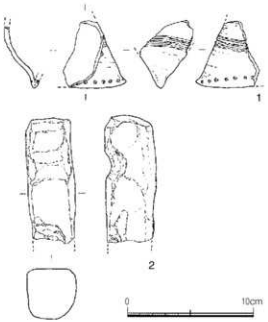


Fig.4　鴻臚館跡出土の前時代遺物（1/3）

また台地上は、鴻臚館造成前は細尾根で、前時代には古墳が営まれていた。SO14512（i-j800グリッド）は、6世紀後半から7世紀前半までの古墳で（『鴻臚館跡22』）、鴻臚館造営の下で僅かに痕跡を残している。また、福岡平野では珍しい皮袋形瓶の破片（Fig.4-1）が古代以降の土坑SK14514（g810グリッド）から出土した。灰色で精良胎、焼成良好で硬質である。南館域からは青銅製の破鏡や銅鏃（『鴻臚館跡20』Fig.187）、5～6世紀代の須恵器が出土し、東の高等裁判所跡地では、溝から6世紀後半の須恵器が出土した（市報546集）。鴻臚館域の南側では、警固丸山古墳・警固茶臼山古墳※2（Fig.2-15・16）、警固茶臼塚古墳※3（Fig.2-17）などの前方後円墳が知られ、福岡城天守台や西公園（Fig.2-B）では箱式石棺が見つかっている。眺望優れた福崎の丘陵とその支丘には、前述の前方後円墳や首長クラスの墳墓とともに群集墳が造営された可能性が高い。

※1 九州歴史資料館所蔵資料閲覧
※2 福岡市教育委員会2006「警固丸山古墳第1次調査」『福岡市埋蔵文化財年報VOL.19』（山崎龍雄）
※3 福岡市埋蔵文化財分布地図

(2) 鴻臚館時代

鴻臚館跡の建物遺構は五時期（第Ⅰ～Ⅴ期）に区分される。第Ⅰ期は、北館の石垣内の須恵器の年代観から、7世紀後半に位置づけられる。第Ⅱ期は、北館の石垣にかかわる盛土の出土遺物から、石垣は8世紀前半に、石垣に後出する布掘り区画塀は、切り合いから8世紀中頃～後半以降に位置づけられる。南館の布掘り区画塀と便所遺構は8世紀前半～中頃に比定されており、時期差を生じることになるが、8世紀中頃～後半に北館側の大規模な盛土造成と布掘り区画塀やそれに伴う施設の造営が行われる。これらは9世紀前半までには第Ⅲ期の礎石建物に建て替わり、第Ⅲ期の建物は9世紀後半には廃絶する。

建物関係遺構は第Ⅰ～Ⅲ期で確認している。第Ⅰ期は、南館は規模東西63m、南北33m程度で、長舎が中心建物を取り囲む構造となる。北館での数棟程度の建物を塀で囲む構造と比較すると、両者に儀礼空間と宿舎空間といった機能差があったことが想定される。第Ⅱ期は、掘立柱式の東門と布掘り区画塀が検出されたが、塀の内部で柱穴が確認できないことから、建物は礎石式であったと想定される。第Ⅲ期は、第Ⅱ期の中軸線を踏襲し、施設の拡張と大型の礎石建物を回廊で取り囲む構造に改変

している。大型の礎石建物は宿舎と考えられ、第Ⅱ期でも同様の建物があったと想定される。

第Ⅳ・Ⅴ期については、区画溝を除き、明確な建物遺構を確認していないが、この時期に比定される瓦が多数出土することから瓦葺建物が存続したことは間違いないであろう。南館の土坑群は貿易陶磁器や瓦、獣骨などを廃棄したもので、概ね第Ⅳ・Ⅴ期に位置づけられる。また11世紀代とみられる瓦が谷の北斜面に多く出土する状況から、鴻臚館末期には建物が北館に集約された可能性が高い。

鴻臚館の造成について、台地上で確認される第Ⅰ期建物柱穴の深さが南館で５~10cm程度、北館では70cm以下といずれも浅く、これに比べて第Ⅱ期布掘り区画塀柱穴は南館・北館ともに1.3m前後あることから、第Ⅰ~Ⅱ期の間に南館で１m以上の、北館でその半分程度の大規模な削平が行われたと推定される。北館北西隅のトレンチ１では調査区南端から約７m北に基盤の風化頁岩と整地層の境界を確認し、Ⅱ期の布掘り区画塀はこの境界部分に掘り込まれることから、布掘り区画塀の造営に先だって、整地されたと考えられる。北西隅の矩形のコーナーと中央の堀の西側の立ち上がり、南館の西側の造成ラインはほぼ一直線上に並ぶことから、このラインが設計の基準線の一端を示すものと推測される。北側の崖下は標高約３mの砂丘面に瓦を敷き、盛土造成して平坦面を形成する。次の第Ⅲ期への建て替えに際しても平坦台地の拡張が行われるが、この時の削平は大きなものではない。削平によって生じた土砂は台地周囲の埋め立てに使用されたものとみられ、中央谷の北斜面では特に埋め立てが顕著で、土留めの石垣や石積みが重複して構築されており、繰り返し造成が行われたことが窺われる。（菅波）

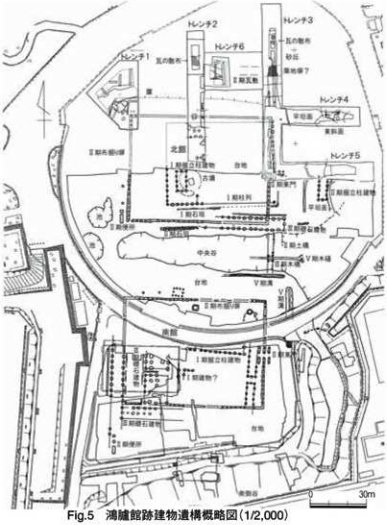


Fig.5　鴻臚館跡建物遺構概略図（1/2,000）

第三章　調査の記録

1.中世期の地形

ここでは築城盛土直下の地形を概観する。Fig.6で用いた土層図は、一部に既刊報告の図面を左右反転したものがある。図内の網掛け部分および太線が中世期の層または面である。

鴻臚館時代に形作られた台地は、北館域で、特に中世末期において改変されるが、南館域では概ね古代の地形を利用した様相である。なお旧北館域の北辺が抉れた地形をしているのは、古代の時期すでに風化崩落、斜面化した可能性が指摘されている（『鴻臚館跡22』p.138）。

南北断面―西側　南から10―11―1ラインは鴻臚館台地の西側をとらえ、南館域で標高9.3m（土層図9・10）、谷付近南側で標高8m（土層図11）、北館域で標高7.2m（土層図1）となる。谷は古代層直上で5.4mを測るが、その後も徐々に埋没し、築城直前の標高は西側で6.4m（Fig.50）である。

南側で平坦面をなす標高9.3m前後という高さは、遺存する礎石の上面標高とほぼ同じであり、礎石を残したまま旧状維持で土地利用されたことが見て取れる。土層図10にある南端の落ちは、鴻臚館時代の台地南限ではなく、中世期の遺構（地形）を表している。古代の整地層はこの中世遺構に切られるまで水平を保っているので、古代の平坦面は中世の落ちと同様もしくはさらに南下する可能性もある。土層図11は鴻臚館時代の建物基壇の断面である。基壇は標高8.4mと原状をとどめないが、基壇下（北側）で一部福岡城築城の盛土が残っていた。築城盛土の直下が標高約8mである。土層図1では、11世紀以降3時期の盛土が見られ、築城盛土直下の台地上の標高は約7.2mである。

南北断面―東側　南から8―7―3ラインは、鴻臚館台地の東側をとらえている。南館台地裾で標高4m程度（土層図8）、南館域で標高8m程度（Fig.7）、谷開口部で標高4m程度（土層図7）、北館域で標高7m程度（Fig.7）、北館台地の北側は砂質の地となり標高4m（土層図3）程度である。

土層図8の南側に残る旧地形は室町時代～江戸時代初頭の包含層で、台地側の標高6～7m付近にある層は古代の包含層が残ったものである。土層図7では鴻臚館第Ⅰ期～第Ⅱ期の石垣とその後の埋め土が地形の基盤となったことが分かるが、台地の落ち際に当たるので、頂部の標高は台地上の平坦面よりも低く表れている。土層図3、北館台地縁辺では自然堆積の様相を示し、斜面下には築城前すでに礎石が投棄されている。

東側の土地改変　北館台地の北東縁辺を削平し成形する（m750グリッド）。台地の東側では下段に複数の平坦面が造られる。一部、一度急峻になった地形に人為的に盛土し、のち斜面となる（土層図5）。土層図6東側も下段に平坦面SX17711（Fig.24）を造るが、ここでは割愛している。土層図6の箇所は台地の一段下で、鴻臚館時代では南北方向の建物（SB17701、SB17702）が配された段にあたる。鴻臚館台地を構成した整地層を除くと、不均一な層位である。古代整地層の際のすぐ下に面を意識した灰色砂層が薄く遺存する（『鴻臚館跡22』Fig.178グリッド2南壁土層58層）ので、中世期に大きく改変することなく古代の地形を利用したようである。この面一帯では、平坦面を囲むように厚みを見せる中世層がある（土層図6）。褐色～暗褐色を呈し、築城盛土との違いは明瞭である。西側の平坦面を東進拡張した痕跡と思われる。

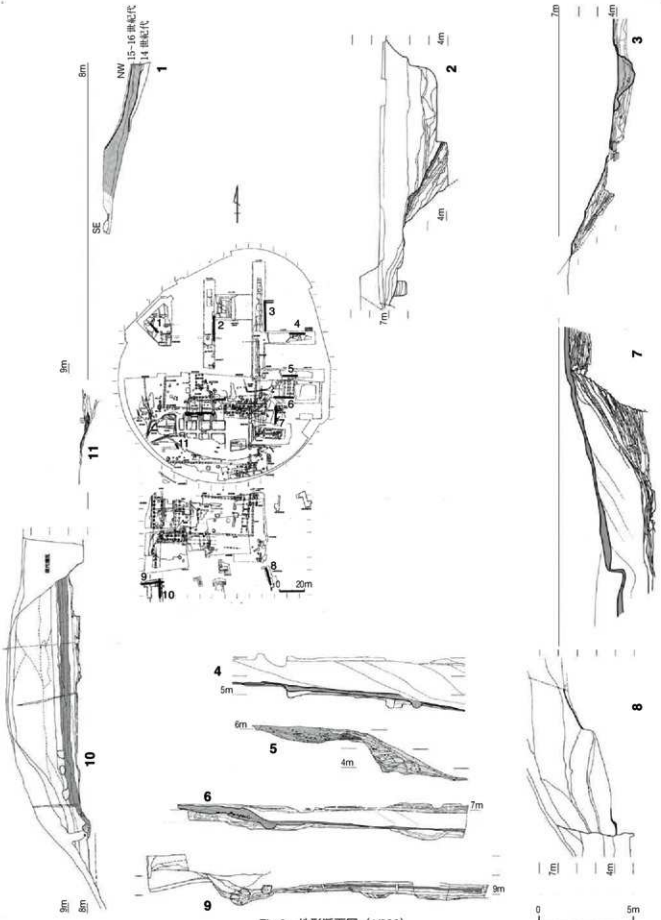


Fig.6　地形断面図（1/200）

2.調査概要

北館台地上　台地の大半は戦後のサッカー場や野球場の建設により削平を受けている。また北半は福岡城遺構保護のため部分的な調査にとどめた。確認した遺構は、造成地、池、溝などである。

中世の盛土（SM1208、SM25058など）は鴻臚館時代の盛土（SM1209など）に一部かぶさった状態で確認された。SM1208からは銅製の懸け仏（Fig.8-13）、当十銭の崇寧通宝（Fig.8-14）などが出土した。中世後半以降、SM1208上には、台地上端に沿う弧状の溝（SD1240など）と、台地上に矩形の区画溝（SD1222など）が形成された。溝の排水はSD1240から台地の法面を走る大溝SD17059を通って段下へ向かう。台地中央付近には、池の底面と思われる不整形の土坑群（SK14340、SK1261など）がある。北西端の造成遺構（SM25058）では、11世紀代、14世紀代、15～16世紀代の３時期の造成が確認された。各時期において嵩上げを図った様相を示す。

台地の西側は、鴻臚館時代から変わらず、西へ続く低い尾根状地形で、一部湿地化していた（SX1119）。

台地の東側縁辺には、12～13世紀の遺物を伴う池（SG23206）があり、池の下位から土壙墓（SR23211）に伴う遺物が一括出土した。また鴻臚館時代に東門前に設けられた一段下の平坦面では、地下式土坑（SK17004など）と建物などが営まれ、東側縁辺は一段下の平坦面造成時に切り崩されている。

北側斜面下　砂浜に鴻臚館時代整地が施され、中世の溝やピットなどはこの整地層に切り込んでいる。トレンチ６調査区においては、福岡城築城盛土直下の標高４～4.8mで４層の整地層（SM24139）が確認された。築城造成以前に行われた整地痕跡である。この整地層の下から15～16世紀の幅３mの溝（SD24137）が確認された。トレンチ１調査区でも類似の溝（SD25057）が土層で確認されている。

東側斜面下　低地面に形成した平坦面以外に、鴻臚館時代の段築法面を一部切り崩し形成した平坦面（SX17711ほか）がある。このうち平坦面SX17711は形成当初、生活域として利用されたと見え、域内を矩形の区画溝で囲み柱穴や土坑を多く残すが、のち築城前夜には泥土が堆積する。泥土面には溝があり、平坦面SX17711西隣には築城時の大規模土取り痕跡SX17194がある。背後に土取り痕跡があることから、泥土面の溝について、本格的な築城前の一時期に施されたか計画された石垣の胴木痕跡ではないかと考えている。なお調査区東側は、ボーリング結果により深い谷とみられているが、この成果は造成前の自然地形を表したものであり、土地改変痕跡の有無は不明である。

谷　鴻臚館時代の堀（SD1045）が自然堆積で池（SG1046）となり、築城直前まで残った。

南館台地上　鴻臚館時代の建物の礎石が複数個、戦後大規模な工事が入るまで原位置を保っていた。鴻臚館第Ⅱ期の東門位置を通る通路（SD244）は、鴻臚館時代の建物の礎石をよけて西進する（SD30）。SD30が消失する西端付近には梵鐘鋳造遺構（SK29）と溶解炉（SK139）がある。また、複数の地下式土坑が確認された（SK28、SK227など）。

特筆すべき遺物として、石製香炉がある（Fig.93-97）。体部を大きく欠損するが、残存箇所は篠栗町太祖神社蔵の香炉と類似する。近辺では、高野孤鹿氏によって「貞和六年」銘の石塔（Fig.94-99）が発見されている。

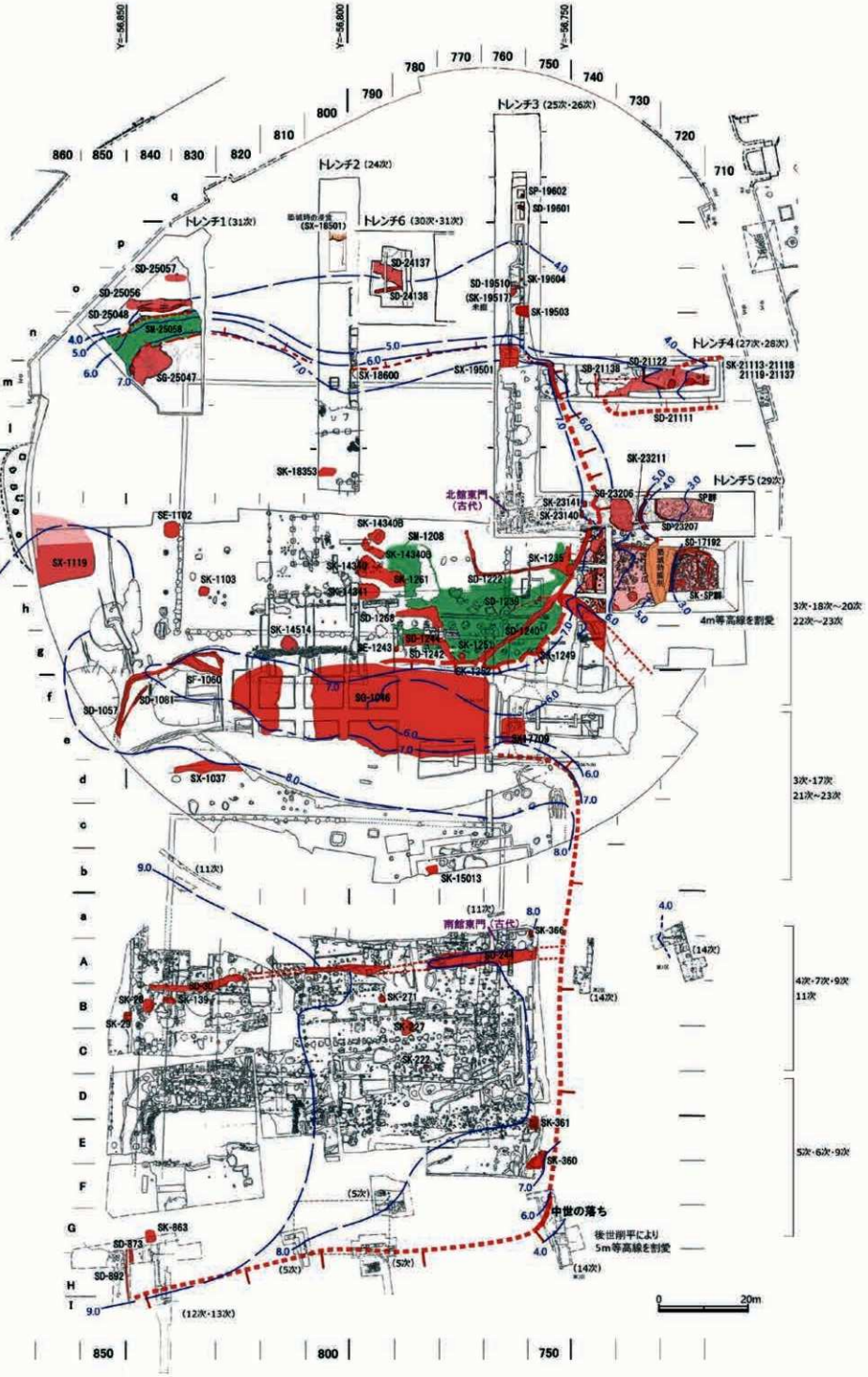


Fig.7 全体図（1/800）

3.中世の遺構と遺物

(1) 整地層

SM1208（第19次調査、i750-g790グリッド） Fig.7、(『鴻臚館跡13』Fig.10、『鴻臚館跡18』Ph.42)

平成13年度調査区の南辺付近で、堀の残存地形であるくぼみを埋める形で検出されている。東南隅付近では、整地土は東南に向かって下降するが、その下面付近から、ずれ落ちかけた第Ⅲ期礎石建物の礎石が発見されている。(大庭)

SM1208出土遺物 Fig.8 **1**～**4**は白磁碗・皿の底部で、4は口禿皿の底部である。**5**・**6**は龍泉窯系青磁碗と合子蓋、**7**は交趾三彩壺破片、**8**は陶器甕、**9**・**10**は粉青皿・鉢、**11**は備前擂鉢、**12**は瓦器湯釜である。**13**の銅製懸け仏は発見当時、仏像周囲に緑青の広がりがあり、鏡板等の痕跡があった可能性がある。**14**は当十銭の崇寧通宝である。中世遺物のほかに古代遺物、近世遺物が出土した。**15**は穿孔を有する寛永通宝である。

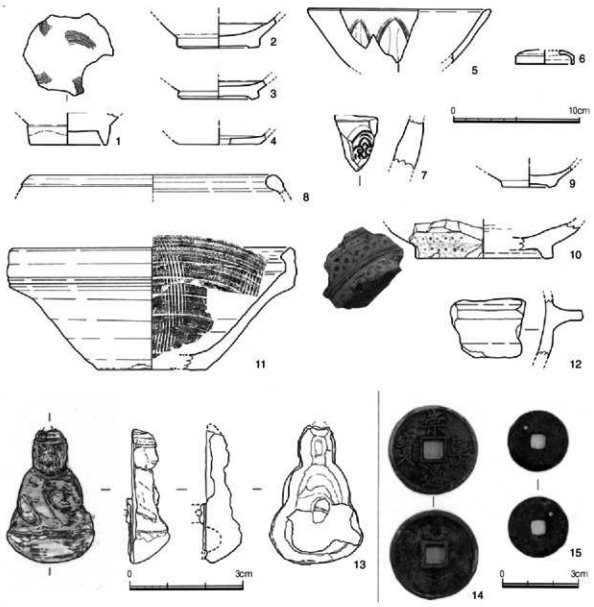


Fig.8 SM1208 出土遺物実測図（13は 1/1、14 ～ 15は 2/3、他は 1/3）

SM24139（第31次調査、トレンチ6調査区、p780-o790グリッド） Fig.46トレンチ１土層

築城の大規模工事以前に行われた整地の痕跡である。福岡城築城時の整地層を除去すると、標高約4.0～4.5mで鴻臚館所用瓦を多量に含む整地層を検出した。１～４層が確認され、うち二層は土の層を挟んだ瓦混土層である。堆積状況は北側の砂浜方向に向けて傾斜する。この整地層の下位には15～16世紀の溝SD24137がある。（菅波）

SM24139出土遺物 Fig.9 **1**は白磁輪花碗、**2**は龍泉窯系碗の底部、**3**は白磁皿で口禿である。いずれもトレンチ１からの出土で、１・３は２層から、２は１層から出土した。また、２層から平城宮式鬼瓦と類似点のある瓦が出土した（Fig.99）。遺物は古い様相を示すが、検出状況から遺構時期は15～16世紀以降から築城直前の間である。

SM25058（第31次調査、トレンチ1調査区、n830-850グリッド） Fig.6-1、Fig.7

古代整地層の上層で、鴻臚館廃絶前後を含み11世紀代、14世紀代、15～16世紀代の３時期が確認された。整地は福岡城築城の際のものと異なり、鴻臚館時代の地形を踏襲するように行われている。整地層の中には多量の鴻臚館所用瓦が含まれていた。（菅波）

SM25058出土遺物 Fig.10～11 **1**は白磁碗で縁辺打ち欠きの加工品、**2～8**は青磁碗で、２・３は縁辺打ち欠き加工品である。３は見込みに方圏内「王」字がある。９は青磁壺で縁辺打ち欠きの加工品、**10・11**は青白磁の碗と合子蓋、**12・13**は朝鮮半島産の陶器、**14・15**は土師器坏、**16～22**は国産陶器である。16は陶器捏ね鉢、17～19は陶器甕で19は常滑産、20・21は東播の擂鉢、22は瀬戸産の耳付瓶子肩部で灰釉がかかる。**23～28**は瓦質土器で、鍋や擂鉢など生活用具のほかに27湯釜環付が出土している。**29**は嘉祐通宝（初鋳1056年）で、近世以降の整地層から出土したので参考資料である。

４・７・９・11は台地下に崩落した瓦層から、それ以外は整地層からの出土である。29は北西隅（n850グリッド）の近世以降整地層から出土した。

SM1208

No.	遺物名	遺物情報	法量(復元値)［残存値］
1	白磁 碗	白灰色精良 わずかに青味ある白色釉	底6.2　高[2.9]
2	白磁 碗	灰色精良胎 僅かにオリーブ色味ある白色釉	底(6.6)　高[2.5]
3	白磁 碗	白灰色精良胎 赤味ある白色釉 焼成良好	底(6.4)　高[1.6]
4	白磁 皿	口禿 白色精良胎 僅かに青味ある白色釉 堅緻	底(6.5)　高[0.8]
5	青磁 碗	龍泉窯系 深灰色精良胎 深緑色釉 外面細かい貫入	口(14.6)　高[4.3]
6	青磁 合子蓋	龍泉窯系 精良胎 オリーブ色釉 堅緻	口(4.6)　高[1.1]
7	陶器 壺	交趾三彩(トラディスカット) 黄白色精良胎 外面に緑色釉・黄色釉掛け分け 内面に褐色釉 やや軟質	—
8	陶器 壺	黄味ある灰色精良胎 褐色釉 極薄掛け	口(19.3)　高[1.5]
9	粉青 皿	刷毛目粉青 良胎 焼成良好 内外面共砂目4	底2.4　高[1.6]
10	粉青 鉢	印花粉青 灰色精良胎(黒色粒少含) 白色土象嵌 透明釉	底(10.8)　高[2.8]
11	備前 擂鉢	櫛目10~11条 胎土に粗石英粒を少含 堅緻	縁帯(23)　口(22.8) 底(8.6)　高9.7
12	瓦器 湯釜	浅茶褐色精良胎 羽下に煤 やや軟質	—
13	懸け仏	頭部一部欠損 背面に裏板痕と釘留孔【g750】	幅2.4 顔0.9 台座2.4 高3.6 顔1.1 身2.5 厚1.2
14	崇寧通宝	当十銭 回読 完形【j780】	外径3.49　厚＜0.25 方孔幅0.75　7.3g
15	寛永通宝	「宝」の上に穿孔1 対読【g760】	外径2.42　厚1.05 方孔幅0.52　2.4g

(cm)

SM24139

No.	遺物名	遺物情報	法量(復元値)［残存値］
1	白磁 碗	輪花 灰色精良胎 オリーブ色透明釉	口(14.8)　高[4.8]
2	青磁 碗	龍泉窯系 明灰色胎 硬質 灰色透明釉 畳付きに目痕	底5.5　高[2.4]
3	白磁 皿	口禿 灰白色良胎(微細黒色粒含) 淡灰色透明釉(やや失透) 内面細かな貫入	口(10.2) 底(5.8) 高2.9

(cm)

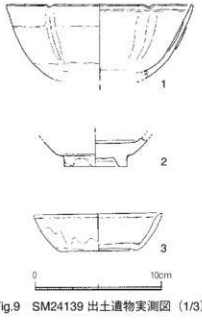


Fig.9 SM24139 出土遺物実測図（1/3）

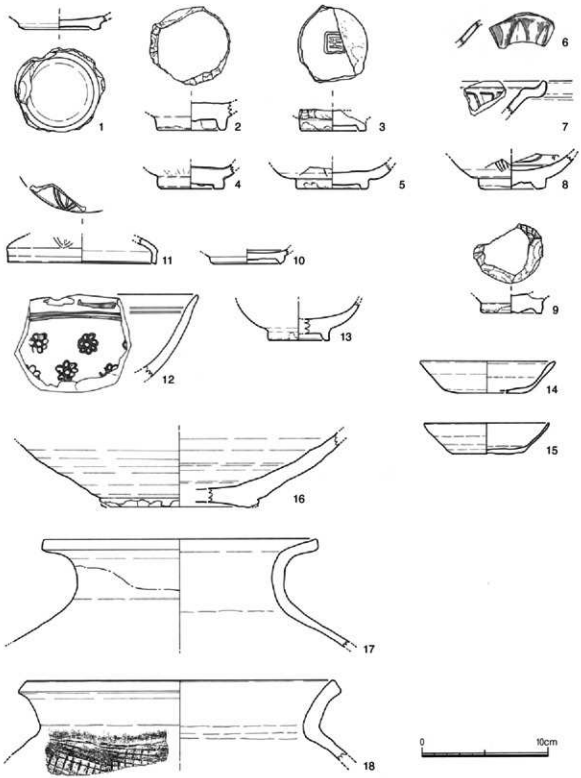


Fig.10　SM25058 出土遺物実測図 1（1/3）

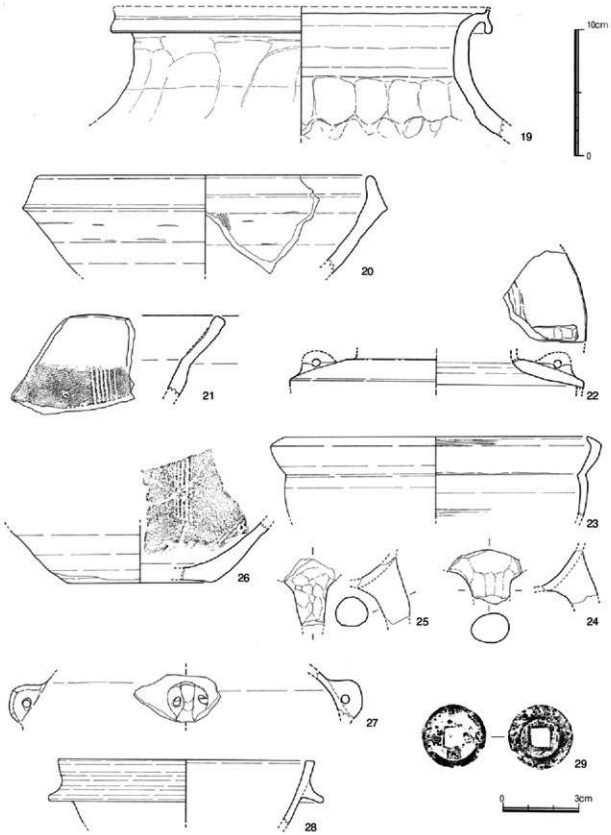


Fig.11　SM25058 出土遺物実測図 2（29は2/3、他は1/3）

SM25058

No.	遺物名	遺物情報	法量(復元値)[残存値]
1	白磁 碗 加工品	縁辺打ち欠き 福建産か 精良胎白色 釉わずかに灰青味	外形7.2 底6.5 高1.1
2	青磁 碗 加工品	縁辺打ち欠き 龍泉 やや粗胎灰色 釉やや緑色	外形6.2 底5.5 高2.1
3	青磁 碗 加工品	縁辺打ち欠き 円盤加工途中剥離 龍泉窯系 見込方圏内「王」字か「国」 灰色精良胎 淡オリーブ色釉	外径[5.4] 底5.3 高1.7
4	青磁 碗	龍泉窯 鎬蓮弁文 胎灰色 釉オリーブ色透明 高台内目痕	底5.5 高[2]
5	青磁 碗	類龍泉 外面劃花 胎淡小豆色 釉茶味オリーブ色	底5.8 高[2.2]
6	青磁 皿	龍泉窯系 鎬蓮弁文 精良胎やや灰味白色 釉青緑色透明	高[1.3]
7	青磁 盤	龍泉窯系 精良胎 釉緑ある青磁釉 被熱	高[2.4]
8	青磁 碗	同安窯系 やや粗胎明灰色 釉オリーブ色透明	底5.3 高[2.8]
9	青磁 杏 加工品	縁辺打ち欠き 越州窯系 灰色精良胎 オリーブ色釉 被熱	外形5.5 底径5 高1.2
10	青白磁 碗	景德鎮か 白色精良胎 青白色透明釉 貫入	底(5.8) 高[1.3]
11	青白磁 合子蓋	天井部外面花弁文 精良胎青緑がかる白色 外面透明釉 細かい貫入 口唇部施釉後削り	口(12) 高[2]
12	粉青 碗	白色土象嵌 灰色粗胎 淡オリーブ色透明釉 貫入 口縁に製作途中に割れ白色土が入り込んだ線あり	—
13	朝鮮青磁 碗	李朝/高麗 粗胎灰色 釉くすみ貫入	底(4.9) 径(9.5) 高[3]
14	土師器 坏	淡橙色胎(石英粒多・鉄分粒含) 口縁部に煤付着	口(10.8) 高2.2
15	土師器 坏	内ヘラ切の5板目 胎土に石英粒・金雲母粒・鉄分粒含む	口(10) 底5.9 高2.5
16	陶器 捏ね鉢	粗胎(石英粒多含) 見込使用摩耗 重ね焼き	底(12.6) 高[5]
17	陶器 壺	須恵質 灰色胎(黒色粒含) 外面に自然釉 被熱 タタキ目不明瞭	口(22) 頸部(16.5) 高[8.7]
18	国産陶器 壺	須恵質 灰色胎(石英粒含) 焼成良好 内面ナデ	口(25.7) 頸基部(24) 高[6.4]
19	常滑 壺	粗胎(石英粒多含) 硬質	口(30) 縁帯(30.4) 高[10.5]
20	東播 擂鉢	須恵質 濃灰色粗胎(石英粒等混入物多含) 硬質	口(27) 最大(29) 高[7.8]
21	東播 擂鉢	瓦質 片口部 粗胎茶味明褐色(石英粒含) 被熱	高[6.5]
22	瀬戸 瓶	耳付瓶 明灰色精良胎 灰釉(オリーブ色透明) 内面無釉	頸基部(12.8) 胴(23.3) 高[2.5]
23	瓦質 鍋	周防系 明灰色粗胎(石英粒含) 24と同一	口(24) 最大(26.4) 高[6.4]
24	瓦質 鍋	周防系 脚部破片 明灰色胎(石英粒・鉄分粒含) 煤付着 23と同一	—
25	瓦質 鍋	周防系 脚部 明灰色胎(石英粒多・黒色粒含) 煤付着	—
26	瓦質 擂鉢	擂目5条以上単位 黄褐色~灰茶褐色粗胎(大粒石英・鉄分含) 被熱	底(11.5) 高[4.8]
27	瓦質 湯釜	環付 暗灰色胎(微細石英粒含) 黒灰色	—
28	瓦質 羽釜	明灰色胎(微細石英粒少含)	口(20.4) 鍔(21.9) 高[5.2]
29	銅銭 嘉祐通宝	対読 篆書【整地層(近世以降) n850】	外径2.52 厚0.10 方孔幅0.72 2.4g

(cm)

(2) 台地縁辺から斜面下の平坦面

台地東側縁辺を北から順に、最後に北側斜面下について記述し、平坦面に付随する区画遺構などについても取り扱った。土坑などについては、別項に詳述する。

①トレンチ4の平坦面（第28次調査、m710-750グリッド） Fig.12～17

鴻臚館の北東角の確認、及び北館の地形、東側へと落ちる景観の解明等を調査目的として設定したトレンチである。調査区ほぼ全体が築城盛土に覆われ、風化頁岩岩盤は西隣のトレンチ3と接する部分に僅かに露出する程度である。

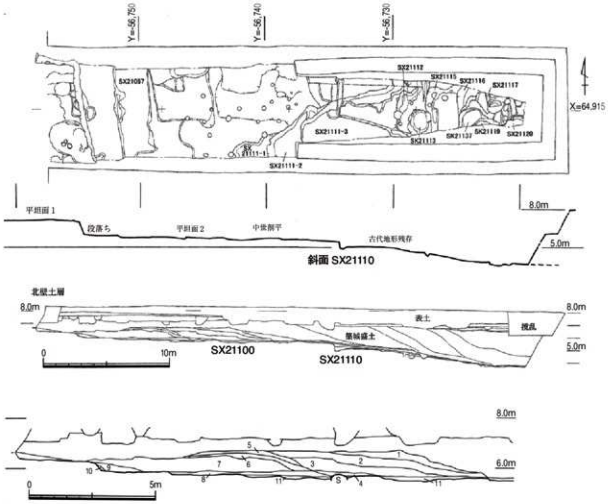
鴻臚館時代は東門前面に奥行20mの広場状の平坦面1（標高7m強）があり、この東は1mほど落ちて次の平坦面2（標高6m前後）となり、10mほど東で緩やかな斜面へと移行し標高4m前後まで降下していく状況であったと推定される。

中世期の改変は以下のとおりである。

平坦面1の東側は古代以来の地形より角度を若干西に振って、切り土成形する。

その東側、**平坦面2**は、平坦面1から1m強の比高差で落ち、一部を風化頁岩で整地した**平坦面SX21100**となる（Fig.12-11層）。段落ち直下の堆積土からは龍泉窯系青磁などの中世遺物が出土した。SX21100の上位では、標高5.8m前後で水平堆積する黒色砂質土層（旧表土層）**SX21057**がある。また、標高6.7m付近では盛土によって鴻臚館台地の主たる面と同程度の高さで平坦面を東進させるべく盛土した痕跡がある。同様の盛土層は南側調査区のトレンチ5、グリッド4でも確認できる。全体像が不明確であるので、全体図には反映していないが、中世後半期に平坦面の拡張を図った可能性が高い。

平坦面2の東側は緩やかに下る**斜面SX21110**となる。傾斜角度は8°前後。基盤土は粘土層で、斜面下位では岩盤に変わる。斜面上には細砂が堆積し、これを中世末の表土層である灰青色粘土が覆う。中世以前はこの砂層が斜面全体を覆っていたと考えられるが、斜面の大部分は浅い**溝状遺構SD21111**が営まれ、細砂は北壁際にのみ残る。細砂を除去すると平面形が鈍角のL字形をなす直線的な中世の**小溝SD21122**と、第Ⅴ期（10世紀後半～11世紀前半）の土坑SK21125が現れる。古代土



1. 黒褐色粘質土 2. 風化頁岩はぐし土 3. 黒色砂質土+風化頁岩はぐし土 4. 風化頁岩はぐし土+黒色砂質土 5. 黒色砂質土 6. 風化頁岩はぐし土+黒色砂質土 7. 黒色砂質土+風化頁岩ブロック 8. 黒色砂質土 9. 風化頁岩ブロック（黒色砂質土含む）10. 風化頁岩土 11. 風化頁岩はぐし土　※2～7: 龍泉窯系青磁を含む　※8: SX21057 を構成　※9～10: 崩落土　※11: 整地層（上面で SX21100 を構成）

Fig.12　第28次調査トレンチ4 調査区中世期遺構配置図（拡大土層断面図は 1/150、他は 1/300）

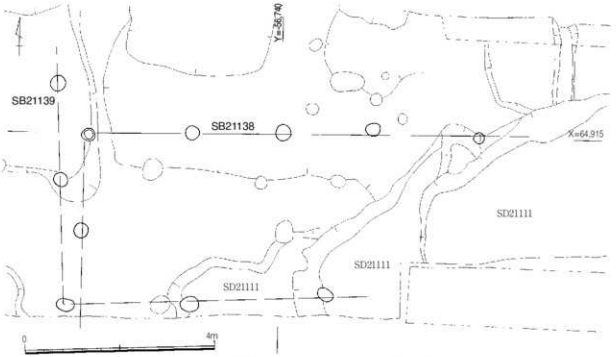


Fig.13　掘立柱建物 SB21138・SB21139 実測図（1/80）

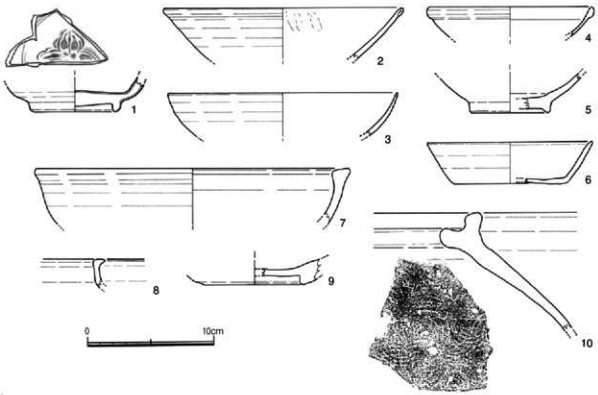


Fig.14　SX21100 出土遺物実測図（1/3）

坑が削平を免れていることから、細砂に覆われた部分は古代末（第Ⅴ期）から中世の地形をある程度留めていると考えられる。細砂の堆積は小溝から東に9m強で途切れ、その東側は中世削平により風化頁岩岩盤が露出し、斜面下は標高3.7mで水平となる。（吉武）

SX21100出土遺物　Fig.14

1は明代の青磁碗、**2**～**6**は白磁碗と皿で6は口禿である。**7**～**10**は陶器で9は碁笥底と珍しい。1は11層、2以下は1～7層出土である（Fig.12）。図示したもののほかに龍泉窯系青磁・白磁・陶器などの中世遺物破片と、古代遺物、近世遺物が出土した。

SX21100

No.	遺物名	遺物情報	法量(復元値) [残存値]
1	青磁 碗	龍泉窯系 印花 明灰色胎 緑味ある透明釉	底(7.2)　高[2.5]
2	白磁 碗	明灰 白色精良胎 透明釉	口(19)　高[4]
3	白磁 碗	灰色がかる白色胎 わずかにオリーブ色がかる透明釉 外面一部に大きな貫入 艶やか	口(18.2)　高[3.5]
4	白磁 碗	白色精良胎 わずかに青味ある透明釉	口(13.1)　高[2.5]
5	白磁 碗	明灰 白色精良胎 透明釉 艶やか	底(6.4)　高[3]
6	白磁 皿	白色精良胎(微細黒粒少含) 水色がかる透明釉 口唇部拭き取り	口(13)　高3.3
7	陶器 捏ね鉢	磁土案か 粗胎(石英粒・黒粒多含) 外面灰色 内面赤褐色	口(25)　高[4.3]
8	陶器 壺	磁土案系 灰色精良胎 釉剥落	—
9	陶器 鉢	碁笥底 底部火膨れ 小豆色胎(黒粒含) 褐色釉 中国南方産	—
10	陶器 甕	灰色粗胎(白粒・黒粒多含) 外面施釉 被熱変色	高[9.5]

(cm)

掘立柱建物SB21138・SB21139　Fig.13

SX21100上、標高5.8m付近で検出された。SB21138は東西4間（8.3m）×南北1間（2.1m）、SB21139は東西2間（5.5m）×南北2間（4.7m）となる。いずれも完結していないので、建物規模等は不明である。掘削調査はしていない。

溝SD21111（SX21112・SX21115・SX21116・SX21117）　Fig.15

築城盛土直下、平坦面2から東へ向かって下がる溝状遺構である。遺構の東南北が調査区外に広が

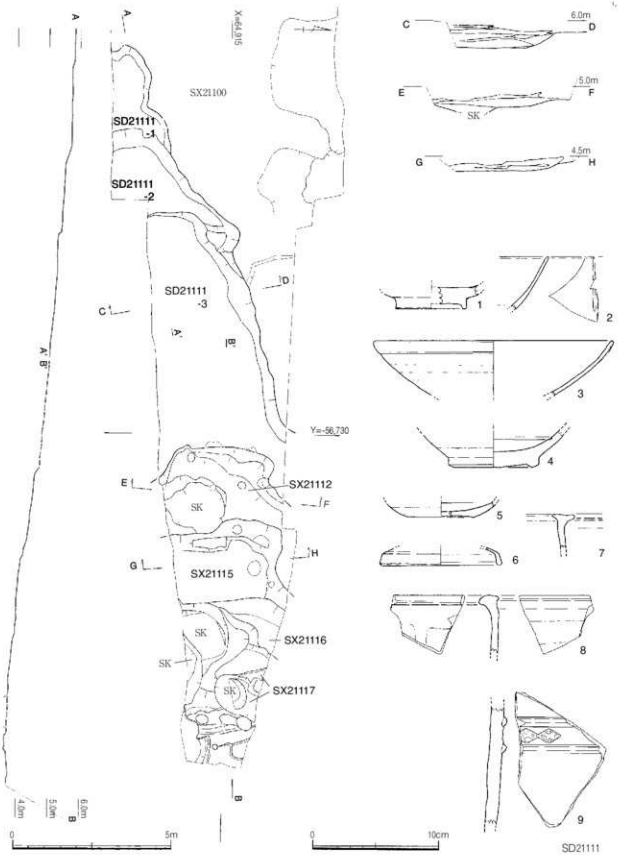


Fig.15　溝 SD21111実測図（1/120）、SD21111 出土遺物実測図 1（1/3）

り、規模は不明である。調査区内においては長さ22m、幅は中ほどで5m以上である。6段で構成され、最下段（標高3.7m）より東は調査区外となる。各段の標高は平坦面2から1段目（SD21111-1）5.75m、2段目（SD21111-2）5.4～5.6m、3段目（SD21111-3）4.8～5.3m、4段目（SX21112）4.3～4.6m、5段目（SX21115・SX21116）4～4.2m、最下段（SX21117）3.7mで、底面の高低差は2mである。調査区内で明確な排水の痕跡は見られない。雨水の掻け口は調査区南側となるか。遺構は南側、北側にも広がる様相で、段をもつ斜面となる可能性もあるが、ここでは登坂道の機能を持つ溝とする。

SD21111（SX21112・SX21115・SX21116・SX21117）出土遺物 Fig.15～16　1～9は1～3段目（SD21111）、10～17は4段目（SX21112）、18～23は5段目（SX21115・SX21116）、24は最下段

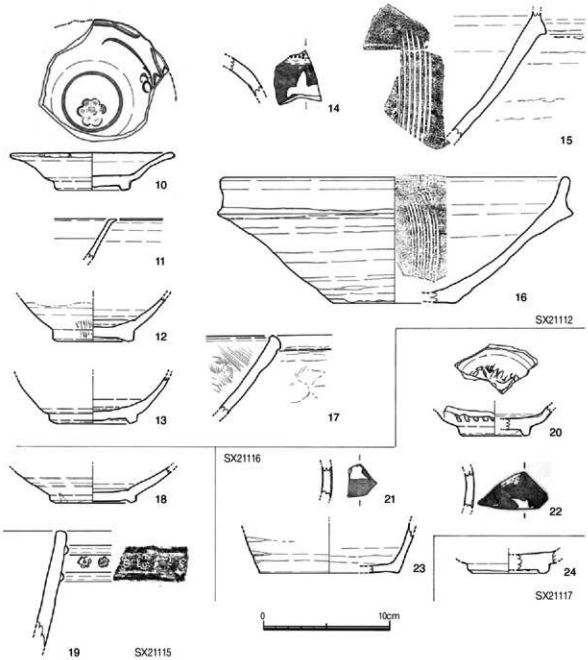


Fig.16　SD21111 出土遺物実測図2（1/3）

(SX21117) から出土した。**2～5・11・12・18**は白磁で、2・3白磁碗は古代から中世過渡期のもの、11は口縁部を水平切りするタイプの白磁碗である。**1・10・20・24**は明代の龍泉窯系青磁である。**6**の青白磁合子蓋は胎土精良で上質である。**13**は残存部に釉がなかったので炻器としたが、強還元での磁胎とさほど変わりない。**14・21・22**は象嵌青磁で、14は内面も施釉、21内面は上半施釉、22内面は無釉である。接点はないが、同一個体の壺か。**23**は陶器の底部で叩き整形、朝鮮半島産か。**15**は常滑、**16**は備前で共に擂鉢である。**9・17・19**は瓦質土器の鉢と火舎である。図示した遺物のほかに、白磁・同安窯系の碗や皿・青白磁・陶器・東播鉢・土師質鍋などの中世遺物破片、弥生時代・古墳時代遺物の破片、古代遺物、近世遺物が出土した。

溝SD21122・21134 Fig.17

斜面 SX21110が緩やかに東へと落ち始める位置に、これを横断するように南北方向に3m延びる小溝で、東側は鈍角に屈曲して東へ6mほど延びている。屈曲部分から東はSD21111により溝の片側の掘方を失っている。最大幅50cm、深さ50cm。覆土は黒褐色砂である。

SD21122の6.5m東に同規模のSD21134があり、土層図で同一埋土として捉えられている。関連もしくは同時期のものと考えられる。

（吉武）

SD21122 出土遺物 Fig.17 須恵器、土師器、中国産陶磁器（白磁・龍泉窯系青磁）、中世陶器が少量出土した。**1～5**は白磁、**6**は象眼青磁破片で鉢か。**7**は龍泉窯系青磁碗、**8**は備前焼き擂鉢である。1は溝の下層、他は上層から出土した。（吉武）

SD21111

No.	遺物名	遺物情報	法量(復元値) [残存値]
1	青磁 碗	龍泉窯系 灰色胎 オリーブ色透明釉 細かい貫入	底(5.7) 高[2]
2	白磁 碗	ヘラ押し輪花 白色やや粗胎 わずかに黄味ある透明釉 くすみ貫入	高[4]
3	白磁 碗	玉縁 白色精良胎 透明釉 被熱黄変	口(18.9) 高[4.5]
4	白磁 碗	明灰白色胎 透明釉	底7.2 高[3]
5	白磁 皿	白色胎 わずかに黄味ある透明釉 ややくすむ	底(5.3) 高[1.2]
6	青白磁 合子蓋	白色精良胎 わずかに黄味ある透明釉	口(9.6) 高[1.7]
7	陶器 甕	灰色粗胎 内外に鉄銹 小豆色 被熱	—
8	陶器 鉢	磁灶窯系 粗胎(石英粒含) 釉剥落 無釉部分は赤褐色	—
9	瓦質 火舎	貼り付け突帯 四つ菱文スタンプ 粗胎(石英粒含) 軟質 外面暗黄灰色 内面暗灰色 地山直上砂質土出土	—

SX21112

10	青磁 皿	龍泉窯系 稜花 劃花 灰色粗胎 緑透明釉 細かい貫入	口(12.9) 底5.8 高3
11	白磁 碗	明灰色精良胎 淡いオリーブ色釉	高[3.2]
12	白磁 碗	明灰色やや粗胎 透明釉	底6.4 高[3.5]
13	炻器 碗	灰色精良胎(大粒石英粒少含) 硬質	底(7) 高[3.8]
14	象嵌青磁	灰色粗胎 白色土象嵌 青白色透明釉 貫入 被熱	—
15	常滑 擂鉢	硬質 石英粒・黒粒少量含む	高[10]
16	備前 擂鉢	粗胎(石英粒多含) 全体に鉄銹 濃い小豆色～鉄銹色	縁帯(28.2) 口(27.8) 高(10)
17	瓦質 鉢	明灰色胎 軟質 炭化物付着	高[6.2]

SX21115

18	白磁 碗	明灰白色精良胎 わずかにオリーブ色かかる透明釉 艶やか 内面不純物粒(周辺は斑状変色) 高台内八角痕	底(6.8) 高[3]
19	瓦質 火舎	突帯間に6弁花 文スタンプ 胎土に石英粒含 被熱変化	高[9.1]

SX21116

20	青磁 皿	龍泉窯系 明灰色やや粗胎 緑色透明釉 粗い貫入 見込み劃花花文 外面ヘラ彫菊弁文	底[5.5] 高[2.5]
21	象嵌青磁	灰色胎 白色土象嵌 暗青色味ある透明釉	—
22	象嵌青磁	灰色胎 白色土象嵌 暗青色味ある透明釉	—
23	陶器 壺/甕	粗胎(石英粒多含) 全面鉄銹 底部内外に砂粒 叩き整形	底(11) 高[4]

SX21117

24	青磁 碗	龍泉窯系 灰色胎 オリーブ色透明釉 貫入	底[6.4] 高[1.8]

SD21122

1	白磁 碗	灰白色精良胎 僅かに茶味を帯びた透明釉 下層	口(7) 高[2.5]
2	白磁 碗	白色胎 わずかに水色がかった透明釉 細かい貫入 被熱 表面カセ	口(15.2) 高[3.8]
3	白磁 皿	灰白色精良胎 わずかにオリーブ色がかった透明釉	口(11.3) 高[1.7]
4	白磁 碗	黄褐色がかった灰白色胎 わずかに緑味ある透明釉 細かい貫入 艶やか	底(5.3) 高[1.2]
5	白磁 碗	白色精良胎 わずかに黄味帯びる透明釉	底(6.8) 高[2]
6	象嵌青磁	白色土象嵌 暗灰色良胎(黒色・褐色粒やや含) 青味ある透明釉(外面灰色 内面青緑色) 艶やか 貫入	—
7	青磁 碗	龍泉窯系 灰色やや粗胎 緑味強い透明釉 細かい貫入 艶やか	口(14.5)
8	備前 擂鉢	擂目8条以上 小豆色精良胎 内外面鉄銹 赤褐色	高[4.4]

(cm)

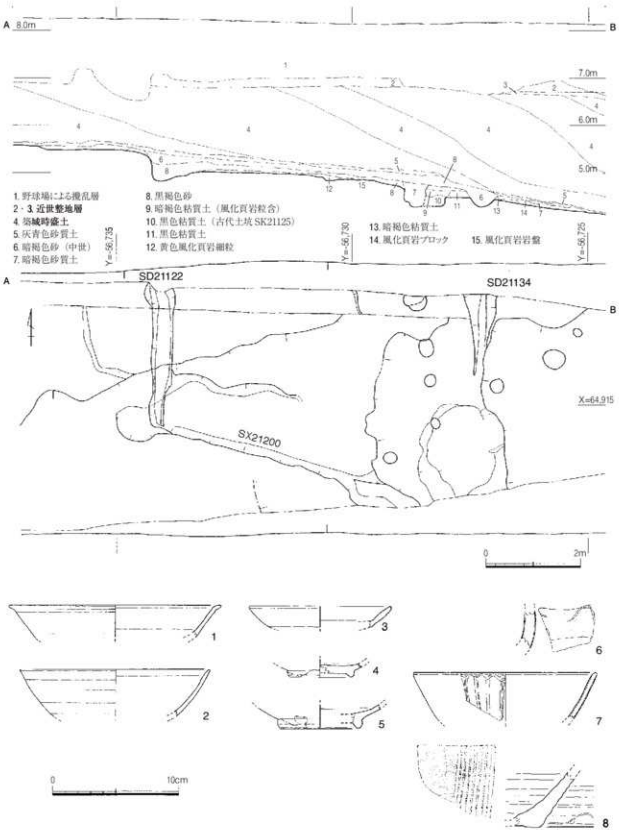
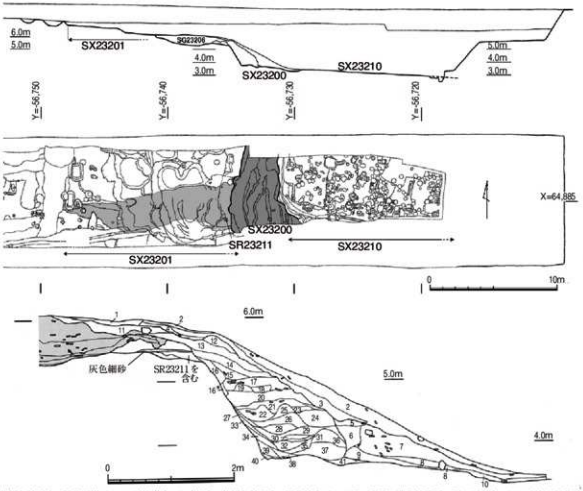


Fig.17　斜面 SX21110 周辺遺構配置図・土層断面図（1/80）、SD21122 出土遺物実測図（1/3）

②トレンチ5の平坦面（第29次調査、j 710-750グリッド） Fig.18

トレンチ５は、古代第Ⅱ期東門SB1238と、東門から東へと至る鴻臚館入口の構造解明を目的として設定したトレンチであり、西端部は第Ⅳ期調査の第19次調査区、及び第Ⅴ期調査のトレンチ３と一部が重複し、調査区南壁際では第Ⅳ期調査地グリッド４と一部が重複している。

中世地形の概観としては、調査区の西端部では風化頁岩岩盤を遺構面として古代から近代までの遺構が重複し、調査区中央部、国土座標Y=-56,748あたりから岩盤が東へ落ち始め、同Y=-56,735あたりまで1.6m降下して行き、ここで約２ｍの段差となって急激に落ち（**斜面SX23200**）、東側は**平坦面SX23210**となる。また築城盛土直下では、上述の遺構上位に築城前の**平坦面SX23201**が見られる。平坦面の上層には黒色土があり、黒色土はSX23200上位にも広がりを見せる。SX23200の落ち際までは、遺構検出面は風化頁岩およびこれが粘土化した黄褐色粘質土である。遺構面の標高は西端で



1. 茶褐色粘質土（風化頁岩ブロック・瓦片多含）2. 赤褐色+茶褐色粘質土（風化粘土ブロック混、全体に酸化鉄薄層、礫・瓦多含）3.2に類似し風化粘土少なく暗茶褐色土（最下層に酸化鉄厚層）4.3に類似（灰色味強、瓦片含、最下層に酸化鉄厚層）5.7に類似やや茶色がかる、6の上半ブロック（酸化鉄ブロック含）6. 暗褐色粘土（全体に酸化鉄散在、岩盤壁の崩落によりずれこんだもの）7. 濃灰色シルト質粘土（水溜から流下したものの堆積物、砂粒・瓦片陶磁器片・礫多含、上面に強い酸化鉄層）8.7 に類似（黄白色風化頁岩小礫多含）9.7 に類似するが粘性がやや強く黒味が強い 10. 明灰色粘質土（岩盤風化由来のためか粘性強い、全体に酸化鉄ブロック）11. 暗灰色風化粘土か 12.3に類似するが黄味が強い（上下面に酸化鉄層）13. 茶褐色粘質土（やや明るく黄味がかる、砂粒・瓦片含、水成層、上面に酸化鉄層）14.15に類似（茶味が強くやや暗、15より砂粒多含）15. 茶褐色粘質土（比較的粘性弱、瓦片・炭化物・砂粒含、中位に酸化鉄薄層、水流による形成）16. 黒灰色粘土（岩盤由来風化頁岩礫混、人為的）16".16に類似（粘質強、水によるものか）17.16に類似（上半砂粒多含、瓦片多含、人為的）18. 灰色強粘質土（酸化鉄が全体に染み赤褐色を呈す、遺物含まず、人為的）19.16と同 20. 黄色風化頁岩小礫を敷き詰めたもの（強粘質、遺物含まず、人為的）21. 赤褐色・暗茶褐色土（粘土混・瓦含）22. 暗茶褐色粘土（岩盤由来の赤褐色・黄色風化頁岩礫混、瓦含、人為的）23.24・26に類似するがやや明るい（上半に粗砂粒含、水流による形成）24.26に類似（砂粒少含）25. 灰色砂層（上部やや粘質、中位粗砂粒、下位細砂粒・酸化鉄あり、水流による形成）26. 黒褐色粘質土（瓦片・炭化物含、水流による形成）27. 暗赤褐色土（壁面に砂粒堆積、水流による形成）28.30に類似（赤褐色風化粘土・黒色土ブロック状）29.30に類似するが黄味が強い 30. 暗茶褐色粘質土（岩盤由来風化粘土に黒色粘土混、水流による形成）31. 茶褐色風化粘土（岩盤由来、強粘性）32. 赤味の強い頁岩風化岩（剥落岩盤由来、粘土化進行）33. 桃色風化頁岩細粒土（軟化）34. 黄桃色粘質土（岩盤由来、水で軟化）35. 剥落風化頁岩（桃色強）36. 剥落風化頁岩（桃色・白色）37. 剥落風化頁岩（桃色、水侵入で粘土化進行したため黄色の酸化層が縞状に入る）38. 黒灰色粘土と風化頁岩（粘土化）の互層（水流による、16世紀代遺物）39. 黄色風化粘土（落盤岩盤由来）40. やや暗い桃色風化粘土（落盤岩盤由来）41. 剥落風化岩の粘土化（黄土色粘土に桃色風化岩小礫混）

Fig.18　第29次調査トレンチ5 調査区中世期遺構配置図・断面図（1/300）、斜面 SX23200 土層断面図（1/60）

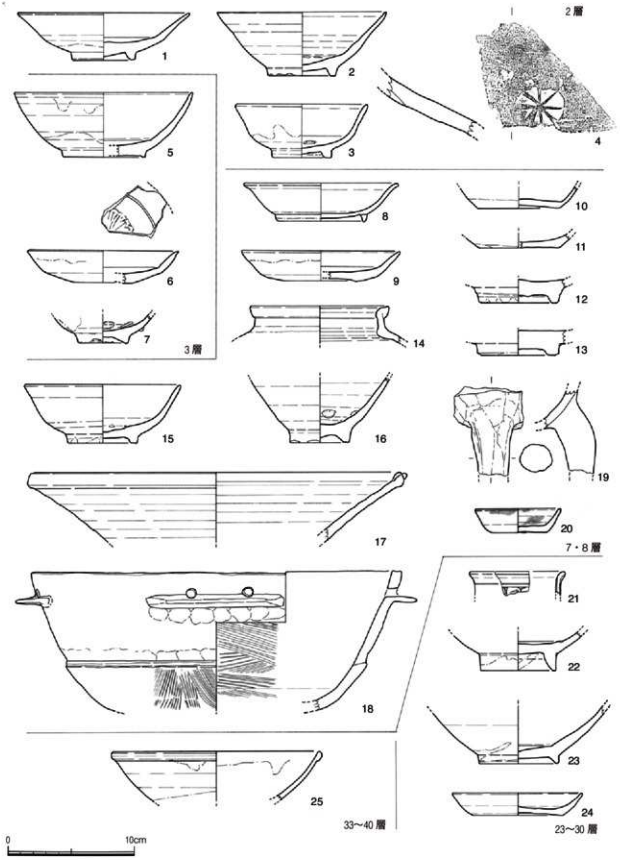


Fig.19　SX23200 出土遺物実測図 1（1/3）

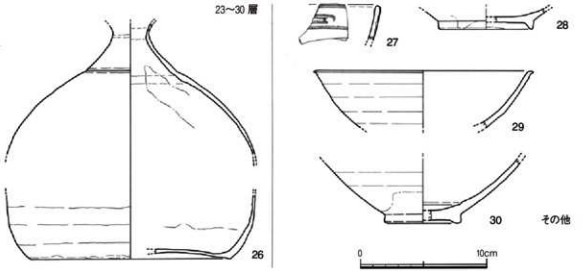
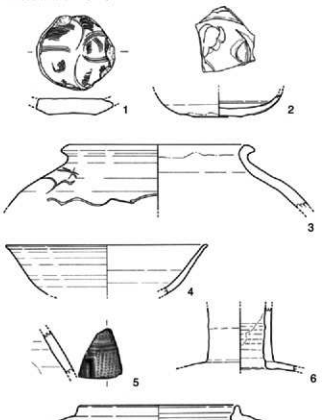


Fig.20　SX23200 出土遺物実測図 2（1/3）

SX23200

No.	遺物名	遺物情報	法量(復元値) (残存値)
1	白磁 皿	灰色胎 灰緑色透明釉 浙江省産か	口(13.7)　高3.8
2	朝鮮陶器 碗	硬質胎 灰色釉 全釉 畳付拭き取り 見込み目痕	口(13.5) 底(5.4) 高5.1
3	朝鮮陶器 碗	灰色胎(石英粒・黒粒含) 黄灰色透明釉 ピンホール 全釉 畳付拭き取り 見込・高台内に目痕	口(10.5)　底4.6　高4.5
4	陶器 壺	常滑か 胎土(石英粒・鉄分粒多含) 無釉	—
5	白磁 碗	福建省産 白色精良胎 やや灰味釉 釉薬より貫入 高台内に目痕残	口(14.2)　底(6.5)　高5.1
6	白磁 皿	印花 黄灰色胎 わずかにオリーブがかった透明釉 被熱	口(12)　底(4.3)　高2.5
7	朝鮮陶器 碗	黄褐色胎 淡灰白色釉 全釉 畳付拭き取り 見込・高台内に目痕	底4　高[2.3]
8	白磁 皿	わずかに灰味ある白色精良胎	口(12.3) 底(6.8) 高3
9	白磁 皿	明灰色胎 やや茶紺がかった透明釉 細かい貫入 被熱	口12.5　底5.8　高2.5
10	白磁 皿	白色胎黒粒少量含) わずかに緑味を帯びた透明釉 底部拭き取り	底6.5　高[2]
11	青白磁 皿	白色胎 青味強い透明釉 貫入	底(6.4)　高[1.3]
12	青磁 碗	龍泉窯系 明褐色胎釉 貫入	底6.4　高[2]
13	青磁 碗	龍泉窯系 灰色精良胎 粗い貫入	底6.5　高[2]
14	陶器 壺	磁土窯系 耳壺か 無釉 灰色胎 表面赤味を帯びる	口(11)　高[3]
15	粉青 碗	白化粧刷毛塗のち透明釉 粗い陶胎(石英粒含) 見込・畳付に目痕	口(12.5)　底5.5　高4.6
16	朝鮮陶器 碗	白黒釉 高台外側かいらぎ状 粗い陶胎(石英粒含) 明黄灰色釉	底4.7　高[5]
17	東播 捏ね鉢	片口一部残 ロクロ挽き上げ 粗い陶胎(石英粒・黒粒多含) 黒灰色 焼成良好	口(20)　高[5.5]
18	瓦質 鍋	的手穴2とその下に銅 燃焼防止か 外面に煤 黒灰色胎土(石英粒含)	口(29.4)　高[11]
19	瓦質 足鍋	周防系 灰色胎土(石英粒含) 外面に煤	—
20	土師器 皿	灯明皿 被熱黒変 糸切り 胎土に石英粒・金雲母含む	口(6.9)　底(4.5)　高1.9
21	青磁 壺	龍泉窯系 優品 頸部へラ描き文様 灰白色胎 厚く施釉 粗い貫入	口(7.7)　高[2]
22	白磁 碗	灰色胎土 わずかに緑味ある透明釉 粗い貫入	底(6)　高[3]
23	白磁 碗	灰白色精良胎 青味あるほぼ色不透明釉	底(6.5)　高[4.5]
24	土師器 皿	糸切り 胎土に石英粒・鉄分粒・金雲母含む	口(10.4) 底(7) 高1.8
25	白磁 碗	福建産 灰白色胎土 透明釉 釉薬部分わずかにオリーブ色	口(16.8)　高[4]
26	朝鮮陶器 瓶	寸胴形 内面同心円文当て具痕 全釉か 釉失透 刺落多 小豆色胎(石英粒含) 硬質	頸基部2.8
27	青磁 碗	龍泉窯系 口縁に雷文 灰白色精良胎 オリーブ色透明釉 厚く施釉	—
28	青白磁 碗	景徳鎮窯 白色精良胎 わずかに青味がかる透明釉 高台内に円形八弓眼	底(7.5)　高[1.5]
29	白磁 碗	明灰色精良胎 透明釉 艶やか	口(12.5)　高[4.5]
30	白磁 碗	明灰色精良胎 わずかに青味ある透明釉 艶やか	底(6.2)　高[5]



(cm)

Fig.21　SX23201 出土遺物実測図（1/3）

7.4m、東端で3.0mを測り、4m以上の比高差がある。

Y=-56,748あたりから斜面SX23200にかけての緩斜面上には**池SG23206**があり、池に付随する小溝からは12世紀中頃の龍泉窯系青磁等が出土した。また、斜面SX23200の落ち際で池SG23206を構成する層の下位から11世紀末頃の白磁碗2個体と鉄刀がまとまって出土した。掘方を失っているが、**土壙墓SR23211**とした。なお、池SG23206底面では古代の遺構（掘立柱建物SB17701柱穴）が確認されており、ある程度鴻臚館の地形のなごりを留めているものと考えることができよう。またSX23200直下の底面から16世紀代の朝鮮王朝陶器舟徳利が潰れた状態で出土したことからみて、斜面および低地面（平坦面SX23210）の造成は中世末の段階で行われ、群在するピット群も同時期に掘られたものと考えられる。（吉武）

斜面SX23200と硬化面　Fig.18

鴻臚館跡台地の東側縁辺で盛土造成をし緩斜面化した地形である。土壙墓SR23211を包含する層位およびその上位水平層を切っている。SX23200を造成する際に整形したか。造成は、斜面付近を埋め立て、20層で黄色風化頁岩小礫を敷き詰め平坦面とし、18層・19層で締まりの良い粘質土層を形成し17層で平坦面となす。17層上面で標高5m、幅およそ1m、斜面上端までは60cm以上の高さがある。この場から台地上に達する通用口とはしがたいが、付近の通用口につながる犬走りとなる可能性がある。なお23層以下は水成層を含む自然堆積層で、朝鮮半島産の舟徳利が出土した。また7層上面と3層下面に酸化鉄層がある。

SX23200出土遺物　Fig.19～20　1～4は2層、5～7は3層、8～20と26の一部は7層と8層、21～24と26の一部は23～30層内から、25は33～40層内から、27～30は14～40層内から出土した。**1・5・6・8・9・10・22・23・25・29・30**は白磁、**12・13・21・27**は青磁、**11・28**は青白磁で28は特に精良胎である。**14**は陶器で磁灶窯系の耳壺か。**2・3・7・15・16・26**は朝鮮半島産の陶器で、15は刷毛目粉青、26の舟徳利は段下平坦面近くで潰れて出土するほか同遺構内で東側出土の破片と接合した。**4・17**は国産陶器、**18・19**は瓦質土器、**20・24**は土師器皿で20は灯明皿である。ほかに古代遺物が出土した。26の舟徳利をはじめとする朝鮮陶器や8の白磁皿などから遺構は16世紀代か。

平坦面SX23201　Fig.18　風化頁岩土によって造成された平坦面である。西側の鴻臚館跡台地の主たる面から東に向けて広がり、大規模な築城造成時の盛土との間には黒色土を挟む。この黒色土は東側の斜面SX23200をも覆うものであり、一時期の旧表土と思われる。平坦面SX23201は築城直前もしくは築城初期の盛土によるものと思われ、上層の旧表土と思しき黒色土は、築城までにある程度の時間があったことを示す。平坦面を構成する風化頁岩造成土の下位に池SG23206があり、池の上面で捉えた標高は6.1m前後である。

SX23201出土遺物　Fig.21　**1～3**は中国系、**4・5**は朝鮮半島系、**6・7**は国産である。

また、Fig.59～60の池SG23206出土遺物のうち上層出土の遺物はSX23201の関連遺物である。

SX23201

No.	遺物名	遺物情報	法量(復元値)[残存値]
1	青磁 皿 加工品	龍泉窯系 縁辺打ち欠き 灰色精良胎 緑味のある透明釉	外径6.2　底3.7
2	白磁 皿	劃花花文 灰白色精良胎 淡オリーブ色透明釉	底3.5　高[2]
3	陶器 甕	黄味がかる明褐色胎 内外面白化粧か オリーブ色透明釉(剥落顕著) 細かい貫入 口縁端部施釉後拭き取り ヘラ描き波状文 中国南方産か	口(15.3)　高[5]
4	朝鮮白磁 碗	灰白色極胎 青味がかる透明釉 表面に粒状突起多	口(16)　高[4]
3	粉青 壺	印花粉青 白色・黒色象嵌 茶味ある灰色胎 透明釉 細かい貫入	—
5	瀬戸 壺	灰白色精良陶胎 緑色透明釉 細かい貫入 SX23200-3層・SG23206-出土破片は同一	頸基部(5.5)　高[5]
7	備前 壺	石英粒・黒粒含 硬質 小豆色 肩部に自然釉	口(12.7) 胴(28) 高[9]

(cm)

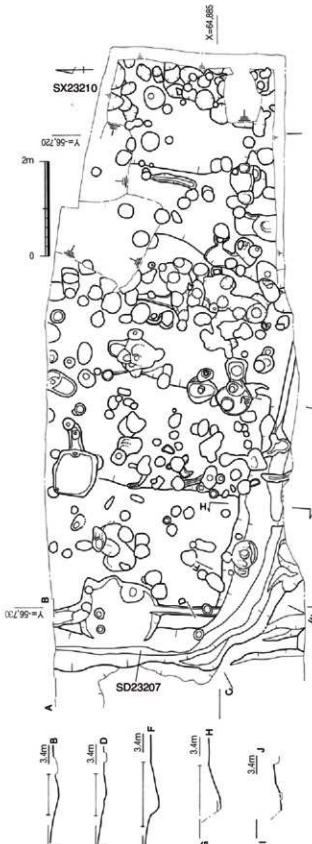


Fig.22　平坦面 SX23210 実測図（1/80）

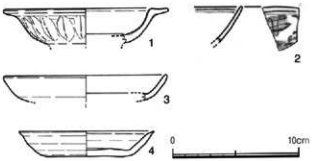


Fig.23　SX23210・SD23207 出土遺物実測図（1/3）

SX23210

No.	遺物名	遺物情報	法量(復元値) [残存値]
1	青磁 皿	龍泉窯系 鎬蓮弁文 灰色精良胎 オリーブ色透明釉 粗い貫入 SX23200-10層出土	口(10.5)　底(13) 高[2.8]

SD23207

2	青花 碗	灰白色精良胎 ややくすんだ呉須 やや暗い透明釉	—
3	白磁 皿	白色精良胎 ややくすんだ透明釉	口(13)　高[2]
4	土師器 皿	糸切り 精良胎(砂粒少含) 硬質 赤味強い橙褐色	口(10.8)　底6　高2

(cm)

平坦面SX23210・溝SD23207　Fig.22

斜面SX23200の東側にあり、区画溝SD23207を境界とする。平坦面中4ヵ所にそれぞれ10cm強の段差があり、小規模な平坦面5枚をなす。西端平坦面の標高は3.3mで、東へ段を下げるごとに10cm強ずつ標高を下げ、東端の平坦面で2.7mとなり、さらに東は調査区外となる。この小規模な平坦面においても若干の西高東低を保ち、全体の比高は50cmほどである。各平坦面は幅2m内外と狭小であり、有段の斜面と考えられる。全体的にピットが数多くあるが、明確に建物となるものは検出できなかった。北側のトレンチ4調査区最下段や、南に隣接するグリッド4調査区でも同様のピット群が確認され、台地東側下段は建物関連のピットが広がっていた可能性が高い。

区画溝SD23207底面の標高は地形と同様、西から東へ落ち、排水機能をもつ。

SX23210・SD23207出土遺物　Fig.23　1は平坦面SX23210からの出土で、龍泉窯系青磁皿で鎬を持つ。2～4はSD23207からの出土で、2は明代の青花碗、3は白磁皿、4は土師器皿である。

③グリッド1～4の平坦面（第23次調査、h710-i740グリッド） Fig.24

鴻臚館時代の北館東門にいたる導入部分の解明を目的として設定された調査区である。本調査区の北でトレンチ５（第29次調査）と重複し、西に第19次調査区と隣接する。グリッドは１～６まで設定されたが、ここでは中世平坦面に関連するグリッド１～４までを対象とする。

遺構検出面は、基本的に茶褐色の粘質土で盛土整地面である。地形は、中世の屋敷地（**平坦面SX17710、平坦面SX17711**）造成にかかる段切り造成によって西から東に大きく三段に下降するが、古代においても調査区東側に大きな谷が存在したことが1963・1964年の第２次調査から明らかであり、中世の段切り造成は古代の地形を利用したものであったことが推測できる。古代の広場状造成面は、均質な砂質土を平坦に敷いたもので、東門の前面には奥行き20mほどの広場が設けられていたと推定される。この広場状遺構面は、第19次調査で第Ⅱ期の東門遺構を検出した面につながるものである。（大庭）

平坦面SX17710は、古代においては建物SB17701・SB17702があった面で、一段上の広場状遺構面との段差となる地形付近では古代面の痕跡（灰色砂層）を残す。中世遺構としては区画溝と、建物痕跡と思われる多数のピットが残る。SX17710の西端には地下式土坑**SK17004、SK17026**が営まれ、周囲からは再利用された板碑（Fig.30-11）が出土した。地下式土坑と溝の先後関係はわからない。

古代の広場状遺構面と本面SX17710の段差箇所は後に自然堆積によりなだらかな斜面となるが、築城前の時期に茶褐色土層（Fig.26-29層）により段差が再び形成され、比高１m程となる。Fig.24土層図C-D断面では西側の広場状遺構面側で厚く、東側下位の平坦面で薄くなる。トレンチ４、トレンチ５では、築城前の一時期に西側の鴻臚館台地に合わせて平坦面を拡張したものと思われ、本件も同様の可能性がある。**瓦溜りSX17003、瓦溜りSX17025**はこの層の低位に位置する。

SX17710のさらに東側は比高３mの急な段差を経て、**平坦面SX17711**となる。SX17711上層では泥土層上に南北溝とその西側に浅い複数の東西溝が見られる。築城前の一時期に計画もしくは施工された石垣関連胴木の痕跡と思われる。SX17711下層では区画溝、土坑状遺構、多数のピットが検出された。一部の土坑は比較的規則的に並び、溝内の柄柱様ピット寸法と合致する（Fig.32 G-H面）。これらは建物痕跡の可能性がある。なおこの面の最古遺構は土坑SK17222（Fig.32）で、古代建物ピットと同主軸・同規模であるが、偶然の一致の可能性が高く、これまでの調査成果から中世土坑とした。

瓦溜りSX17003 Fig.24

古代瓦を中心とした遺物が集中的に出土したものである。グリッド１・グリッド２の南壁土層において、鴻臚館台地側に厚く、台地落ち際に薄く堆積する土層があり、層の低位に瓦が集中する箇所がある（SX17025）。この層は平坦面を拡張するため盛土されたものと思われ、本遺構もその造成土中の遺物集中箇所であると考える。

SX17003出土遺物 Fig.25 **1・2**は龍泉窯系青磁で、1は鎬縁皿、2碗の高台内は小豆色を呈する。**3**は白磁皿、**4**は青磁碗の加工品で高台に合わせて整形される。上記のほか、明代青花や青磁など中世遺物の破片、表面が銀化したガラスの破片、瓦・磚・陶磁器など古代遺物、須恵器などが出土した。

瓦溜りSX17025 Fig.26

古代瓦を中心とした遺物が集中的に出土したものである。29層低位に見られる一群と同様のものである。29層は西側の鴻臚館台地側に厚く、東側平坦面側に薄い茶褐色粘質土であり、28層の築城盛土層に隣接する。

～13: 近世以降　14～29: 中世包含層　36: SD17158 埋土　44: SD17033 埋土

Fig.24　第23次調査グリッド1～4調査区中世期遺構配置図（1/200）、断面図・土層断面図（1/100）

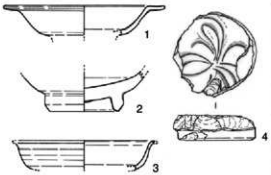
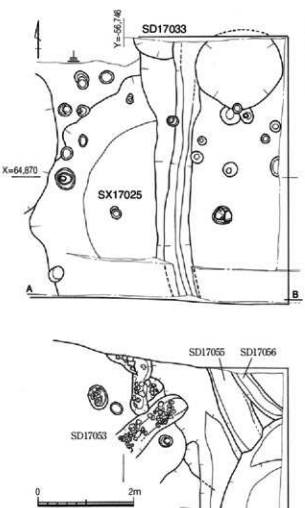


Fig.25　SX17003 出土遺物実測図（1/3）



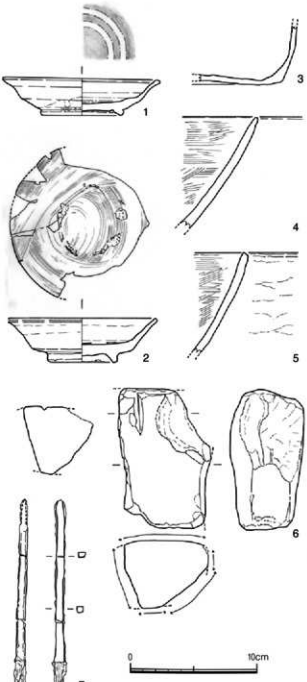


Fig.27　SX17025 出土遺物実測図（1/3）

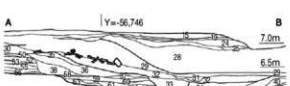


Fig.26　瓦溜り SX17025 周辺遺構配置図・
グリッド2 南壁土層断面図抜粋（1/80）

～ 28: 近世以降　29. 茶褐色粘質土 30. 明褐色土 31. 灰茶色土 32. 黒褐色土 33. 暗褐色土（締まりなくベタベタ 中世溝埋土）34. 暗褐色土（締まりなくベタベタ）35. 褐色土 36. 明茶褐色土 37. 黄灰色砂質土 38. 赤褐色土（締まりなくベタベタ）39. 暗褐色土（締まりない）40. 暗茶褐色粘質土（茶色粒土がブロック状に混じる）58. 灰色砂 59. 茶褐色土 60. 灰白色粘土 61. 黄茶色土 62. 暗黄灰色土 63. 黄褐色土 64. 暗黄灰色土 72. 茶色粘質土　（『鴻臚館跡 22』Fig.178）

SX17025出土遺物　Fig.27　1は白磁皿で見込みは蛇の目釉剝ぎ、2・3は朝鮮半島産で2は刷毛目粉青、3は舟徳利である。4・5は土師質の鍋破片、6は砥石である。7は長頸鏃で矢柄に木質が残る。古墳時代のものであろう。上記のほか、蕪薬文青花碗破片や土師質擂鉢、鞴羽口破片、鬼瓦破片を含む多量の古代瓦、古代陶磁器、鉄小札（『鴻臚館跡23』Fig.90-2～9）が出土した。

落ち込みSX17061　Fig.24

グリッド4調査区南端にある地形である。西側上端で標高5.4mを測り、南へ落ち込む。自然によるものか人為的なものか判然としない。

SX17061出土遺物　Fig.28　1は青磁碗、2は朝鮮陶器小碗、3は瓦質湯釜、4は火舎、5・6は土師質鍋、7は石鍋である。上記のほか、12世紀前後の白磁碗破片、舟徳利らしき陶器破片と、古代瓦が出土した。

SX17003

No.	遺物名	遺物情報	法量(復元値) [残存値]
1	青磁 皿	龍泉窯系 明灰色胎 青緑味透明釉 粗い貫入	口縁(12.8) 口(10) 高[2.4]
2	青磁 碗	龍泉窯系 明灰色精良胎 高台内釉拭き取り小豆色・バマ痕	底(6.2) 高[3.2]
3	白磁 皿	景德鎮系か 白色精良胎 青味がかる透明釉 白濁粗い貫入	口(11.5) 高[2.4]
4	青磁 碗 加工品	龍泉窯系 縁切打ち欠き 明灰色精良胎 やや緑色透明釉	外形6.4 底6.1 高2

SX17025

No.	遺物名	遺物情報	法量(復元値) [残存値]
1	白磁 皿	見込蛇の目釉剝ぎ 露胎部一部赤色発色 やや緑味釉	口12.4 底5.6 高3.1
2	粉青 皿	白足刷毛 暗灰色胎釉 硬質 透明釉 見込砂目 高台端部無釉後拭き取り 重ね焼き痕	口(12) 底5.5 高3.5
3	朝鮮陶器 瓶	舟徳利 黒灰色精良胎 器壁薄 焼成良好	高[4.6]
4	土師質 鍋	精良胎(石英粒小含) 焼成良好 被熱	高[8.8]
5	土師質 鍋	精良胎(金雲母少含) 焼成良好 赤褐色 外面炭化物付着	口(28.4) 高[7.8]
6	砥石	硬質砂岩 当初の砥石欠損のうち欠落面を砥石として再利用 角部分はハンマーとして使用か	長11.1 幅7.1 厚5.8
7	鉄 長頸鏃	方形軸 矢柄に木質痕	長[15.1] 矢柄長[2.1]

(cm)

SX17061

No.	遺物名	遺物情報	法量(復元値) [残存値]
1	青磁 碗	龍泉窯系 灰色精良胎 オリーブ色釉 被熱変色(黄白色) 高台内バマ痕	底6 高[2.5]
2	朝鮮陶器 小碗	粗胎(黒粒多含) 硬質 明灰白色釉 見込み砂目5	底3.9 高[2.2]
3	瓦質 湯釜	菊花連続押捺文 環付 精良胎(黒粒微含) 外面研磨	口(14) 高[6.5]
4	瓦質 火舎	高台にアーチ状切り込み 粗胎(石英粒含) 褐灰色 酸化鉄付着	高[12.4]
5	土師質 鍋把手	極精良胎(鉄分粒微含) 淡黄褐色 炭化物付着	幅2.5 高[8.5] 厚2.5
6	土師質 鍋	粗胎(石英粒多含) 赤褐色 外面炭化物付着 被熱黒変	高[7.3]
7	石鍋	滑石製 鋼付 被熱 炭化物付着	高[4.4]

(cm)

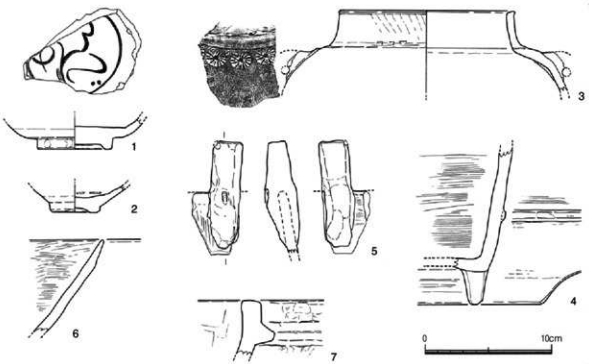


Fig.28　SX17061 出土遺物実測図（1/3）

平坦面SX17710・溝SD17033　Fig.24、Fig.29

東側を築城時の土取り掘削遺構SX17194に削平され、南側は調査区外となる。鴻臚館東門前広場状遺構の一段下の面にあたり、古代においては建物SB17701・SB17702があった。古代整地層東端から東にはこの面で薄く敷かれた灰色砂層が残る（Fig.26-58層）。SX17710はこの古代以来の平坦面を利用し生活域としたもので、南北15m、東西12mを測る。平坦面の周囲には**溝SD17033**が廻らされ、区画内側にはピットが多数ある。ピットは建物関連の痕跡と思われるが、明確にできるものはなかった。

SD17033は区画溝で、平坦面SX17710中央部を囲む溝である。長さは南北13m、東西10m、幅は西側で0.6m、北側で1.2mを測る。深さはいずれも20cm程である。西側底面はいずれも標高6.1m前後で勾配がなく、北側は、北西角で6m、東端で5.5mと排水可能な勾配である。溝の南側は当初緩やかに南東に向かっていたが、角度を東に強く振った溝に切り替え、南端は土坑SK17057に直結する。

SX17710・SD17033出土遺物　Fig.30

1～3はSD17033からの出土で、**1**は朝鮮陶器舟徳利、**2・3**は土師質鍋である。SD17033からは上記のほか中世の白磁皿破片が出土した。4～9・11はピットから、10は東隣のSX17194からの出土である。**5**粉青小碗、**6**青花蕉葉皿、**7**白磁角杯など比較的新しい遺物と、**8～10**白磁碗と加工品など比較的古いものが混在する。**11**は板碑を砥石として再利用したものである。頭頂部付近の残欠で梵字が一部残るが、砥石再利用時に摩耗している。砥石使用は被熱後で、砥面には鋭利な刃物に使用した筋状の使用痕もある。背面は鑿状工具によって直線的に整形される。

SD17033

No.	遺物名	遺物情報【出土遺構】	法量(復元値)(残存値)
1	朝鮮陶器 瓶	舟徳利 小豆色精良胎 外面～内面上部一部に濃緑色釉	胴部(3.6)　高(7.6)
2	土師質 鍋	精良胎(微細石英粒含) 表層明白橙色 芯部暗灰色 外面炭化物付着 被熱黒化	高[5.3]
3	土師質 鍋	脚部 精良胎(微細石英粒含) 硬質 表層明白橙色 芯部暗灰色	高[13.5]

SPほか

4	瓦質 釜	羽釜 精良胎(微細石英粒・黒粒含) 硬質 灰色【SP17038】	高[8]
5	粉青 小碗	灰色胎 硬質 内面に白色土模帯文 細かい貫入【SP17140】	高[2.7]
6	青花 皿	蕉葉底 白色やや粗胎 硬質 青味がかった透明釉 外底八字脚【SP17133】	底4　高[1.4]
7	白磁 角杯	六角形か 白色胎 透明釉【SP17085】	高[2.8]
8	白磁 碗	明灰色精良胎 【SP17080】	高[2.4]
9	白磁 碗 加工品	円盤化失敗か 透明釉 細かい貫入【SP17153】	底7.3　高3.1
10	白磁 碗 加工品	縁辺打ち欠き 円盤化失敗か 明灰色胎 付着物多【SX17194（東隣段落ち 築城時廃棄）】	底5.6　高2.9
11	板碑	梵字残(キリーク か) 砂岩 被熱のち砥石として利用 砥面は平面と筋状【SP17047】	27×21　厚[9]

(cm)

溝SD17158　Fig.29

平坦面SX17710上、SD17033が区画する域内にある東西方向の溝である。古代建物SB17702主軸と合うが、埋土が周辺の中世遺構埋土と似ているので、ここでも取り上げた。検出長2.8m、幅0.6m、深さ30cmである。底面は西高東低であるが、周辺地形も同様である。グリッド4西壁土層断面図（Fig.24 A-B）36層では、南上端が高く北側が低い。36層上位で若干低くなり幅3mほど34層が堆積している。この溝を南限に何らか小規模な区画があったものと思われる。出土遺物はなかった。

平坦面SX17711　Fig.31、Fig.32

西側を築城時の土取り掘削遺構SX17194に削平され、東側と南側は調査区外となる。SX17710の東側、一段下の面にあたる南北、東西ともに約10mの平坦面である。上層では南北溝と浅い東西溝群がある。下層ではピット群や土坑などが確認された。下層は中央付近で南北に走る浅い溝SD17424を境に東側が若干低くなっている。上層ではこのSD17424の東側が土手状の高まりとなり、溝は下層のSD17424を踏襲したSD17171となる。SD17171に直交する浅い東西溝を畝間溝とみて畑地利用の可能性もあるが、築城に先駆けて行われた大規模な掘削であるSX17194と一連の遺構として、東西溝と南

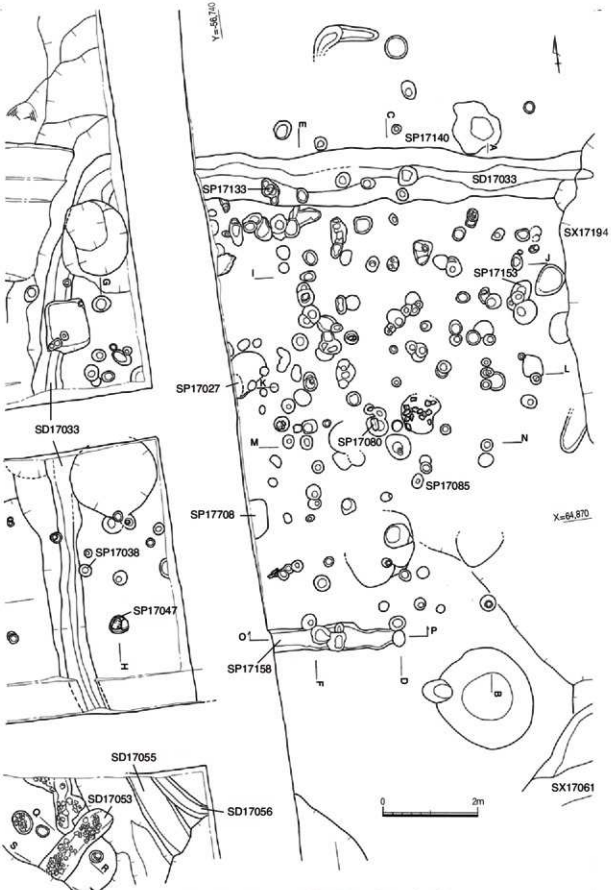


Fig.29　平坦面 SX17710 遺構配置図・断面図（1/80）

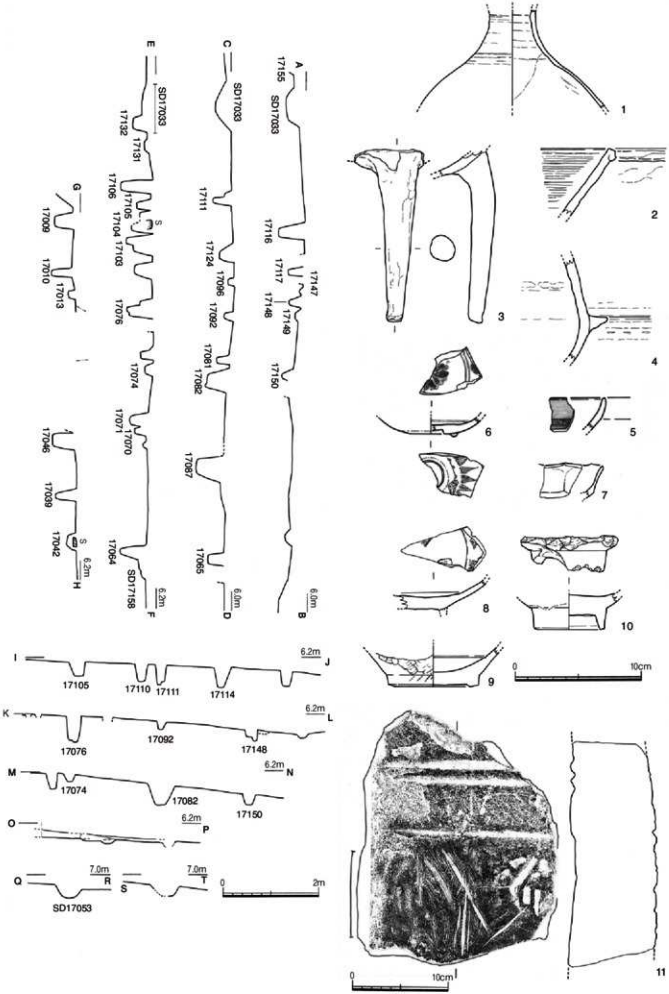


Fig.30　SX17710・SD17033 出土遺物実測図（11は 1/4、他は 1/3）

北溝を石垣の胴木痕跡、SX17194は石垣築造に伴う地山成形と見る。とすれば、築城段階で、現況とは異なる縄張りが構想されたが、それは一時的な作業にとどまったことになる。(大庭)

平坦面SX17711上層（溝SD17171～17179・17705～17707） Fig.31

SD17171は南北の区画溝で、平坦面を東西に分かつ。下層の浅い溝SD17424（Fig.32）の東岸は土手状の高まりとなり、この高まりにより明確な溝状遺構となり、底面は南方向に下る。長さ11m弱、幅70cm、深さ20cmである。土手の北と中ほどに東側の面に向かう浅い溝SD17706・SD17707をもつ。溝以西には浅い溝SD17172～17178・17705が確認され、長さは残りの良いSD17705で6m、幅30～70cm、深さ10cm以下であった。これら溝については、本格的築城の以前に設定された石垣の胴木痕跡と捉えている。SD17179は東西の区画溝で、平坦面の北側境界となっている。平坦面上層からは白磁・青磁・土師器などの破片が出土したが、図示できるものはなかった。ほかに古代瓦が出土した。

平坦面SX17711下層（溝SD17190・17192・17235～17237・17424・17529・17538・17605） Fig.32

この面からは溝と、土坑、ピット多数が確認された。外側を廻る溝SD17192と、その内側を廻る

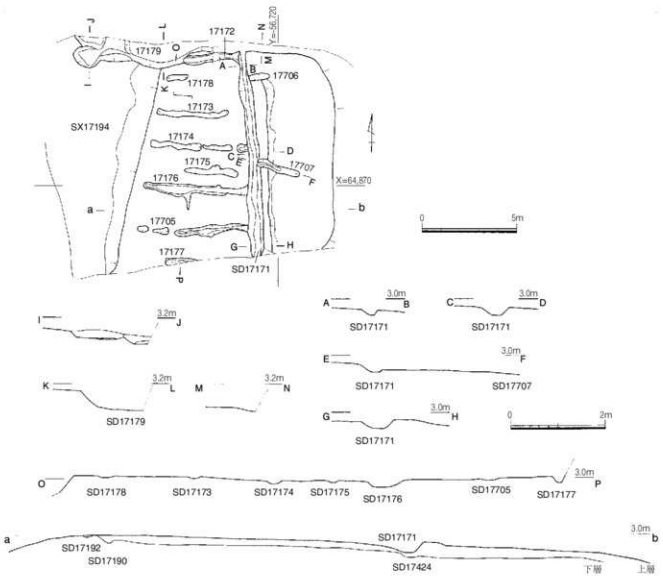


Fig.31　平坦面 SX17711 上層 遺構配置図（1/200）、断面図（1/80）

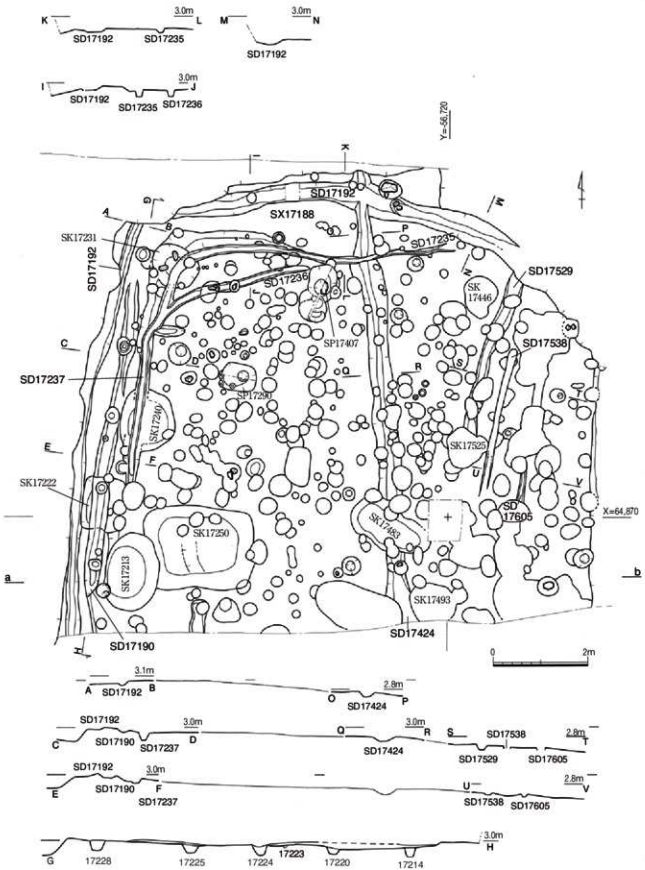


Fig.32　平坦面 SX17711 下層 遺構配置図・断面図（1/80）

SD17235～17237により区画される。SD17192は西側で一段高い場所に廻らされ、ピットが確認された面とは20cm差がある（Fig.31 a-b断面）。西側SD17192とSD17237の間には、底面にピットを持つ溝SD17190がある。調査区中央には南北を走る浅い溝SD17424があり、東側にごく浅い溝状遺構SD17529・17538・17605がある。

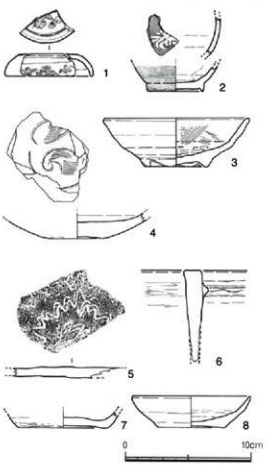
はっきりとした土坑は主に西側にあり、溝と切り合っているものは、溝に先行して営まれている。西側の土坑SK17213・17240・17231は平坦面の形状に沿って営まれ、前述のSD17190内ピットの間隔と合致している。底面標高はSK17213が2.1m、SK17240は2.3m、SK17231は2.3mと、一連のものとして違和感はない。反時計回りで、東側のSP17407・SK17446・SK17525・SK17493と共に、建物の痕跡である可能性を考える。SP17407底面標高は2.4mで底面に平石を置く。ほかの土坑3件は未掘である。これら土坑・ピットの間隔はおおよそ3.2mである。土坑の詳細は、(11) 土坑の項に記した。

この面の区画溝の法量は、遺構番号順に以下のとおりである。

SD17190: 長7.5m、幅40cm、深10cm　SD17192: 長18m、幅40cm、深10cm
SD17235: 長6.5m、幅20cm、深15cm　SD17236: 長3m、幅15cm、深10cm
SD17237: 長3.5m、幅25cm、深15cm　SD17424: 長9m、幅50cm、深10cm
SD17529: 長3.5m、幅40cm、深10cm　SD17538: 長3m、幅15cm、深5cm
SD17605: 長2.5m、幅15cm、深5cm

遺物は、調査区北側のSX17188地点から出土した。また、SD17190から緑褐釉陶器壺の小破片が出土したが図示できなかった。

SX17188出土遺物　Fig.33　**1**は青花合子蓋で優品。**2**は粉青沙器か、被熱により表面は下地のみとなっている。陶胎に白色土で描かれたモチーフが筆描きのようになめらかで、全体的に丁寧なつくりをしている。**3**は朝鮮陶器の皿、**4**は青磁皿である。**5・6**は瓦質土器、5は擂鉢で、内底面に工具で花状に回し掻くが、使用により擂り目が薄れている。6は火舎である。**7・8**は土師器皿で、7は糸切り、8は内底指押さえでヘラ切りか。



SX17188

No.	遺物名	遺物情報	法量(復元値) [残存値]
1	青花 合子蓋	紫禁城 優品 白色精良胎 発色良好	口(7)　高1.8
2	粉青 小壺	白色土花文 内外面施釉 被熱により釉剥落顕著 同一個体接点なし	底(4.6)　高[2] 胴部破片 高 [3]
3	朝鮮陶器 皿	粗胎(石英粒 多含)小豆色がかる灰色 濃暗緑色釉 内面刷毛目 外面ヘラナデ 見込・畳付に砂目痕	口(11.6) 底(5) 高(3.8)
4	青磁 皿	龍泉窯系 明灰色精良胎 粗い貫入	底(4.2)　高[1.9]
5	瓦質 擂鉢	底部破片 見込へラ描花状文様擂目 著しい被熱 底面赤変 胎土に石英粒少含	8.5×5
6	瓦質 火舎	灰色精良胎 高硬質 丁寧な研磨 被熱	口(26.4)　高[7.2]
7	土師器 皿	被熱変色 胎土に大粒石英・金雲母含む	底(7)　高[1.3]
8	土師器 皿	ヘラ切か 明白橙色胎(微細石英粒・金雲母・鉄分含)	口(9.4) 底7.4 高2.5

(cm)

Fig.33　SX17188 出土遺物実測図（1/3）

④トレンチ3北側の低地面（第25次・第26次調査、o750-q760グリッド） Fig.34

トレンチ３は、鴻臚館時代の第Ⅱ期布掘り区画塀の北東部の確認、及び鴻臚北館の地形、海岸へと至る景観などの解明等を目的として設定された調査区である。近世以降を対象とした調査後に築城盛土を除去し、古代・中世遺構の平面確認を行い、土層確認等のため南北に縦断する幅１ｍのサブトレンチを通した。サブトレンチは南から１、３～６とし、斜面西壁際に設けた幅50cmのサブトレンチを２とした。ここでは、斜面下の平坦面を扱い、サブトレンチ３～６を対象とする。

トレンチの南側は鴻臚館時代の台地で、風化頁岩岩盤による。そこから斜面を経て、北側の地山は海浜由来の砂地となる。築城時盛土を除去した後、斜面の比高差は約３ｍである。斜面は風化頁岩岩盤ではなく粘質土で、本来の丘陵縁辺に近いと考えられる。

斜面下の低地部では、中世層の下位で鴻臚館時代の構造物が面的に確認されている。斜面側から、縄目瓦のみを割って平坦に敷き詰めたSX19512は古代通路の可能性が、黄褐色粘土の互層遺構SX19610は古代築地塀遺構となる可能性が指摘されている。また、サブトレンチ５・６では風成砂層上に瓦が面的に広がるSX19606・SX19607が確認され、鴻臚館時代の人工平坦面や構造物が、さらに北へ延びる様相であることが確認された。同様の瓦の広がりはトレンチ２のSX18500や、トレンチ１の調査地でも確認されている。これら鴻臚館時代の面の影響により、上層の中世面は安定の様相を示す。この斜面下の低地面を**SX19600**とした。低地面SX19600では古代から中世にかけて遺構が展開し、中世遺構としては、**SD19601、SK19604、SP19602～19603・19605**が確認された。Fig.34土層断面図の網掛け部分は黒色砂質土層で、古代層である。推定古代築地塀SX19610基部の北側あたりからさらに北に広がり、サブトレンチ６以北は調査区外となる。中世層はその上位にあたる。

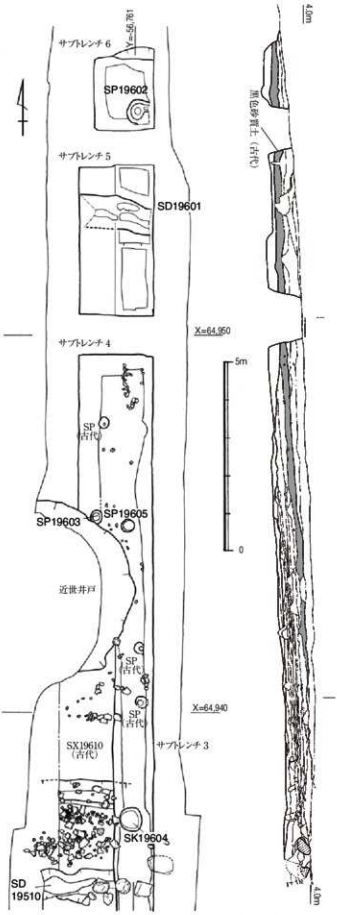


Fig.34　第25次・第26次調査トレンチ3 調査区北側中世期遺構配置図・土層断面図（1/100）

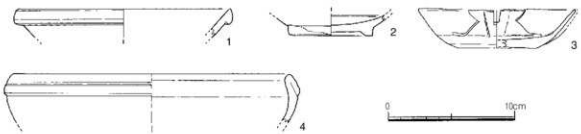


Fig.35　SX19600 出土遺物実測図（1/3）

図中の最上層は中世末の旧表土層で、暗褐色砂質土層である。この層の直上には築城時の造成土が盛られる。中世末の旧表土層の下の層はサブトレンチ５・６で褐色砂層、サブトレンチ４では上層よりやや暗い暗褐色砂質土層となる。サブトレンチ５の**溝SD19601**は、この旧表土層に切り込んでいる。この中世末旧表土層は、斜面裾から北へ約15mの範囲には存在せず、築城前に削平を受けたと考えられる。（吉武）

SX19600

No.	遺物名	遺物情報	法量(復元値) [残存値]
1	白磁 碗	明灰色精良胎 透明釉 釉溜わずかに淡オリーブ色	口(17.3)　高[2.2]
2	白磁 碗 加工品	一部縁辺打ち欠き 景德鎮系 灰白色やや粗胎 透明釉	底3.3　高[1.7]
3	白磁 皿	ヘラ押し輪花 灰白色胎 透明釉 釉垂わずかにオリーブ色 大きな貫入	口(12.5) 底(6) 高3.2
4	陶器 鉢	暗灰色粗胎(黒粒・砂粒含) 無釉 硬質 焼き締め風 淡い小豆色	口(22)　肥厚部(23.5)　高[4]

(cm)

SX19600出土遺物　Fig.35　**1**は白磁碗、**2**は白磁碗加工品、**3**は白磁皿、**4**は陶器鉢である。１はサブトレンチ３の中世末旧表土層から出土した。この旧表土層からはほかに13～14世紀ころの青磁小破片が出土しているが、いずれも時期を表す遺物ではない。２・３はサブトレンチ４の黒色砂質土層から、４はサブトレンチ６の同じく黒色砂質土層から出土した。２～４は古代中世過渡期の遺物で、参考資料である。

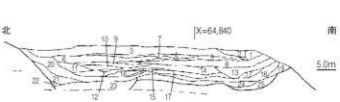
⑤その他の平坦面

SX17709（第23次調査、e760グリッド）　Fig.7、Fig.36、（『鴻臚館跡18』Fig.12）

谷部開口部調査で設定されたトレンチ03・04 -Tr.2東壁面で確認された平坦面である。幅5.6m、深さ80cm、床面標高4.7mで、平坦面の外側は溝状に窪んでいる。下層には鴻臚館時代の橋脚遺構（底面標高2.5m）、木樋遺構（底面標高3.3m）がある。福岡城の築城盛土直下に位置し、南側は池状遺構SG1046の流路に破壊される。築城直前まで残ったSG1046に隣接することから、水気を多分に含んだ土地であったことは想像に難くない。生活域には不向きと思われ、また随所に炭層が見られるので、畑地利用の可能性を考えたい。遺物は未検出である。

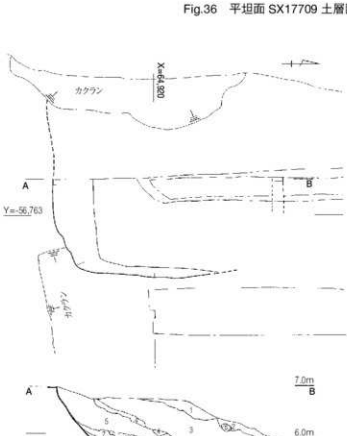
SX19501（第26次・第27次調査、n-m760グリッド）　Fig.37、（『鴻臚館跡22』Fig.152～153）

トレンチ３において検出された。台地北限の斜面を切り土することで平坦面を造り出したものである。北側に若干の立ち上がりが見られ、これを遺構の北限とした。西側は調査区外となる。幅4.8m、深さ1.1m、面の標高は5.7m前後である。底面から中世の白磁細片が出土したが、図示できなかった。ほかに、須恵器・土師器・陶磁器・土師器の移動式竈らしき破片や瓦など、古墳時代から古代にかける遺物や土錘が出土した。



1. 2. 3. 茶褐色粘質土 4. 炭混黒褐色土 5. 茶褐色土 6. 暗褐色土 (炭若干混) 7. 8. 暗褐色土 (上部北側 6 層との境に炭層) 9. 暗灰色粘質土 10. 茶色粘質土 11. 褐色土 12. 褐色土 13. 暗褐色土 (炭粒を多く含む) 14. 濃灰色粘質土 15. 16. 灰白色粘質土 17. 灰色土 (炭混) 18. 灰白色粘質土 19. 20. 灰褐色粘質土 21. 茶褐色粘質土 22. 茶色粘質土 23. 炭・灰互層 24. 明茶色粘質土 (上部 18 層との境に炭層)

Fig.36　平坦面 SX17709 土層断面図（1/80）



1. 灰褐色砂質土 (風化頁岩ブロック含む 瓦多く含む) 2. 灰色砂質土 3. 風化頁岩灰白色粘質土 (橙色粘質土粒含む) 4. 灰褐色砂質土 5. 風化頁岩橙色粘質土 (灰白色粘土粒含む) 6. 灰色砂質土＋頁岩ブロック少量 7. 頁岩ブロック＋灰色砂質土 8. 橙色粘土ブロック 9. 橙色粘土ブロック＋灰褐色砂質土 10. 灰黒色砂 (やや明るく頁岩粒含む) 11. 淡黄～灰白色粘土ブロック (風化頁岩) 12. 灰黒色砂 (頁岩粒含む) 13. 灰黒色砂

Fig.37　平坦面 SX19501 実測図（1/80）

(3) 台地周辺のその他の地形

ここでは、平坦面以外の特徴ある地形として２件を取り扱った。水溜まり状遺構については、台地上とさらに西側の地質ボーリング調査で散見されるものであり、当時の地盤環境を表している。

旧地形 SX1037（第17次調査、第3次調査の SB11と同、d820-830グリッド） Fig.38

第３次調査（8747）で検出した SB11と同一の遺構である。風化頁岩の地山を削り出した基壇状の遺構であるが、削平が著しく、後世の攪乱が多数ある。段落ち部分は東西に直線的に延びており、段の北側は斜面となり、ここには軒よりずり落ちたような状態で瓦が約３m の幅で堆積している。段落

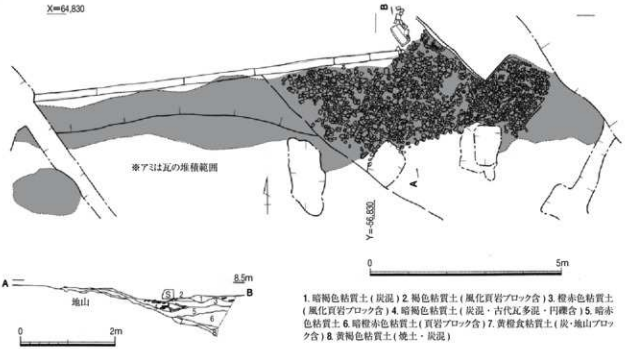


Fig.38　旧地形 SX1037 実測図（平面 1/100、土層断面 1/80）

ち下の最も深い部分は、基壇とみられる面より約50cm深く、断面U字形の溝状をなしており、古代の基壇に伴う雨落ち溝と考えられる。江戸時代の建物、及び陸軍兵舎と重複しており、断面図では３層までが江戸時代の整地層とみられ、４・５層が溝状をなす部分で、炭混じりの暗褐色粘質土と多量の古代瓦が堆積している。６層より以下は風化頁岩ほぐし土を主体とする古代の整地層と考えられる。遺物は鴻臚館跡に関連する瓦がほとんどを占めるが、直上には福岡城築城時の盛土が被る。よって瓦の堆積自体は中世末の段階のものであろう。（吉武）

SX1037出土遺物　（『鴻臚館跡Ⅱ』Fig.39、『鴻臚館跡19』Fig.134）　須恵器、土師器、中国産陶磁器（邢窯系・景徳鎮窯白磁、越州窯系青磁、陶器）、近世陶磁器、多量の瓦が出土した。SB11出土遺物については『鴻臚館跡Ⅱ』で本報告済みであり、イスラム陶器なども出土している。またSX1037については『鴻臚館跡19』で本報告済みで、中世に関する遺物は未検出である。

福岡城築城の造成土が直上に被ることから、遺構自体は中世末まで地表に露出していたものと考えられる。近世遺物は陸軍兵舎建設などに伴う混入品である。（吉武）

水溜まり状遺構SX1119（第18次調査、i850-j860グリッド）　Fig.7、（『鴻臚館跡12』Fig.27～28）

鴻臚館北館台地の西側、標高８m地点にある。岩盤の窪みと思われる水溜まり状遺構で、福岡城の道路整地で埋め立てられた。調査地内では皿状の窪みを呈し、遺構範囲は北側の調査区外に広がるものと思われる。埋土は灰色シルト層で、長さ・幅ともに12m、深さは15cmであった。人為的な池などとは印象を異にする。最下層の腐植土には鴻臚館関係瓦の細片が含まれる。遺物は断面隅丸方形の輪の羽口が出土したが、上層の遺物の可能性がある。そのほかに古代の土器と瓦の細片が出土した。

（池崎）

(4) 溝

鴻臚館台地上に営まれた大小の溝と、台地北側の斜面下低地面を走る溝を取り扱った。旧南館台地上のSD30は古代以来のルートを活用し築城直前まで存続した可能性が高いが、ほかは中世後半～末期の溝が多い。記述は遺構番号順で行った。なお、平坦面に付随する区画溝などについては (2) 平坦面の項に記し、池など遺構に付随する溝については各遺構の項で取り扱う。

SD30・(SD244)（第4次・第7次・第9次調査、A750-B840グリッド） Fig.39

第４次調査第１調査区の中央部を東西にわずかに蛇行しながら走る溝状の遺構である。古代建物SB31、SB32と重複関係にあり、いずれもSD30が切っている。溝はSB31の基壇中央部にある地下式土坑SK28の前面で西端が消え、東側はSK33付近で遺構の切り合いが激しいために不明瞭になる。溝幅は東側で1.8m、西にいくにしたがい幅をせばめ、西端では約１mとなる。深さは西が浅く、東が深い、10～30cmで断面U字形をなす。溝内は黒灰色粘質土層によって埋まっている。埋土中からは多量の瓦類と共に青磁器、白磁器、須恵器、土師器が混在して出土する。出土遺物にはほとんど混じりがないが、攪乱されていない溝底より中世の陶磁器が出土し、時期的に下るものであることが判明した。用途は決めがたいが、形状からは丘陵上にみられる山道の凹んだ状態と類似し、時期的に考えて、地下式土坑に至る墓道かともみられるが、確証はない。(山崎純男)

第７次・第９次調査において、上記SD30につながる溝状遺構としてSD244が確認された。東端では古代の東門遺構SB300の中央を貫通する。古代以来の通路が、形を変えながらも長く存続した可能性を色濃く表している。溝底面は東側から段状になり、段差はそれぞれ40～50cmである。SD244のみで長さ51m、幅は東が広く3.5m、西は広いところで２mほどである。SD244はSD30と統合した。溝の全長は87mとなる。底面標高は西端で９m、東端で7.5m、高低差1.5mとなり、勾配は1.7%である。

SD30・(SD244) 出土遺物 Fig.40、(『鴻臚館跡Ⅰ』Fig.37～38) １～４は第４次調査（西側）で出土し、１・２は上層から、３・４は下層からの出土である。５～10は第７次・第９次調査（中央～東側）で出土した。**1**は古代白磁碗の縁辺を打ち欠き加工したものである。**2**は青白磁像か水滴の可能性もある。磁胎は精良で青味がかった透明釉が美しい。**3**は白磁皿、**4**は刷毛目粉青の碗である。**5・6**は青磁碗、**7**は陶器甕、**8**は瀬戸天目、**9・10**は漆器碗である。図示したもののほかに、近世陶磁器、古代の青磁・白磁・土器などが出土している。一部古代遺物については、『鴻臚館跡Ⅰ』で第４次調査出土遺物の報告がある。底面から３・４が出土していることから、この遺構は中世末までの存続が考えられ、江戸時代に城内区画が整う直前まで機能した可能性が高い。

SD873（第13次調査、H840グリッド） Fig.41、(『鴻臚館跡８』Fig.10～11)

第13次調査区のほぼ中央に位置する。江戸期表土の下面で検出した。埋土は暗灰褐色混砂粘質土である。幅は0.56～0.68m、深さは10～15cmである。断面形は浅皿状。ほぼ南北に延びている。SD892との先後関係は不明である。古代瓦片、越州窯系青磁細片が若干出土している。(田中)

SD892（第13次調査、H840グリッド） Fig.41、(『鴻臚館跡８』Fig.10)

第13次調査区の西側トレンチ江戸期表土と中世包含層下部で検出した。埋土は灰褐色粘質土。幅は約0.4m、深さ0.1m前後を測る。やや西に偏しながら南北に延びている。南へ向かって底面は低くなっている。SD873との先後関係は不明。古代瓦小片、白磁細片が出土している。(田中)

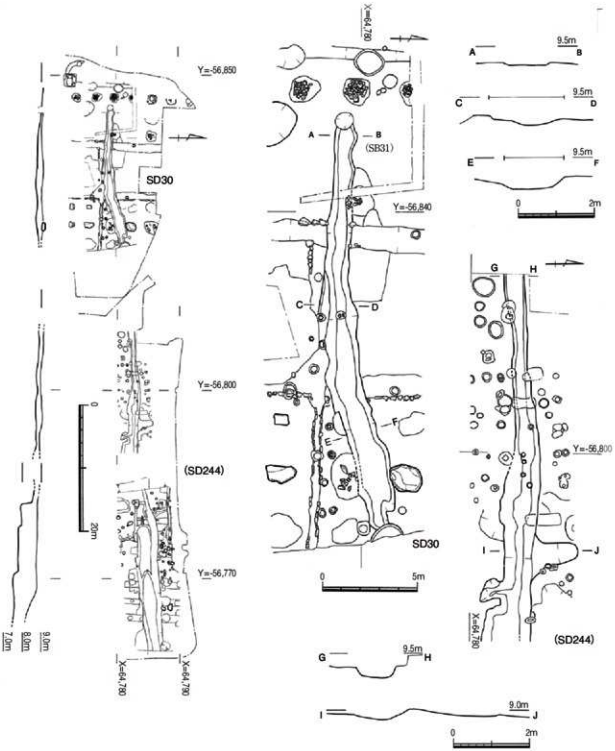
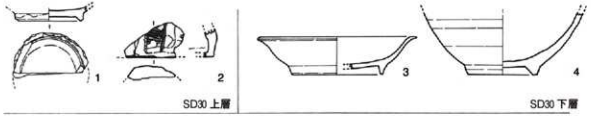


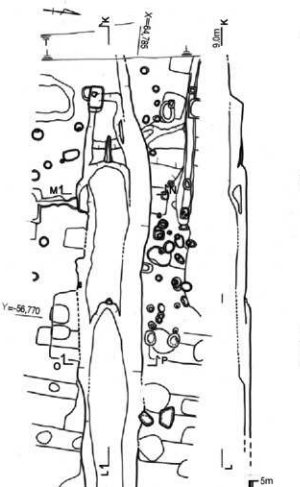
Fig.39　溝SD30・(SD244)実測図（全体図は水平 1/600・垂直 1/200、遺構個別図は平面 1/200・断面 1/100）

SD1057（第17次・第18次調査、g840-e850グリッド） Fig.42

谷頭付近、古代の陸橋状遺構に切り込んだ溝である。長さ18m、幅1.2～1.8m、深さ30cmである。南側は残りがよいが、北側は削平によるものか上端が曖昧になっている。底面は南側で7.5m、北側で7.2mとなり、鈍角にSD1060方向へ流路をとる。上層遺構による攪乱などでSD1060との接点はわからないが、一連の溝の可能性がある。また、SD1081と切り合うが、先後関係は不明である。



(SD244)



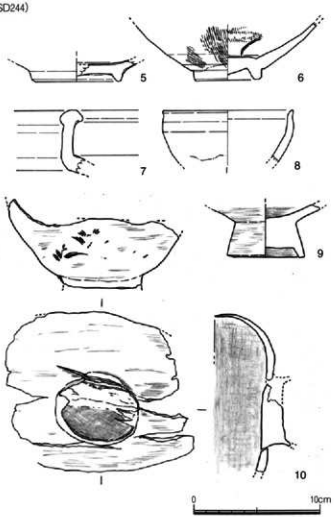


Fig.40　SD30・(SD244)出土遺物実測図（1/3）

SD30・(SD244)

No.	遺物名	遺物情報	法量(復元値) [残存値]
1	白磁 碗 加工品	縁辺打ち欠き 古代遺物を再利用 明灰色精良胎 やや黄味透明釉 粗い貫入 硬質 端部一部摩耗	底(5.5)　高1.1
2	青白磁 像	水流の可能性も 型づくり 薄かに灰色がかる白色 極精良胎 青白色透明釉	高[2]
3	白磁 皿	灰白色精良胎 透明釉 艶やか	口(12.6)　高3
4	粉青 碗	刷毛目粉青 灰褐色良胎(白色礫粒多含) 硬質 内面白化粧 外面白土刷毛塗 透明釉 見込み・畳付き目痕	底(6)　高[4.5]
5	青磁 碗	龍泉窯系 高台内蛇の目釉剥ぎ 淡灰白色精良胎 淡青緑色透明釉 貫入	底(7)　高[1.7]
6	青磁 碗	初期同安 淡灰色精良胎(龍泉に近い) 黄味強い オリーブ色透明釉 艶やか	底5.4　高[4.6]
7	陶器 瓶	決建窯 暗紅灰色良胎(白色砂粒多含) 硬質 黒褐色不透明釉 剥落顕著 破鈴か	—
8	天目 碗	瀬戸美濃系 黄白色精良胎 軟質 黒褐色不透明釉白濁	口(10.4)　高[4.3]
9	漆器 椀	外面黒漆 内面黒漆のち赤漆 赤漆剥落顕著 削り出し高台 畳付摩耗	底6.2　台高2.7　底厚2.1　高[4.1]
10	漆器 椀	蓋み有し(形状復元不能 外面黒漆地に赤漆彩文(草文) 内面黒漆のち赤漆 漆剥落顕著	[15×12.5]　高[7.0]

(cm)

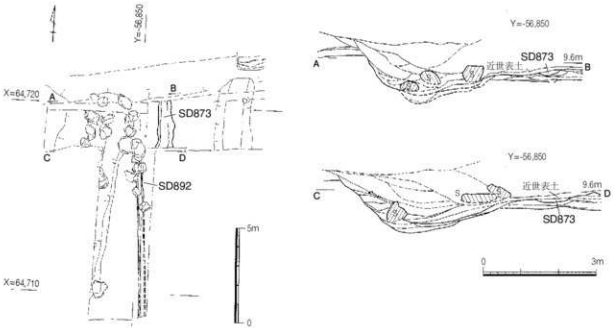


Fig.41　溝 SD873・SD892 実測図（平面 1/200、断面 1/100）

SD1057出土遺物　Fig.42　**1**は青磁香炉で龍泉窯系、**2**は粗砥石である。1は第17次調査で、2は第18次調査で出土した。上記のほかに、下層から同安窯系青磁の破片が出土した。

SD1060（第17次調査、g830グリッド）　Fig.42

堀が埋没した後、陸橋状土提の上を通って池SG1046または自然堆積段階の堀SG1045に流れ込む流路である。（大庭）

SD1060出土遺物　Fig.42　**3**・**4**は中国産の白磁である。3は平底の皿で、見込みと体部との境に圏線がめぐる。4は口禿の皿である。施釉後、口縁部の釉を掻き取って露胎とする。**5**は天目碗である。口縁部は屈曲して、いわゆる鼈口となる。上記のほかに青白磁の細片が出土した。（池崎）

図示した遺物4・5からは、14世紀頃の年代が与えられるが、SG1046との関係から実際に機能したのは、16世紀代であったと考えられる。（大庭）

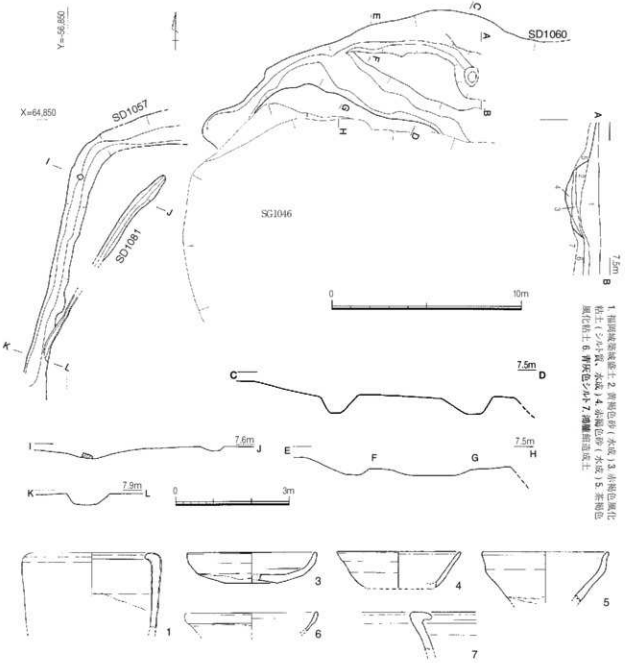
SD1081（第17次調査、f840-e850グリッド）　Fig.42

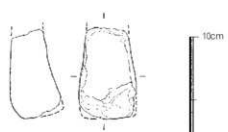
谷頭付近、古代の陸橋状遺構に切り込んだ溝である。SD1057の東側に南北に走る。SD1057と切り合うが先後関係は不明である。非常に浅く、上層遺構の影響により断続的である。検出長12m、幅60cm、深さ10cm、底面標高7.4mである。

SD1081出土遺物　Fig.42　**6**は白磁小碗、**7**は陶器鉢で、いずれも破片である。上記のほかには古代の青磁、須恵器破片などが出土した。

SD1222（第19次調査、i750-j770グリッド）　Fig.43

北から南下し、東側にL字形に屈曲する浅い溝である。東側でSK1235に合流し、南側の池状水溜まりに流下する。建物周辺をめぐる雨落ち溝と思われる。溝はSK1235のさらに東にも延長すると見





SD1057

No.	遺物名	遺物情報	法量(復元値)[残存値]
1	青磁 香炉	龍泉窯系 僅かに灰味ある白色精良胎 黄味～青味がかるオリーブ色釉(微細気泡含)	最大径(11) 内径(8.5) 高(6)
2	砥石	粗砂石 凝灰質砂岩か 摩耗 著しい 上下面・両側面・端部に砥面	長[7.2] 幅4.6 厚2.6～4.0

SD1060

No.	遺物名	遺物情報	法量(復元値)[残存値]
3	白磁 皿	白色良胎 堅緻 青味がかる釉 露胎部赤みがかる	口(10.2) 底4.0 高[3.8]
4	白磁 皿	口売 ややざっくりした胎 白色不透明釉 外面ピンホール多 被熱軟化	口(9.8) 高[3.8]
5	天目 碗	端口 灰色良胎 天目釉 被熱発泡	口(10.0) 高[4.0]

SD1081

No.	遺物名	遺物情報	法量(復元値)[残存値]
6	白磁 小碗	福建産か 白色精良胎 僅かにオリーブがかる透明釉	口(10.6) 高[1.5]
7	陶器 鉢	磁社窯系か 精良胎(石英粒含) 無釉 堅緻	—

(cm)

Fig.42 溝 SD1057・SD1060・SD1081 実測図（平面 1/200、断面 1/100）、出土遺物実測図（1/3）

られるが、調査区境となり途切れる。西辺の北側は未掘である。溝内の区画は南北10m以上、東西22m以上で、溝の全長は32m以上、深さは10～20cmで底面の勾配はない。(池崎)

SD1222出土遺物 Fig.44 **1**が土師質土鍋、**2**が土師器小皿、**3**が口縁部直下に印文を持つ土師質火舎、**4**が朝鮮の刷毛目粉青沙器碗、**5**がⅣ類の白磁である。(池崎)

SD1239(第19次調査、h750-760グリッド) Fig.43

鴻臚館第Ⅲ期の整地層を切って、西から東へ流れ込み、SD1240と合流する。埋土の最上面には鴻臚館関係瓦の細片が密にある。これに混じって中世の遺物が散見される。長さ8m、幅は最大で1m。調査は検出のみでとどめた。(池崎)

SD1239出土遺物 Fig.44 **6**は朝鮮の刷毛目粉青沙器碗で、見込みに目跡が残る。**7**は土師質の擂鉢、**8**は瓦質陶器湯釜の耳である。ほかに古代陶磁器、瓦質火鉢、明代の青花破片、碁石などが出土した。(池崎)

SD1240(第19次・第23次・第29次調査、j740-g770グリッド) Fig.43

鴻臚館北館台地の南西コーナーを廻るように走る溝である。鴻臚館第Ⅲ期建物SB1228を斜断する形で掘られるため、礎石跡が一部壊されている。底面標高を辿ると、排水機能を目的とするほどの勾配はなく、台地からの水を受けゆるやかにSD17059方向へと流す構造になっている。途中未検出となっている箇所を境に、長さは南側で23m、北側で11m、全長は43mとなる。幅は南側で2m、北側で1m、深さは南で50cm前後、北で40cmを測る。(池崎)

山崎龍雄氏は、台地を廻るように掘られた様相が砦の横堀に類似すると指摘している。

SD1240出土遺物 Fig.44 (『鴻臚館跡13』Fig.16) **9**～**11**は陶器、**12**は瓦質鉢である。ほかに、同安窯系青磁・李朝陶器・瓦質鍋など中世遺物破片、古代遺物、交胎陶器陶枕破片といった珍しい遺物も出土した。一部の遺物は『鴻臚館跡13』でも報告している。

SD1242・1244・1268(第19次調査、g770グリッド) Fig.7

SD1242は、調査区西南部で検出された南北溝で、SD1242と接する東西溝SD1244、その北側でL字形溝のSD1268と一連のものであろう。SD1242は鴻臚館第Ⅲ期の整地層を切って、第Ⅲ期建物SB1228の礎石抜き穴を消滅させている。後世の削平によりいずれもごく浅く、Fig.7では上端の形のみを示している。(池崎)

SD1242出土遺物 Fig.45 **1**は青磁碗、**2**～**4**は白磁碗で、3・4は加工品である。**5**は陶器の破片、**6**は東播の捏ね鉢、**7**は土師質の擂鉢である。上記のほか、古代遺物が出土した。

SD1244出土遺物 Fig.45 **8**～**10**は土師器の皿で、糸切り底である。このほか古代遺物が出土した。

SD1268出土遺物 Fig.45 **11**は白磁碗優品の破片である。このほか古代遺物が出土した。

SD1272(第19次調査、h760グリッド) Fig.43

SD1239の西側で、南北に走る。長さ4.5m以上、幅20～25cm、深さ20cm内外である。遺物は出土していない。

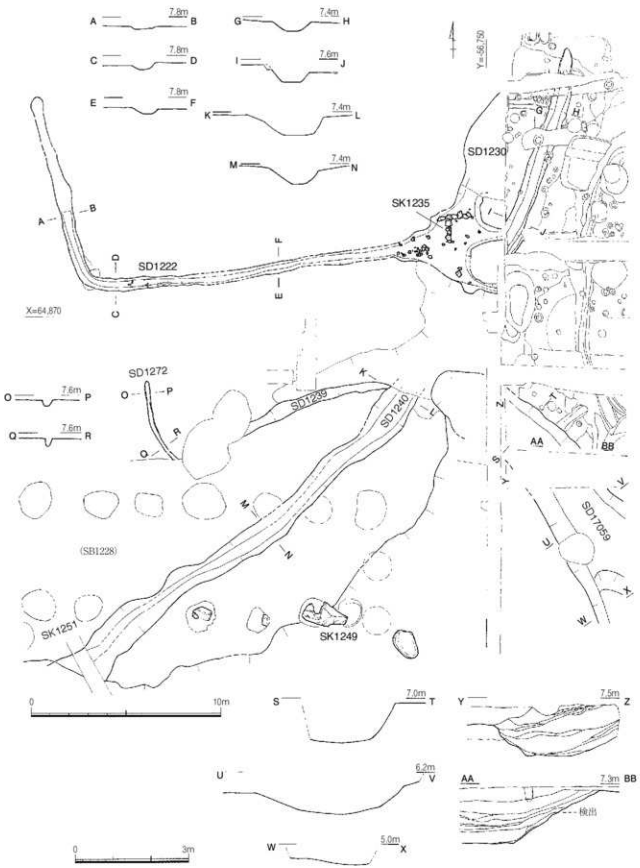
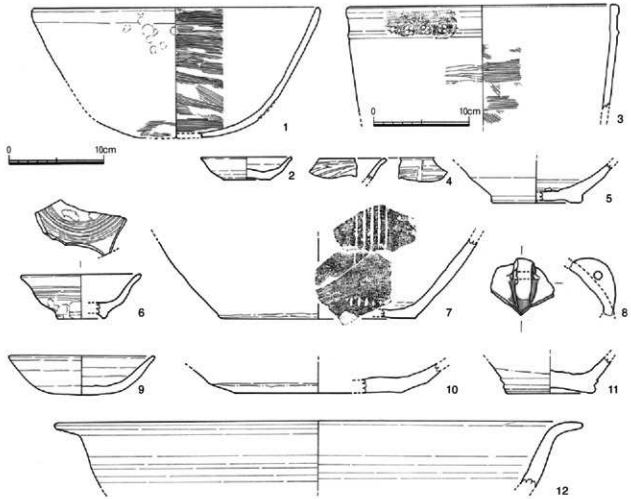
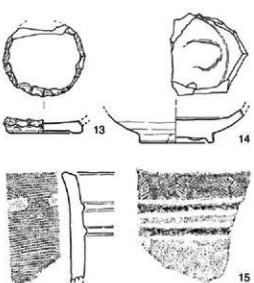


Fig.43　溝 SD1222・SD1239・SD1240・SD1272・SD17059 実測図（平面 1/200、断面 1/100）





SD1222

No.	遺物名	遺物情報	法量(復元値)(残存値)
1	土師質 鍋	胎土に砂粒多含 外表面中位下方が帯状に剥落 褐色～黒褐色 外面に煤	口(30)　高(14)
2	土師器 皿	ヘラ切り 胎土に金雲母多め	口7.2　底3.8　高1.8
3	瓦質 火舎	やや粗胎(砂粒多含) 被熱により橙褐色～淡赤褐色に変色 やや軟質	口(28.5)　高[13]
4	粉青 碗	刷毛目粉青 灰色やや粗胎(砂粒・黒粒多含) 白化板 緑がかる透明釉	…
5	白磁 碗	灰褐色がかる白色良胎 硬質 やや緑がかる灰色釉	底7　高[3.5]

SD1239

6	粉青 碗	刷毛目粉青 灰色粗胎(白粒・黒粒含) 白色土刷毛塗 緑がかった透明釉 見込・畳付目痕	口(9.5) 底(3.8) 高3.5
7	土師質 擂鉢	櫛目5条 胎土に微細石英粒少含 焼成良好 軟質 赤味強い白橙色 使用による摩耗顕著	底(15.5)　高[6.3]
8	瓦質 湯釜	雲付 灰色精良胎(微細砂粒・金雲母含) 焼成良好 煤付着	…

SD1240

9	陶器 坏	灰色良胎(黒・白粒やや含) 暗褐色～暗橙色・やや灰かぶり 焼成良好 極硬質	口11.7 底5.7 高3.5
10	陶器 鉢	福建か 灰色粗胎(白砂粒多含) 淡黄褐色～淡深緑色釉 内面釉下淡灰色化粧土 硬質	底(13)　高[2.5]
11	陶器 壺 加工品	緑辺打ち欠き 福建か 灰色良胎(白細砂粒多含) 黄褐色釉 ピンホール 釉既白濁 極硬質	底6.6　高3.2
12	瓦質 鉢	灰色精良胎(砂粒・黒粒含) 焼成やや軟	口(22)　高[5]

SD17059

13	白磁 碗 加工品	緑辺打ち欠き 白色精良胎 微かに緑味ある透明釉 高台内八ツ桐 下層出土	底6.1　高1.2
14	青磁 碗	龍泉窯系 明灰色精良胎 緑黄色透明釉 大きな貫入 高台内八ツ桐 下層北裾敷出土	底6　高[2.8]
15	瓦質 火舎	灰色やや粗胎(石英粒多・金雲母少含) 内面黒灰色 下層南裾敷出土	口(32)　高[8.8]

(cm)

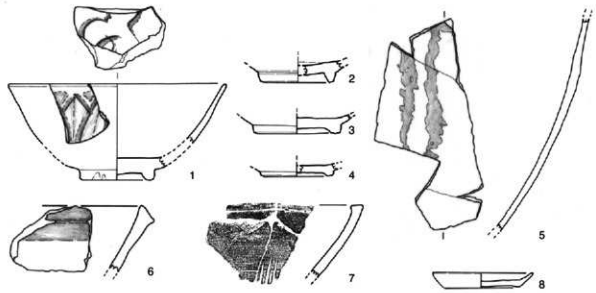
Fig.44　SD1222・SD1239・SD1240・SD1272・SD17059 出土遺物実測図（1・3は1/4、他は1/3）

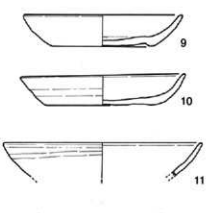
SD17059（第19次・第23次調査、g740-h750グリッド） Fig.43

台地斜面を走る大溝である。第19次調査区で溝の北西端が検出され、第23次調査区（グリッド３・グリッド５）においては掘削調査が行われ、下位で湧臨館時代の石垣遺構SX17703が検出された。

溝は北西から南東に走る。南東方向は調査区外となり、検出長は7.5mである。底面標高は、台地下で4.6mであるが、最下地点は調査区外にあると思われる。第19次調査区で確認された溝の検出点は7.2mである。仮にこの検出点を溝の消滅点とし底面とするならば、高低差2.6m、勾配は約35%と急傾斜である。底面には灰色粘土層が見られる。この層の上面は礫が集中し、鉄分が沈着して硬化する。堀底道の様相を呈する。灰色粘土層の１層上はゆるい暗褐色土層であり、ここから交趾青釉陶器小皿が出土した。（大庭）

SD17059出土遺物 Fig.44 **13**は白磁碗の加工品、**14**は青磁碗、**15**は瓦質火舎である。上記のほかに、交趾青釉陶器小皿・龍泉窯系青磁・白磁・陶器・備前焼擂鉢・瓦質擂鉢など中世陶磁器の破片と、陶磁器・瓦など古代遺物が出土した。





No.	遺物名	遺物情報	法量(復元値)(現存値)
SD1242			
1	青磁 碗	龍泉窯系 灰色精良胎 青味がかる緑色釉 堅緻	口(17.2) 底(6) 高7.6
2	白磁 碗	淡灰色精良胎(黒色粒含) 僅かにオリーブ色がかる透明釉	底(5.8) 高[1.7]
3	白磁 碗 加工品	打ち欠き部に使用痕 スクレイパーとして使用か 灰白色精良胎(黒色粒含) やや黄灰色がかる透明釉	外径(8.4) 底(6.8) 高1.5
4	白磁 碗 加工品	縁辺打ち欠き 灰色精良胎 僅かに黄味がかる透明釉	外径(6.5) 底(5.6) 高1
5	陶器 鉢	灰褐色～赤褐色粗胎(粗砂粒含) 焼成良好 内外面褐釉	—
6	東播 擂ね鉢	須恵質 灰色精良胎(砂粒・黒粒含) 口縁部外面に自然釉	—
7	土師質 擂鉢	胎土に粗砂粒や小礫含む 焼成良好	—
SD1244			
8	土師器 皿	糸切り 粗胎(砂粒・鉄粒・雲母含)	口(7.9) 底(1.5) 高1.3
9	土師器 皿	糸切り やや粗胎(鉄粒・砂粒・雲母含)	口(12.6) 底(8) 高2.5
10	土師器 皿	糸切り 良胎(砂粒・鉄粒・雲母含) 焼成良好	口(13) 底(9) 高2.5
SD1268			
11	白磁 碗	優品 白色精良胎 透明釉 艶やか	口(15.9) 高[2.5]

(cm)

Fig.45 SD1242・SD1244・SD1268 出土遺物実測図（1/3）

SD19510（第26次調査、o760グリッド） Fig.46

トレンチ３調査区のサブトレンチ３で検出された東西溝である。古代推定築地塀（SX19610）の粘土層残存箇所に南接し、古代の整地層に切り込んでいる。溝周辺で50㎝以下の円形・角形の石が散在し、溝内に落ち込んだ石もある。検出長２m、幅１m内外、深さ70㎝以上、底面標高3.1m以下。南側の中世土坑SK19517とは先後関係は不明で、瓦堆積遺構SX19511は本件SD19510埋土上層部分で接する。遺構の間に石が介在するので切り合いとなるか、関連であるかは不明である。

SD19510・SX19511出土遺物 Fig47　SD19510から陶器甕破片のみ出土したが、SX19511出土遺物と接合したので、SX19511の影響であろう。これ以外の遺物は未検出である。Fig.47はSX19511出土遺物である。SX19511はSD19510と隣接するので、関連遺物としてここで取り扱った。**1**は中世初頭の白磁碗、**2**～**4**は青磁で、２は明代のものである。**5**は陶器瓶、**6**は備前の擂鉢である。このほか、磁灶窯系陶器の壺破片など陶磁器と、古代遺物が出土した。鉛・鉄滓も出土したが金属類は未調査である。

SD19601（第26次調査、q760グリッド） Fig.46

トレンチ３調査区のサブトレンチ５で検出された東西溝である。検出長２m、幅90㎝、深さ60cm、底面標高3.2mである。

SD19601出土遺物 Fig.48は陶器で、厚さ５㎜の板状小破片である。オリーブ色がかる明灰色精良胎で磁胎に近い。白化粧のち彫施文をし、淡い小豆色土を象嵌している。 釉は白濁するが艶やかで、僅かに残る程度である。古代の遺物か。上記のほかに、同安窯系青磁の破片が出土した。（池崎）

SD24137（第31次調査、p780-o790グリッド） Fig.46

トレンチ６調査区で検出された東西溝である。調査区内のトレンチ１に見える１～４層は中世末の整地層SM24139で、この整地層の下で検出された。古代の整地層に切り込み、鴻臚館所用瓦を多量に含む。検出長８m、幅３m、深さ60㎝、底面標高は3.4m、狭い範囲ではあるが勾配はない。SD24138よりも後出するものと思われる。図示できなかったが、15～16世紀の陶磁器が出土した。

SD24138（第31次調査、p780-o790グリッド） Fig.46

トレンチ６調査区で検出された東西溝で、SD24137と切り合い、SD24137に先行する。調査区内のトレンチ２における６層（暗褐色粘質土）がこの溝にあたると思われるが、南側の上端は調査対象域外であった。検出長６m、平面検出時の幅は80㎝である。深さは概ね20㎝であるが、下端標高は南が高く北が低い。遺物は未検出である。

SD25048・SD25056（第31次調査、o830-n850グリッド） Fig.46

トレンチ１調査区の斜面下で検出されたともに東西溝で、古代の整地層に切り込んでいる。築城造成が行われる前の斜面は、中世の整地層SM25058が含む大量の古代瓦が露出、また崩落する環境下にあり、斜面際下にあるSD25048・25056の上位には大量の瓦が堆積していた。SD25048は、検出長20m、幅1.2m、深さ30㎝である。斜面途上の溝で、勾配の有無は不明確である。SD25056は、検出長13m、幅２m、深さ50㎝で、底面はいずれも3.5m前後であり勾配はない。土層断面から、SD25048が後出することが分かる。

SD25048・SD25056出土遺物 Fig.49　２つの遺構の遺物を同時に取り上げた。**1**は白磁碗、**2**・**3**は陶器で２が注口部分、３が甕である。**4**は瓦質土器の鍋、鍔付で煤が付着する。ほかに陶器壺・土

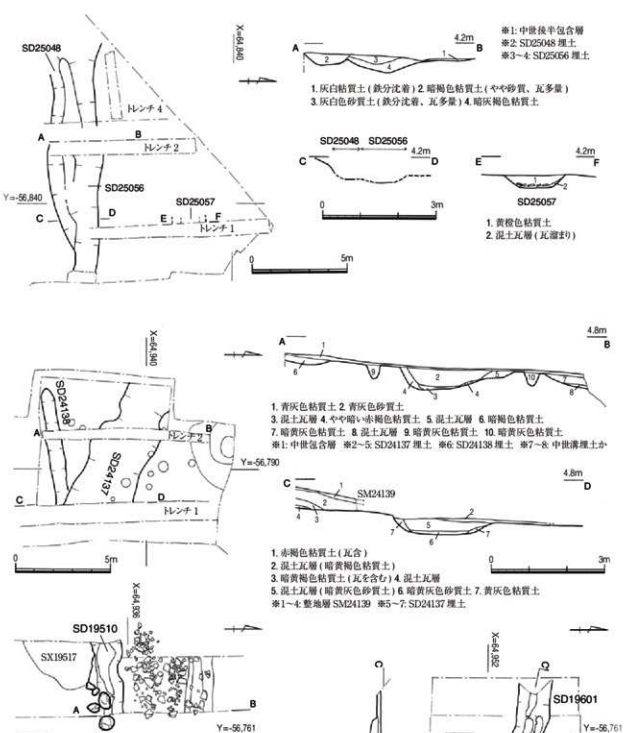


Fig.46 溝 SD19510・SD19601・SD25048・SD25056・SD25057・SD24137・SD24138 実測図
（平面 SD19510・SD19601は1/100、他は1/200、断面・土層断面は1/100、SD19510土層断面拡大は1/50）

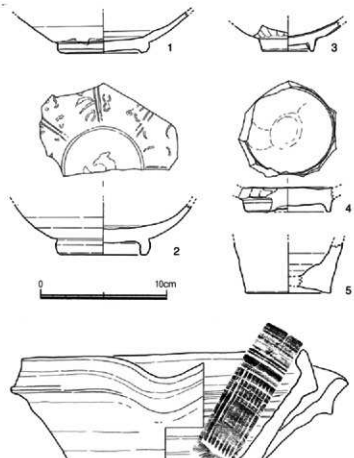


Fig.47　SD19510 関連 SX19511 出土遺物実測図 (1/3)

Fig.48　SD19601 出土遺物写真 (1/1)

SX19511

No.	遺物名	遺物情報	法量(復元値) [残存値]
1	白磁 碗	灰白色胎(黒色粒微含) 青味がかる灰白色釉 堅緻	底(7.3)　高[3.2]
2	青磁 碗	龍泉窯系 灰色粗胎(微細砂粒含) 暗灰緑色不透明釉 貫入 高台内赤胴色 焼成やや不良	底7　高[2.5]
3	青磁 小碗	龍泉窯系 鎬蓮弁 淡灰白色胎(黒色粒含) 堅緻	底(4)　高[2.5]
4	青磁 碗 加工品	縁辺打ち欠き 灰褐色胎(黒色・白色粒微含) オリーブ灰色釉 堅緻	底6.7　高[2]
5	陶器 瓶	灰黄褐色胎(微砂粒含) 焼成良好	底6.8　高[4]
6	備前 擂鉢	ほぼ完形 擂目9条 胎土に1~2mm白色粒と黒色粒少含 紫味ある茶褐色~茶褐色 堅緻	口22.6　底13.7　高7.7~10.2

(cm)

SD25048・SD25056

No.	遺物名	遺物情報	法量(復元値) [残存値]
1	白磁 碗	灰白色やや粗胎 僅かに灰味ある透明釉	口(15)　高[2.5]
2	陶器 水注	福建付近か 暗褐色胎 茶褐釉	—
3	陶器 壺	朝鮮陶器の可能性 小豆色胎 内外面に茶味ある釉 被熱剥落	口(23)　高[3.3]
4	瓦質 鍋	東播系 鉤付 灰色胎 煤付着	鉤(21.8)　高[7]

SD25057

No.	遺物名	遺物情報	法量(復元値) [残存値]
5	青磁 碗	龍泉窯系 緑味ある青磁釉 艶やか 優品	口(16.8)　高[5]
6	白磁 杯	口禿 白色胎 僅かに青緑がかる釉	口11.5　底6.3　高3.4
7	陶器 鉢	磁壮窯か 硬質焼成	—
8	陶器 盤	磁壮窯か 底部小片 小豆色胎 硬質焼成	—
9	陶器 壺	四耳壺 浙江省あたりか 褐色釉 被熱剥落	口(11.4)　胴(18.2)

(cm)

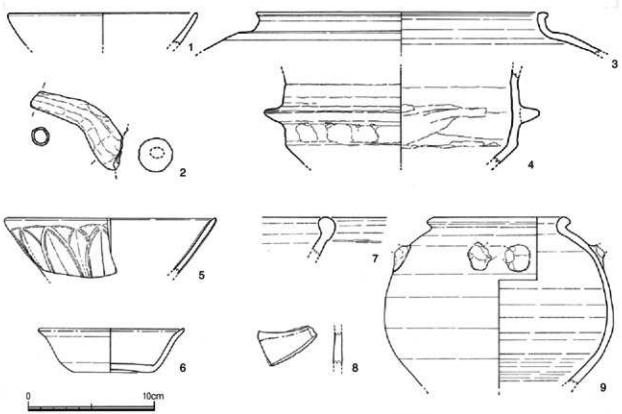


Fig.49　SD25048・SD25056・SD25057 出土遺物実測図 (1/3)

師質鍋など中世遺物が出土した。

SD25057（第31次調査、o830グリッド） Fig.46

トレンチ1調査区内のトレンチ1で溝の断面が確認された。平面は未検出である。幅1.6m、深さ30cm、底面は瓦敷きで標高3.3m前後である。築城盛土直下の遺構である。

SD25057出土遺物 Fig.49 **5**は青磁椀、**6**は白磁杯で口禿、**7**～**9**は陶器である。5・7は1層から、ほかは2層から出土した。

(5) 池

谷部と鴻臚館北館台地上の4ヵ所で確認された。谷部では、古代SD1045が徐々に埋没し、池SG1046として築城直前まで残っている。中世前半では、鴻臚館時代東門東側の池SG23206と、埋没過程にあるSG1046が、中世後半では台地上のSX14340周辺遺構があり、なお埋没過程にあるSG1046と、北西端のSG2504は築城直前まで存在した。

以下の記述は遺構番号順に行った。

SG1046（第17次調査、e770-f820グリッド） Fig.50～51

福岡城築城時埋立て直下の遺構である。東西に伸びる堀SD1045が鴻臚館廃絶後徐々に埋没し、中世後期まで池となって残っていたものである。底には青灰色粘質シルト、流砂が堆積しており、西側からSD1081の溝を経由して水が流入し、それが溜まる状態にあった事を示している。この池を南北に横断する幅7～8m程の築堤または陸橋状の高まりがあり、西側に溜まった水はここをオーバーフローして東側に流れ込むようになっている（Fig.50）。西側の底面標高は6.4m、陸橋状の高まりは6.6m、東側は調査区境界で5.8mである。底面には酸化鉄層が重なっており、数回にわたって嵩上げされたものと考えられる（Fig.51）。この池の南北斜面底面には鴻臚館由来の瓦が大量に堆積している。南北斜面立ち上がりの瓦群は平成10年度のグランド部分の試掘で既に確認されており、その段階で東西に走る谷の存在が想定されていたのであるが、時期については明らかではなかった。平成11年度調査では、鴻臚館の瓦に混じって、明および朝鮮時代の陶磁器が多く出土しており、中世後期の段階で鴻臚館跡地の整地が行われ、その際瓦を池に廃棄したものと考えられる。このことは中世後期段階で大規模な整地を行う施設の存在がうかがわれ、さらに鴻臚館に由来する瓦の堆積が池の南北両斜面にみられることは、鴻臚館の建物が池（堀）の南側だけではなく北側にも存在したことを示唆している。すなわち、北側斜面の瓦は北側建物群に由来し、南側斜面の瓦は南側建物群に由来すると考えられるので、南北に堆積した遺物の比較は、とりもなおさず南北建物群の時期的な変遷や施設の性格を比較することにもつながり、重要な手続きである。これら古代の調査成果については、『鴻臚館跡18』で詳しく報告している。（池崎）

SG1046出土遺物 Fig.52～54、（『鴻臚館跡18』Fig.29～39）

『鴻臚館跡18』では、南北台地上の施設の傾向を把握するため、f区＝北側斜面、e区＝南側斜面に区分して掲載している。今回は、中世遺物を抽出し、器種・器形でまとめた。『鴻臚館跡18』掲載の遺物に加え、新たに追加した資料も盛り込んだが、紙面の都合により前著の掲載遺物を一部割愛した。

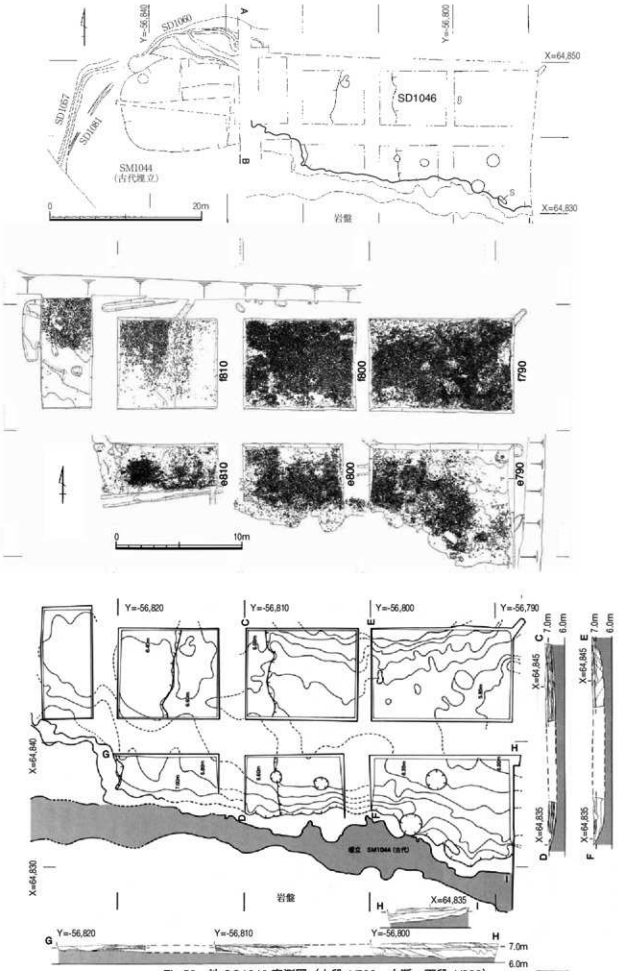


Fig.50　池 SG1046 実測図（上段 1/500、中断・下段 1/300）

Fig.51　池 SG1046土層断面図（1/100）

出土地点は、e790からg830グリッドで、グリッド名の右にFig.52～54の遺物番号1～57を記した。

e790: 47
e800: 3、34～36
e810: 9、19
f790: 1、2、4～6、8、10～11、13、15～18、23～24、26～27、31、33、37、46、48～52、55、57
f800: 7、20、22、30、38、41～42、45、53～54、56
f810: 12、21、28～29、32、39～40、43～44
g830（Fig.7）: 14、25

e列（南側斜面）は、f列（北側斜面）に比べると、中世遺物の出土量が各段に少ない。中世段階の生活の場は北側を中心としたものであろう。

遺物は主に破片で、12世紀前後から16世紀頃のものまで幅広く出土している。

1～**11**は白磁碗で、1は口禿、2は内面が無釉なので脚台の可能性もある。3～7は縁辺打ち欠きによる加工品で、3・4はⅤ類、5・6はⅣ類、7・8は見込み蛇の目釉剥ぎである。**12**～**17**は白磁皿で、12は口禿、14は薄手で艶やかである。15～17は高台に抉りをもち、尖端に重ね焼きの釉が付着する。**18**～**27**は青磁碗で、18～26は龍泉窯系、27は同安窯系である。**28**～**30**は龍泉窯系青磁皿である。28・29は同形同大の明代の皿で、2枚が重なり伏せた形で出土した（f810グリッド）。28～30は見込みを円形に掻きとる。**31**は明代の青花碗である。**32**～**37**は陶器で、32四耳壺は外面から内面口縁下に白化粧を施す。34は肩にくっきりとした稜線をもつ。35は磁灶窯系鉢か。36は体部を叩きしめている。37は擂鉢または捏ね鉢である。**38**～**43**は朝鮮半島産で、38・39は白磁碗、40は陶器碗、41は印花粉青の鉢、42・43は刷毛目粉青の皿である。

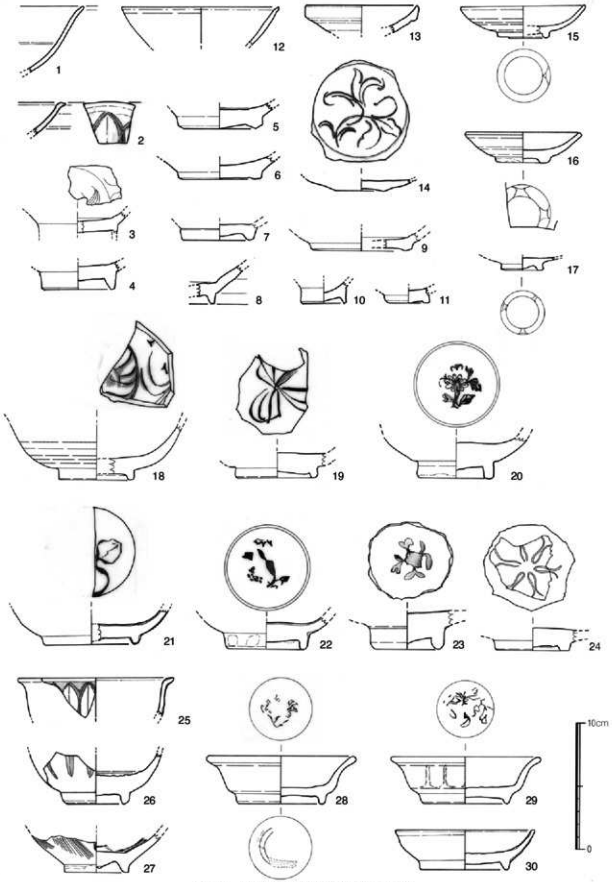


Fig.52　SG1046 出土遺物実測図 1（1/3）

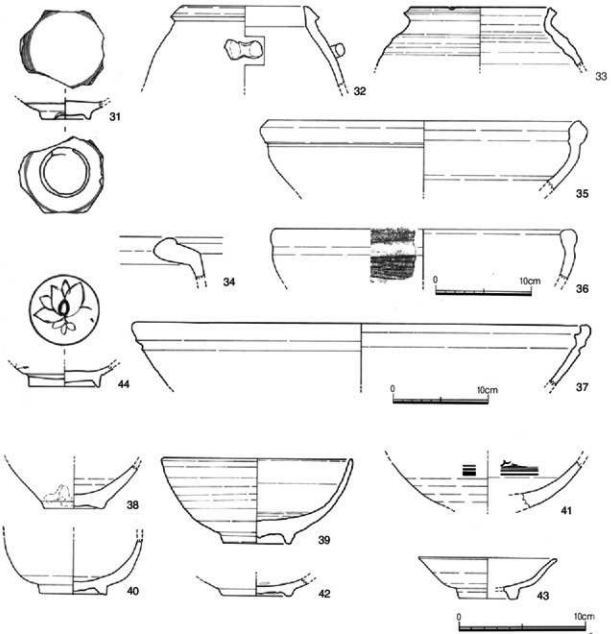


Fig.53　SG1046 出土遺物実測図２（36は1/4、他は1/3）

44はベトナム産青花の皿か。軟質の白色胎に白化粧を施し、青黒い呉須で内外面に絵付けをする。高台削り出しの中心がずれる。二次的被熱により全体がカセている。**45**～**49**は国産陶器である。45は瀬戸天目で、鐺口。外面体部下端を直角に削り出し、高台を造る。高台内をわずかにえぐる。胎土はザックリとした磁質で、濃い鐺甲色の釉が内面と外面下半までかけられ、端部と見込みには厚い釉溜まりが生じる。大窯第３段階に編年されるもので、16世紀後半の製品である。46は瀬戸焼のおろし目皿で、糸切り底である。47は瀬戸系の短頸壺で外面と内面頸部に淡緑色の釉が薄くかかる。48・49は備前焼きの擂鉢で、48は備前Ⅳ B 期で15世紀後半、49は備前Ⅲ B 期で14世紀中頃に位置づけられる。

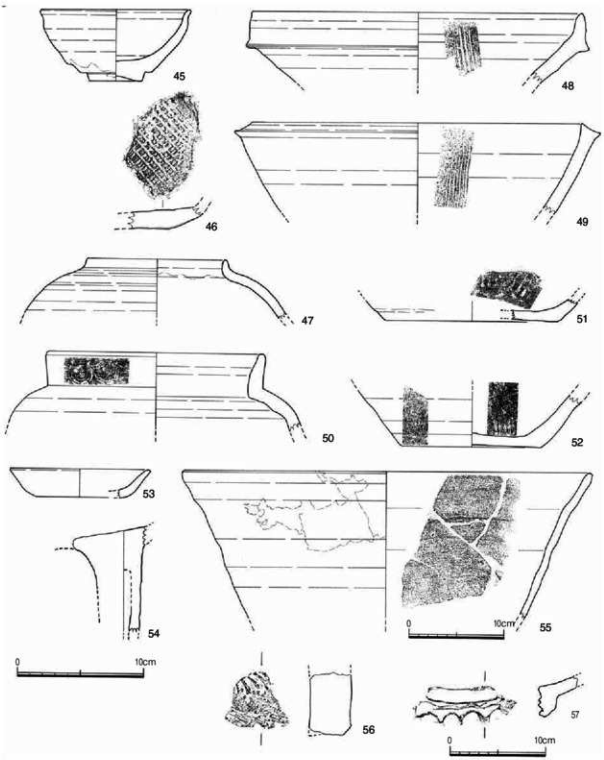


Fig.54　SG1046 出土遺物実測図３（56・57は1/4、他は1/3）

50は瓦質土器の壺で頸部外面に同心円文スタンプがある。羽釜の可能性がある。**51**・**52**は土師器擂鉢、**53**は土師器皿で16世紀代の遺物である。**54**・**55**は土師器鍋である。**56**は軒丸瓦。花弁文の瓦当文様を持つもので、軒平瓦57に伴う。**57**は押圧文系軒平瓦と呼ばれるもので、博多遺跡群、箱崎遺

SG1046

No	遺物名	遺物情報	法量(復元値)[残存値]
1	白磁 碗	口禿 白色精良胎 硬質 透明釉	高[5.3]
2	白磁 碗	外面削り痕/高台 白色精良胎 青みがかる透明釉 口唇部～内面無釉 外面無釉	—
3	白磁 碗 加工品	明褐灰色胎土 硬質 淡いオリーブがかる透明釉 高台打ち欠き	底基部(6.4) 高[1.8]
4	白磁 碗 加工品	綿辺打ち欠き 灰白色やや粗胎 灰色がかる透明釉	底(5.8) 高[2.2]
5	白磁 碗 加工品	綿辺打ち欠き 灰味ある白色精良胎 硬質 透明釉	底(6.8) 高[2]
6	白磁 碗 加工品	綿辺打ち欠き 明褐色やや粗胎 透明釉	外径8.8 底6.6 高1.8
7	白磁 碗 加工品	綿辺打ち欠き 見込蛇の目釉剥ぎ 明灰色良胎 硬質 やや黄味がかる透明釉	径6.2 底5.7 高1.3
8	白磁 碗	蛇の目釉剥ぎ 灰白色精良胎 硬質 やや緑がかる透明釉 重ね焼き痕	高[3]
9	白磁 碗	白色精良胎 硬質 青味ある透明釉 貫入	底(8.2) 高[1.5]
10	白磁 小碗	薄子碗 白色精良胎 硬質 青みがかる透明釉 艶やか	底3.6 高[1.7]
11	白磁 小碗	白色胎 透明釉 細かな貫入 削り痕/高台歪	底3.7 高[1.3]
12	白磁 皿	口禿 白色胎 灰味おびた水色釉	口(12.5) 高[3.1]
13	白磁 皿	灰色精良胎 硬質 青みがかる透明釉	口(8.8) 高[2.2]
14	白磁 皿	創花 白色胎 淡灰白色釉 艶やか 薄手	底3.9 高[0.9]
15	白磁 皿	高台抉り 白色良胎(夾雑物微含) 透明釉 貫入	口(10) 底(4) 高2.6
16	白磁 皿	高台4ヵ所抉り 淡褐白色良胎(微細夾雑物含) 透明釉 被熱による微細貫入 見込み目痕	口(9.3) 底4.4 高2.4
17	白磁 皿	白色精良胎 わずかに青みがかる透明釉 高台3ヵ所抉り 艶やか	底3.4 高[1.1]
18	青磁 碗	龍泉窯系 創花 やや粗胎 硬質 緑色透明釉 高台内外周まで釉かかる	底(6) 高[4.4]
19	青磁 碗	龍泉窯系 灰色精良胎 硬質 緑色透明釉	底6.5 高[2]
20	青磁 碗	龍泉窯系 印花 灰白色精良胎 硬質 明黄緑色透明釉 高台内八字痕	底6 高[3.2]
21	青磁 碗	龍泉窯系 優品 印花 白色胎 青みがかる明緑色釉厚くかかる 高台内釉の目釉剥ぎ	底(7.4) 高[2.6]
22	青磁 碗	龍泉窯系 印花 灰白色精良胎 硬質 緑色透明釉 粗い貫入 高台内八字痕	底6.4 高[2.7]
23	青磁 碗 加工品	綿辺打ち欠き 龍泉窯系 印花 灰白色精良胎 明緑色透明釉厚くかる 艶やか 粗い貫入	外径6.5 底5.9 高3
24	青磁 碗 加工品	綿辺打ち欠き 龍泉窯系 印花 灰色精良胎 緑がかる透明釉	外径7.2 底5.9 高1.8
25	青磁 碗	龍泉窯系 灰白色精良胎 暗オリーブ色透明釉厚	口(12.3) 高[3]
26	青磁 碗	龍泉窯系か 精良胎 見込み円形釉剥ぎ 被熱により釉乳白色変・貫胎部赤褐色変	底(5.5) 高[4]
27	青磁 碗	同安窯系 灰白色やや粗胎 褐色がかる緑色透明釉 艶やか 釉厚濃い部分は白色かすむ	底5 高[3]
28	青磁 皿	龍泉窯系 印花 見込・高台内円形描き取り 灰白色精良胎 硬質 濃黄緑色釉 貫入 高台内墨文字不明瞭 内外面八字痕	口11.8 底7 高3.8
29	青磁 皿	龍泉窯系 印花 見込・高台内円形描き取り 灰白色精良胎 硬質 濃緑色釉 貫入 高台内墨文字不明瞭 内外面八字痕	口11.9 底6.7 高3.7
30	青磁 皿	龍泉窯系 灰色精良胎 暗オリーブ色透明釉 大貫入 見込み円形描き取り	口(11) 底6.8 高3.2
31	青花 碗	淡緑白色やや粗胎 透明釉 貫入 全釉 畳付きはぎ取り 呉須くすんだ青色 高台一部は焼成前立 畳	底3.9 高[1.5]
32	陶器 壺	四耳壺 淡黄白色良胎 外面～内面口縁下に白化粧 黄褐色釉 被熱釉剥落	口(10) 高[6.3]
33	陶器 壺	白灰色精良胎 焼成良好 硬質 外面施釉の痕跡 被熱により釉剥落か	口(11) 受部(12) 高[4.7]
34	陶器 甕か	灰黄色粗胎 茶褐色釉 胴部拭き取り	—
35	陶器 鉢	磁灰窯系か 粗胎(砂粒・夾雑物多含) 外面明緑色 内面 褐褐色 被熱	—
36	陶器 鉢	粗胎(砂粒・夾雑物多含) 体部叩き 職灰褐色釉薄い	—
37	陶器 擂鉢	粗胎(粗石英粒多含) 硬質 無釉	口(48.4) 高[6.7]
38	朝鮮白磁 碗	褐色がかる灰白色胎 軟質 褐色がかる白色釉	底4.9 高[3.9]
39	朝鮮白磁 碗	灰白色良胎 透明釉 全釉 貫入	口(15) 底(5.5) 高6.8
40	朝鮮陶器 碗	丸碗 灰色胎(黒粒少含) 黄緑色釉	底(5.2) 高[4.5]
41	粉青 鉢	印花粉青 白土象嵌 灰色やや粗胎 硬質 焼成堅め良好	高[3.5]
42	粉青 皿	刷毛目粉青 職灰色良胎 乳白色化粧土 透明釉 底部内外面目痕	底(5.5) 高[1.5]
43	粉青 皿	刷毛目粉青 灰色やや粗胎 漏水色釉 白色釉 見込・畳付に目痕	口(11) 底(4.6) 高3.3
44	ベトナム青花 皿	白色胎 軟質 白化粧の青黒い呉須 透明釉 貫入 被熱	底(5.6) 高[1.8]
45	天目 碗	瀬戸か 鐵口 淡褐色粗胎 暗黄褐色釉 粘度高 下半に釉溜り	口12 底4 高5.7
46	瀬戸 卸皿	糸切り 淡褐色やや粗胎 緑がかった釉(灰釉か) 外面上半～内面にけけて施釉 卸目部分は露胎	高[1.8]
47	瀬戸 壺	短頸壺 灰色やや粗胎 外面深緑色釉(灰釉か) 内面無釉	口(11) 胴>21 高[4.7]
48	備前 擂鉢	綾等口縁 擂目5条 粗胎(石英粒含) 焼成良好 硬質 茶褐色	口(26.2) 縁帯(27) 高[5.5]
49	備前 擂鉢	外傾平縁 粗胎(夾雑物多含) 焼成良好 硬質 薄茶褐色	口(26) 外縁(29) 高[7.4]
50	瓦質 壺	口縁外面同心円文スタンプ 羽金の可能性 やや粗胎(微細石英粒・微細鉄分粒微含) 被熱により赤褐色変化	口(17.4) 頸基部(17) 高[6.2]
51	土師質 擂鉢	擂目4条 粗胎(石英粒少含) 表面明褐橙色 芯部黒色 被熱表面変化	底(14) 高[1.8]
52	土師質 擂鉢	被熱により明橙褐色に変色変化 良胎(石英粒若干含)	底(11) 高[4.2]
53	土師器 皿	外面被熱による肌荒れ 胎土やや粗	口(11.1)
54	土師質 鍋	粗胎(3mm以下砂粒含) 焼成良好	—
55	土師質 鍋	大型 良胎(石英粒・微細金雲母多含) 内外面煤付着	口(42.6) 高[15.7]
56	中国系瓦 軒丸	花弁文 瓦当残欠 粗胎(白色粒多含) 焼成良好 瓦当裏面端部指頭圧痕	—
57	中国系瓦 軒平	押圧波状文軒平瓦 瓦当残欠 良胎(夾雑物含まず) 焼成良好 器壁薄らか	—

(cm)

跡群、大宰府史跡、斜ヶ浦瓦窯などで出土している。中国南部に起源を持つとされており、12～13世紀に位置づけられるものである。瓦当は、三本の重弧文の、中央の弧線を箆で押して波打たせ、瓦当下端を指で押圧し、波状に作る。胎土は肌理細かく、薄手である。56・57共に本遺跡では1点のみ出土し、希有な例である。(池崎)

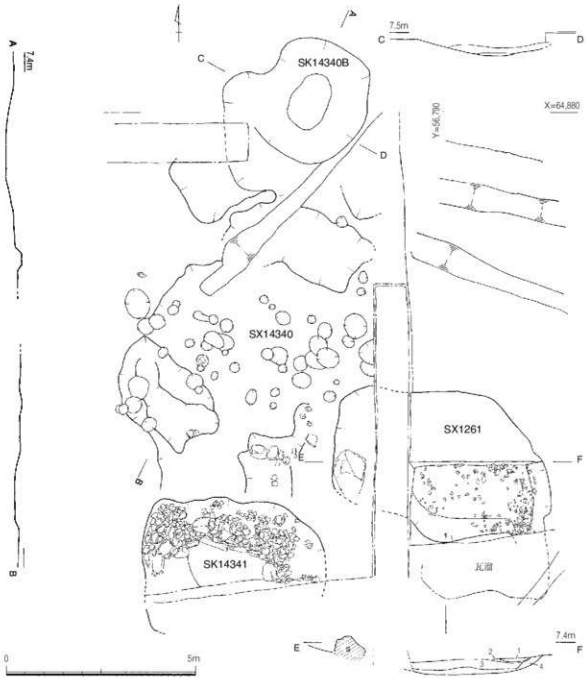
SK1235（第19次調査、i750グリッド） Fig.43、Fig.70

周辺の溝SD1222・1230からの水を集める水溜め遺構で一部に石積みが残る。この石積みを枡形遺構として取り扱っている。(p.77)

SX1261（第19次・第20次調査、i780-790グリッド） Fig.55

周辺溝から水が流れ込む池状水溜まりである。第19次調査において主要な部分が確認され、西に続く箇所は第20次調査で確認された。南側に一連と思われる瓦溜りを検出したが、近代遺構が縦横に入り組み不明瞭である。最下層に多量の土師器皿が廃棄されている。上面は頁岩風化粘土による一括埋立で、福岡城築城時に整地されたものであろう。東西5.8m、南北5.8m、深さ55cmを測る。（池崎）

SX1261出土遺物 Fig.56、(『鴻臚館跡13』Fig.18) **1**～**23**は土師器皿・坏で、**24**・**25**は口禿白磁皿、**26**は白磁碗である。上記のほかに、建窯天目碗・龍泉窯系青磁碗・褐釉陶器壺など中世陶磁器破片と、古代の土師器、古墳時代須恵器などが出土した。（池崎）



1. 赤褐色粘土　2. 黒灰色シルト　3. 赤褐色粘土（下面に瓦破片を多く含む、一括埋め立て）
4. 暗灰色シルト質粘土（木炭粒・土師皿完形品を多く含む）

Fig.55　池 SX1261・SX14340・SX14340B・SK14341 実測図（1/100）

SX14340・14340 B（第20次調査、j-i790グリッド） Fig.55

第20次調査区の東辺付近で検出した不整形の落ち込みである。砂礫混じりの粘質土を埋土とする浅い皿状のくぼみで、平面的にはくびれを挟んで南側のSX14340と、北側のSX14340 Bとに分かれる。両者は底面の形状から別の遺構と思われるが、間に鞍部状の低い高まりを設けた一連の遺構と考えることも可能である。平面的形状、浅い皿状を呈し明瞭な壁を持たない点、埋土に砂礫が混入していることなどから、池の可能性を想定したい。出土遺物から15世紀代に属するものと思われる。（大庭）

SX14340出土遺物 Fig.56、（『鴻臚館跡15』Fig.8） **27・28**は土師器の皿である。底部は回転糸切りである。**29・30**は龍泉窯系青磁碗である。30の見込みには印花文が見られる。**31・32**は、白磁である。31は体部を面取りした八角杯で、高台はアーチ状に削り込む。32の外底部には「王平」の墨書が見られる。**33～35**は朝鮮王朝陶磁器である。33・34は粉青沙器の小碗である。35は舟徳利で、緑褐釉の粗雑な釉が薄く施されている。上記のほかに古代遺物が出土した。（大庭）

SX14340 B出土遺物 Fig.56、（『鴻臚館跡15』Fig.9）**36**は龍泉窯系青磁碗で、沈線で菊花様の花弁を刻む。**37**は陶器のすり鉢である。外面に灰褐色の不透明釉が薄くかかる。底部外面には「十」字ヘラ記号がある。上記のほかに土師器鍋・瓦質土器擂鉢が出土し、36・37とともに『鴻臚館跡15』で報告している。（大庭）

SX1261

No.	遺物名	遺物情報	法量(復元値)[残存値]
1～23	土師器 皿・坏	糸切り	
24	白磁 皿	口禿 灰白色精良釉 灰白色釉 口唇部黄茶色 焼成良好	口(9.9) 底(7) 高2.2
25	白磁 皿	口禿 灰白色精良釉(黄細黒粒含) 青灰色～淡黄灰色 焼成良好 口縁内面露胎部に煤付着	口9.4 底5.6 高2.5
26	白磁 碗	見込め2の目釉剥ぎ 白色精良釉(微細黒粒含) 焼成良好 黄灰色帯びた白色釉	底6.8 高[1.7]

SX14340

27 28	土師器 皿	糸切り	
29	青磁 碗	龍泉窯系 赤味あるクリーム色良釉 焼成良好 淡緑色釉 貫入	口(14.8) 底(6.3) 高(7.6)
30	青磁 碗	龍泉窯系 印花 明灰色良釉(黒色粒含) 焼成良好 緑色釉 貫入	底(6) 高[3.5]
31	白磁 坏	八角坏 体部面取 高台アーチ状明込 乳白色良釉(黒粒や含) 焼成良好 黄味がかる白色釉 細かい貫入	口(7.8) 底(3.4) 高2.9
32	白磁 碗	高台内墨書「王平」見込み蛇の目釉剥ぎ 良釉(黒粒含) 焼成良好 黄味がかる白色釉	底5 高[1.8]
33	粉青 小碗	印花粉青 白色土象嵌 良釉(黒色粒含) 青味がかる透明釉 焼成良好	口(11) 高[3.6]
34	粉青 小碗	印花粉青 白色土象嵌 灰色良釉(黒色・白色粒含) 焼成良好 淡緑色釉	口(11.4) 底(4.6) 高7.2
35	朝鮮陶器 瓶	舟徳利 褐赤茶色良釉(石英若干含) 黄味ある灰色釉 タタキ目ナデ消し 被熱	胴(16) 高(15.5)

SX14340B

36	青磁 碗	龍泉窯系 鞏刻菊花弁文 灰色良釉 淡緑色釉(一部白変)	—
37	陶器 擂鉢	10条単位の櫛状工具で内面充填 灰色良釉(黒粒多含) 硬質 外面施釉痕跡 釉剥落 外底面十字ヘラ記号 口縁に目痕多数	口33 底11.5 高16

(cm)

SK14341（第20次調査、j-i790グリッド） Fig.55、Fig.57

側壁に礫を積み上げた、石積み土坑である。調査の都合上、北側二分の一しか調査していない。長辺3.5m、推定短辺1.5m で、深さ1.1m前後を測る。大小の石を用い、雑然と積み上げている。遺構西側では矢穴を有する石材が見られる。出土した土師器皿、瓦質こね鉢から、15世紀代の遺構と思われる。（大庭）

SK14341出土遺物 Fig.58 1は白磁の皿で、古代末～中世の過渡期のものである。**2**は焼塩壺。**3**は土師器坏で糸切り底、**4**は土師質の鍋である。**5**は土師質の擂鉢か。**6**は台石で、叩打時の台として、また砥石としても使用されている。**7**は砥石で叩打痕がある。上記のほか、陶器・瓦質土器・底部糸切り土師器皿など中世遺物の破片が出土した。

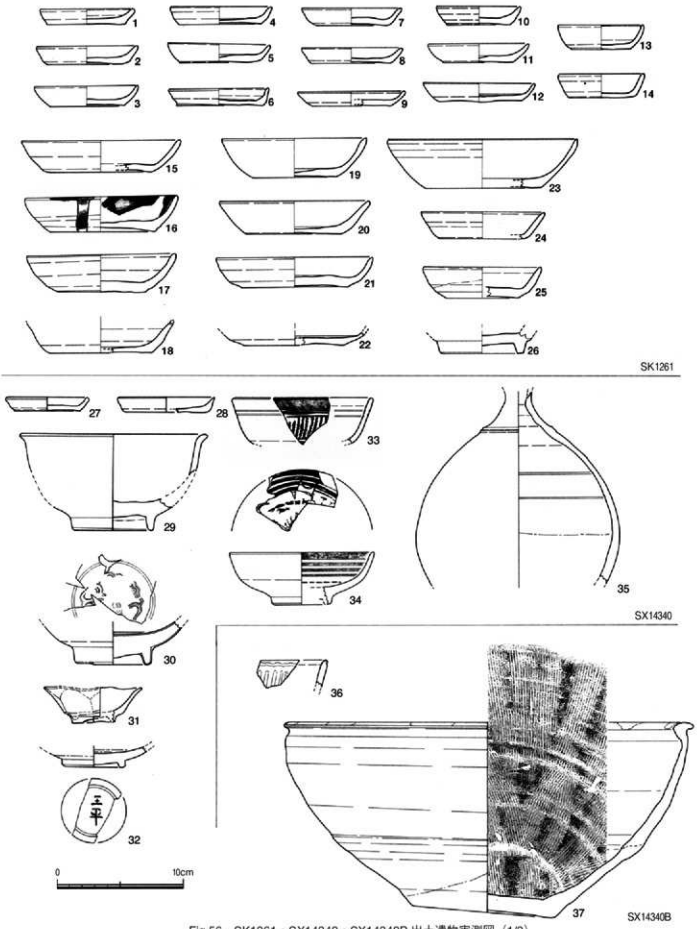
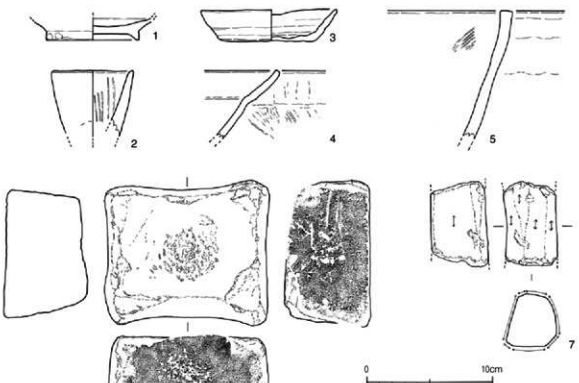


Fig.56　SK1261・SX14340・SX14340B 出土遺物実測図（1/3）

Fig.57　池 SK14341 写真（東より）



SK14341

No.	遺物名	遺物情報	法量(復元値) [残存値]
1	白磁 皿	白色 精良胎 見込みに細かい貫入	底7.4　高[1.7]
2	焼塩壺 身	精良胎(石英大粒含)	口[6.5]　高[5]
3	土師器 坏	糸切り 精良胎(鉄分・金雲母含) 焼成良好	口10.9　高2.2～2.6
4	土師質 鍋	外面煤付着 精良胎(微細石英粒・金雲母含) 焼成良好	—
5	土師質 擂鉢	石英粒・金雲母含む 軟質	—
6	台石	細粒硬質の岩質 上面以外すべてに砥面 全面叩打痕 被熱	13.0×11.4　厚6.9
7	砥石	砂岩 周囲全面に砥面 上下端折損のち叩打具として使用	長[6.7]　厚4.1

(cm)

Fig.58　SK14341 出土遺物実測図（1/3）

SG23206・SD23212（第29次調査、j730グリッド） Fig.59、（参考Fig.18）

国土座標Y=-56,748あたりから斜面SX23200にかけて東にくだる緩斜面上に営まれた水溜まり状の遺構である。東側に土手を築いて水を溜め、細い導水路SD23212で斜面下に水を流す。土手は当初築かれたものと、底に泥が溜まった後に土手の嵩上げを行ったものの、２回が確認できる。土手上には各時期のピットや、最終面では石が確認された。ピットは２度とも土手頂部よりもやや外側に下る箇所で確認できる。嵩上げの後も当初の位置を意識した配置であり、位置的にも柵状の構造物を想定できる。石は上層に帰属し原位置を留めない可能性もあるが、土手頂部のピットよりも水溜め側で確認されている点を考慮して、当初は配石か列石の一部であった可能性がある。水溜め箇所土層では自然堆積層と人為的な掘り込みが見られ、浚渫の痕跡と思われる。**SG23206**は南北6.5m、東西5.5m、深さ90cm、西側上端標高6.2m、底面標高5.3m、土手幅1.2m、最終土手の池底下端からの比高30cm、最終土手頂部の標高5.8mである。水溜め箇所の南に付設される導水路**SD23212**は長さ２m、幅30cm、深さ20cm、底面標高は5.3m～5.4m、勾配５%である。この導水路からは青磁碗が出土した。遺構は明確に管理されたことが看取される。時期はSD23212出土の青磁碗から12世紀後半以降を考える。

SG23206・SD23212出土遺物 Fig.59～60 １・２はSD23212から出土した青磁碗である。**1**は同安窯系、**2**は龍泉窯系、この遺構を表す時期の遺物である。３～６はSG23206から出土した。**3**は龍泉窯系青磁碗で10層出土、**4**は大型の陶器の甕で３層出土、**5**は４層出土、土師質の香炉で底部外面に脚の剥離痕がある。**6**は土師質焙烙で、土層観察用ベルトの下層から出土した。

７～13はSG23206上層部分、平坦面SX23201にあたる箇所からの出土である。**7**・**8**は龍泉窯系の青磁碗、**9**は白磁碗、**10**は陶器甕、**11**～**13**は朝鮮半島産陶器の皿と碗である。

溝SD23204（SD23212関連） SG23206と直接関連しないが、導水路SD23212上位の溝である。平面位置はSD23212とほぼ同一であるが、垂直位置では20cm上位にあり、SD23212よりもしっかりとした深さがある。SD23212の直上にあたり、出土遺物の混入が考えられるため、参考ながら記載するものである。検出長４m、幅１m、深さ50cm、底面標高5.6～5.7mで、平坦面SX23201上の遺構と思われる。

SG23206・SD23212

No.	遺物名	遺物情報	法量(復元値) [残存値]
1	青磁 碗	同安窯系 灰色胎 濃オリーブ色透明釉 貫入 東側排水溝出土	底5 高[5.5]
2	青磁 碗	龍泉窯系 明灰白色精良胎 オリーブ色透明釉 貫入 東側排水溝出土	底5.6 高[3]
3	青磁 碗	龍泉窯系 明灰色精良胎 緑色強い釉(一部白濁) 10層出土	口(13) 高[5]
4	陶器 甕	大甕 鉄分多い粗胎 内面化粧土 3層出土(築城盛土ほかと層が同一個体破片出土)	—
5	土師質 香炉	三脚付か 方面・スタンプ連続文 精良胎(大粒石英粒含) 淡橙色 4層出土	底6 高[5.2]
6	土師質 焙烙	または鍋 胎土に石英粒・金雲母多含 外底に煤 内底黒変 下層出土	口(19.2) 高4.8
7	青磁 碗	龍泉窯系 白色精良胎 薄青緑がかった釉	口(16.5) 高[3.5]
8	青磁 碗	龍泉窯系 灰色胎 青緑透明釉 粗い貫入	底6.2 高[4]
9	白磁 碗	灰白色精良胎 透明釉 粗い貫入 無やか	底(6.4) 高[3.2]
10	陶器 甕	無釉 明灰色胎 釉茶灰色	頸基部(28) 高[7.5]
11	朝鮮陶器 皿	黄土色粗胎(石英粒含) わずかに黄味ある灰白色不透明釉 底部内外に目痕 外面中位無釉箇所	口(1.5) 底(4) 高3.1
12	朝鮮陶器 碗	黄土色胎(黄色粒・赤色粒含) 乳白色不透明釉 見込み砂目5 底面に砂多量 畳付き釉後ヘラ削り	底5.5 高[3.5]
13	朝鮮陶器 碗	明白橙色粗胎 白濁釉	口(16.3) 高[4.5]

(cm)

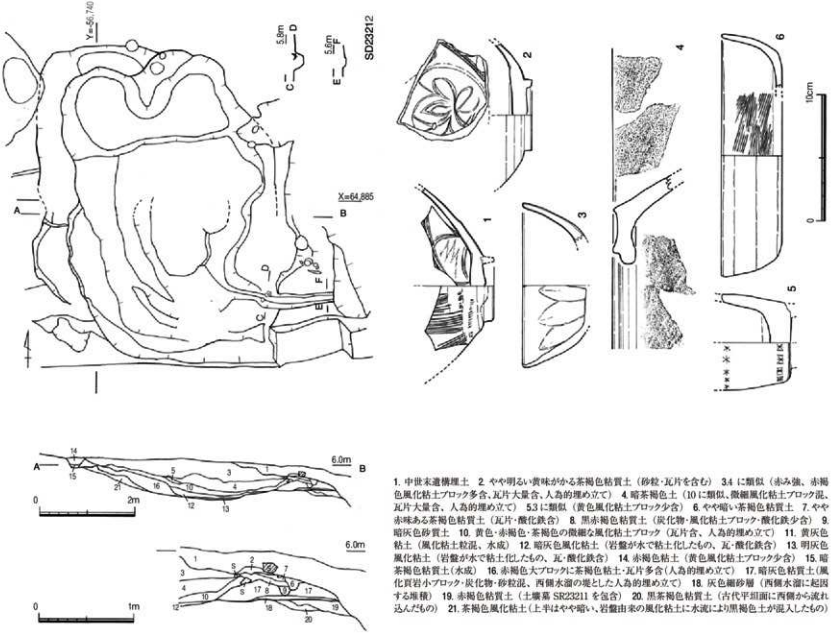
SG25047（第31次調査、n-m840グリッド） Fig.62

トレンチ１調査区の北面する緩やかな斜面の落ち際にあり、福岡城筑城盛土の直下で検出した池状遺構である。C-D断面に表す土層は埋めた経緯が細かく分層されているが、全

SD23204

No.	遺物名	遺物情報	法量(復元値) [残存値]
1	白磁 碗	灰色胎 やや暗いぐすんだオリーブ色釉	口(16.2) 高[3]
2	白磁 碗	灰色粗胎 薄いオリーブ味ある透明釉 粗い貫入	底(5.9) 高[3.8]
3	白磁 碗	灰白色粗胎 僅かに黄味ある透明釉 粗い貫入	底6.6 高[2.1]
4	肥前系 皿	灰白色粗胎 青味ある釉 被熱清腰 見込み目痕	口13 底5.6 高3.5
5	車輪系か 擂鉢	瓦質 粗胎(石英粒多含) 徳成不良 風化顕著	口(28.8) 高[4]

(cm)



1. 中世末遺構埋土　2. やや明るい黄味がかる茶褐色粘質土（砂粒・瓦片を含む）　3.4. に類似（赤み強、赤褐色風化粘土ブロック多含、瓦片大量含、人為的埋め立て）　4. 暗茶褐色土（10.に類似、微細風化粘土ブロック混、瓦片大量含、人為的埋め立て）　5.3. に類似（黄色風化粘土ブロック少含）　6. やや暗い茶褐色粘質土　7. やや赤味ある茶褐色粘質土（瓦片・酸化鉄含）　8. 黒赤褐色粘質土（炭化物・風化粘土ブロック・酸化鉄少含）　9. 暗灰色砂質土　10. 黄色・赤褐色・茶褐色の微細な風化粘土ブロック（瓦片含、人為的埋め立て）　11. 黄灰色粘土（風化粘土粒混、水成）　12. 暗灰色風化粘土（岩盤が水で粘土化したもの、瓦・酸化鉄含）　13. 明灰色風化粘土（岩盤が水で粘土化したもの、瓦・酸化鉄含）　14. 赤褐色粘土（黄色風化粘土ブロック少含）　15. 暗茶褐色粘質土（水成）　16. 赤褐色大ブロックに茶褐色粘土・瓦片多含（人為的埋め立て）　17. 暗灰色粘質土（風化質岩小ブロック・炭化物・砂粒混、西側水溜の堆とした人為的埋め立て）　18. 灰色細砂層（西側水溜に起因する堆積）　19. 赤褐色粘質土（土壌層 SR23211 を包含）　20. 黒茶褐色粘質土（古代平坦面に西側から流れ込んだもの）　21. 茶褐色風化粘土（上半はやや暗い、岩盤由来の風化粘土に水流により黒褐色土が混入したもの）

Fig.59　池 SG23206 実測図（1/80、土層断面拡大図は 1/40）、SG23206 出土遺物実測図 1（1/3）

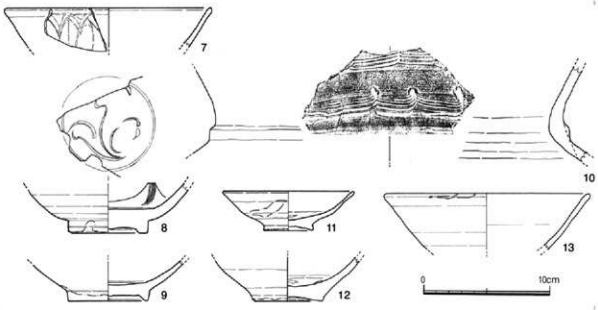


Fig.60　SG23206 出土遺物実測図 2（1/3）

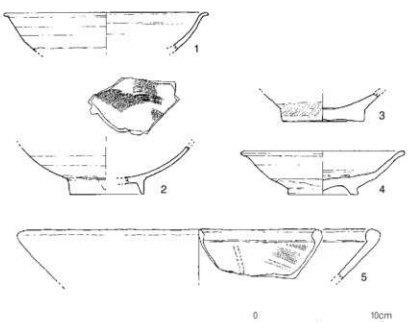
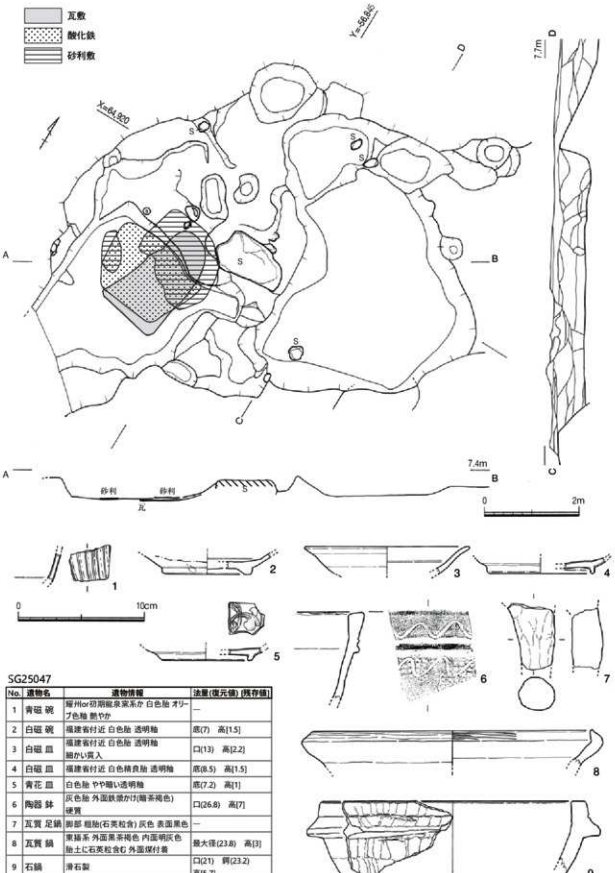


Fig.61　SD23212 関連 SD23204 出土遺物実測図（1/3）

て築城時のものであり、築城直前まで池が存続していたことが分かる。遺構は大きく二つの水溜めと中間にある中島状の高まりで構成され、中央には大ぶりの石が配される。水溜め箇所の底面は複雑な起伏を呈し、南西側の水溜め底面では瓦敷きの範囲、砂利敷きの範囲、酸化鉄の範囲が重なり合っている。

SG25047出土遺物　Fig.62　1は艶やかな青磁碗破片で、耀州または初期龍泉のものか。2～4は白磁の碗と皿、5は明代の青花皿である。6は陶器の鉢、7・8は瓦質の鍋、9は石鍋である。いずれも遺構の時期を表すものではない。上記のほか、肥前系染付碗・皿、古代遺物が出土した。



SG25047

No.	遺物名	遺物情報	法量(復元値) (残存値)
1	青磁 碗	輝州or初期龍泉窯系か 白色胎 オリーブ色釉 艶やか	—
2	白磁 碗	福建省付近 白色胎 透明釉	底(7) 高[1.5]
3	白磁 皿	福建省付近 白色胎 透明釉 釉かい貫入	口(13) 高[2.2]
4	白磁 皿	福建省付近 白色精良胎 透明釉	底(8.5) 高[1.5]
5	青花 皿	白色胎 やや暗い透明釉	底(7.2) 高[1]
6	陶器 鉢	灰色胎 外面鉄錆かけ(暗茶褐色) 焼質	口(26.8) 高[7]
7	瓦質 足鍋	脚部 粗胎(石英粒含) 灰色 表面黒色	—
8	瓦質 鍋	東播系 外面黒茶褐色 内面明灰色 胎土に石英粒含む 外面煤付着	最大径(23.8) 高[3]
9	石鍋	滑石製	口(21) 鍔(23.2) 高[5.7]

Fig.62 池 SG25047 実測図（1/80）、出土遺物実測図（1/3）

(6) 井戸

SE1102（第18次調査、j830-840グリッド） Fig.63

南北４m、東西3.5mの大規模な掘方を持つ井戸で、現地表面から井戸底まで３m以上の深さを持つ。深い掘方を掘るために、北東壁側に階段を造りながら掘り下げている。井筒は桶組で、径90cm、板材と竹のタガの痕跡が残る。掘方は井側の桶を重ねながら埋め戻されている。埋め土は透水性を高めるように、大振りの風化岩礫と細かい礫を交互に埋めている。通例江戸時代の井側は井戸瓦組が多いことから、この井戸は中世の井戸を江戸時代に埋めた可能性もある。（池崎）

SE1102出土遺物 Fig.63 **1**は「○○門」スタンプの江戸時代瓦で井筒内から、**2**は焼塩壺で井戸周りから出土した。口径６cm、胴部径6.2cm、器高7.6cmを測る。石英粒・黒色粒を多く含む粗胎で、被熱する。上記のほかに同安窯系青磁碗破片と、鬼瓦破片など古代瓦と藤巴紋などの近世瓦が出土した。

SE1243（第19次調査、g780グリッド） Fig.7

径70cm程の円形の深い穴で井戸と思われるが、井筒等の構造物は未確認である。（池崎）

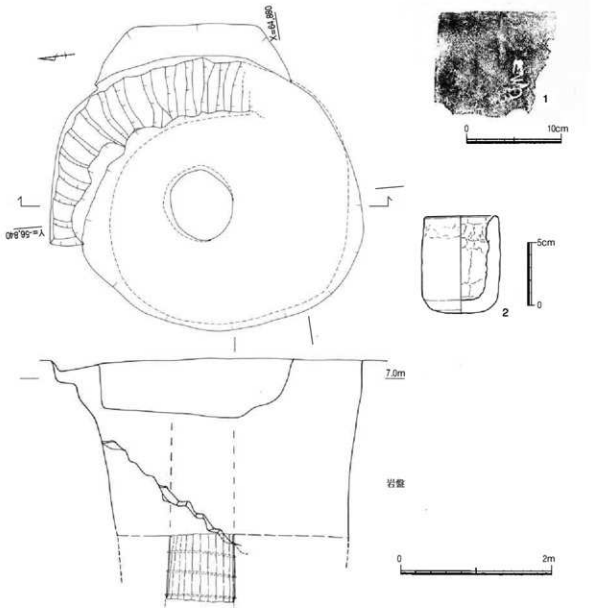


Fig.63 井戸 SE1102 実測図（1/50）、出土遺物実測図（1は 1/4、2は 1/3）

(7) 生産遺構

中世期の梵鐘鋳造遺構SK29と溶解炉SK139について取り扱う。なお、古代の生産遺構として、南館台地の谷側において推定10世紀前半頃の梵鐘鋳造遺構SK15027が確認された。現時点で連続する生産関連の遺構は未検出である。また、SK15027付近にある地下式土坑SK15013から武人らしき人形の鋳型（Fig.75）が出土しているが、時期は不明である。

梵鐘鋳造遺構SK29（第4次調査、B850グリッド） Fig.64

第４次調査区西端部に検出した梵鐘鋳造遺構である。鋳造遺構は古代遺構SB31の基壇、雨落ち溝との切り合い関係があり、本遺構がSB31を切っているので後出するのは明らかである。

鋳造遺構は一辺2.05mの方形プランで、深さ50cmの土坑を掘ってつくられたものである。土坑壁は垂直に近い。埋土中に多量の木炭、鋳型片、炉壁片、瓦類が投棄されていた。特に底面近くは木炭が敷きつめられたように多量に存在した。また埋土途中においても木炭層だけで形成されている部分も

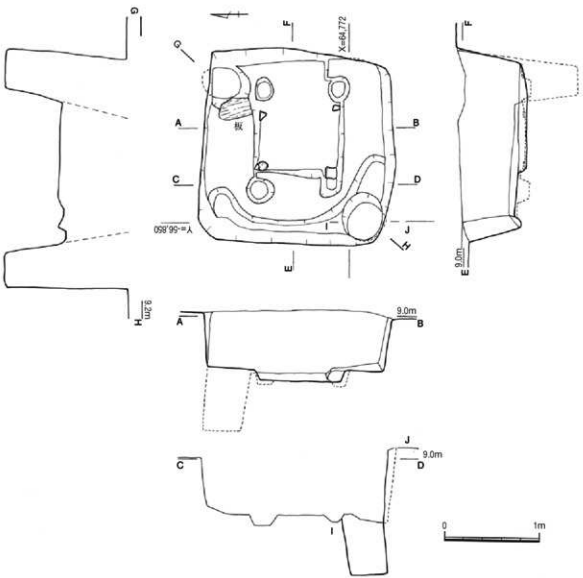


Fig.64　梵鐘鋳造遺構 SK29 実測図（1/40）

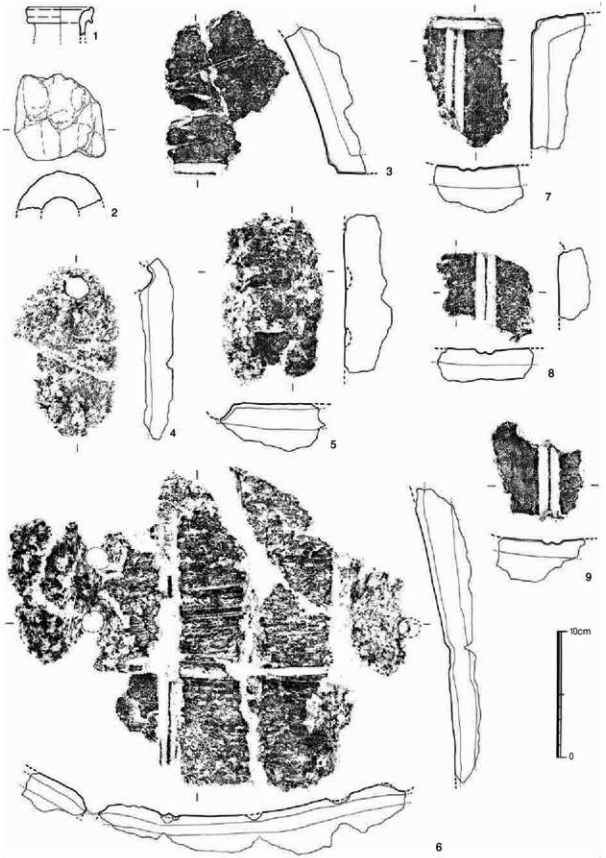


Fig.65　SK29 出土遺物実測図 1（1/3）

ある。鋳型は原位置にあるものはなく、すべてが破壊投棄された状態であった。

土坑の底面の構造は、北東と南西の対角線上のコーナーに径25cm、深さ約50cmの柱穴がある。この柱穴に柱をたてた場合、土坑の中心で組み合う傾斜で掘り込まれている。また西壁にそって幅10～30cm、深さ３cm前後の浅い溝が半円状にまわっている。中央部には一辺40cmの方形、深さ２～３cmの浅い掘り込みがあり、その四隅には径20～25cm、深さ10cm前後の柱穴が掘られている。柱穴の内側にはそれぞれ瓦片が１～２個配されている。他遺跡の鋳造遺構から類推すると、中央部の方形の掘り込みは掛木の状態を示しているものと考えられる。対角にあるやや大きな柱穴は滑車をとりつけた柱をたてたものと思われる。（山崎純男）

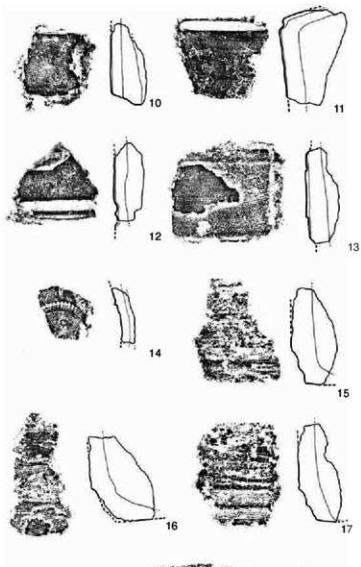


Fig.66　SK29 出土遺物実測図２（1/3）

SK29

No.	遺物名	遺物情報	法量（復元値）
1	朝鮮陶器 壺	無釉 胎土精良 淡小豆色 焼成良好	口(5.4)
2	土製 鞴羽口	外面板状叩き痕 胎土粗(石英粒多) 被熱変色(灰～赤褐色)	外径(7) 芯部径(3)
3	梵鐘鋳型（上部）	1層目: 真土　2層目: 赤褐色（砂粒含）3層目: 暗褐色（白色粗砂含・粘痕多）	
4	梵鐘鋳型（乳の間）	1層目: 真土（表面黒変）2層目: 赤褐色 3層目: 暗褐色（白色粗砂多含・粘痕多） 天地不明	
5	梵鐘鋳型（乳の間）	1層目: 真土薄く残る　2層目: 赤褐色（白色砂粒多含）3層目: 暗褐色（白色粗砂多含・粘痕多） 4層目: 褐色　天地不明	
6	梵鐘鋳型（乳の間）	1層目 一部に真土残る（図示なし）2層目:赤褐色　3層目: 黒褐色 4層目: 褐色	径 (55~67)
7	梵鐘鋳型（縦帯）	1層目: 真土（表面黒変）2層目: 赤褐色（赤色粗砂多含）3層目: 暗褐色（大粒砂多含・粘痕多） 天地不明	
8	梵鐘鋳型（縦帯）	1層目: 真土薄く残る（図示なし）2層目:赤褐色（細砂粒含）3層目: 黒褐色（白色粗砂含・粘痕多） 天地不明	
9	梵鐘鋳型（縦帯）	1層目: 真土 2層目:赤褐色 3層目: 褐色　天地不明	
10	梵鐘鋳型	1層目: 真土薄く残る（表面黒変）2層目: 赤褐色（白色砂粒多含・粘痕多）3層目: 黒褐色　4層目: 褐色　天地不明	
11	梵鐘鋳型	1層目: 真土（表面やや黒変）2層目: 赤褐色（白色粗砂多含）3層目: 暗褐色（白色粗砂多含・粘痕多） 天地不明	
12	梵鐘鋳型	1層目: 真土（白褐色胎・表面黒変）2層目: 赤褐色　3層目: 黒褐色（白色粗砂多含・粘痕多）　天地不明	
13	梵鐘鋳型	1層目: 真土（表面黒変）2層目: 赤褐色（白色粗砂多含）3層目: 暗褐色（白色粗砂多含）上下に区画線　天地不明	帯幅6.5
14	梵鐘鋳型（撞座）	1層目: 真土（淡黄白色精良胎）2層目: 暗茶褐色（白色粗砂多含）	中房径 (5～6)
15	梵鐘鋳型（駒の爪）	1層目: 赤褐色粗胎（白色大粒砂多含）2層目: 暗褐色（粗砂多含・粘痕多）	駒の爪高 2.5
16	梵鐘鋳型（駒の爪）	1層目: 赤褐色　2層目: 褐色　摩滅顕著	駒の爪高 (2.7)
17	梵鐘鋳型（駒の爪）	1層目: 赤褐色（大粒砂多含）2層目: 黒褐色（白色粗砂含・粘痕多）	駒の爪高 2.5
18	梵鐘鋳型（駒の爪）	1層目: 赤褐色（白色砂粒多含・粘痕多）2層目: 黒褐色（白色砂粒多含）3層目: 褐色（砂粒含）	駒の爪高 2.5

(cm)

SK29は14世紀以降の溶解炉SK139と位置的に近く関連遺構の可能性ありとされているが、直接時期を表す材料は現時点では未検出である。

SK29出土遺物　Fig.65～66　炉壁片、鋳型片が圧倒的に多く、若干の瓦類、青磁器、白磁器などが伴う。**1**は陶器瓶、新羅陶器か。**2**は輪の羽口、**3～18**は梵鐘の鋳型である。鋳型は中子と外型の両者がみられ、接合復元すればほぼ全形を知りうる可能性がある。鋳型は籾殻を入れた粘土を使用してつくられている。外型の文様は残り悪く２本単位の突線部分、乳の部分が判別できる。（山崎純男）
上記のほかに木炭、古代瓦、近世の藤巴文瓦が出土している。

溶解炉SK139（第4次・第11次調査、B830-840グリッド）　Fig.67、（『鴻臚館跡６』PL.３）

溶解炉の炉床部分SK139を検出した。炉床は、平面径が長径2.3m、短径1.3mを測る楕円形で、舟底状土坑の東半部に人頭大の岩塊を敷き並べ、その上に瓦と粘土とを相互に馬蹄形状に積み重ねて炉壁としている。炉壁は、幅10cm程に割った平瓦を使用し、約30cmの高さが残存する。岩塊は赤褐色を呈し、上には木炭、焼土が堆積していた。近くの土坑からは、羽口が出土している。また、第４次調査で検出した鋳造遺構SK29は約８ｍ西側に位置しており、この周辺が中世後期においては梵鐘鋳造関係の工房があったことが想定される。

年代は、14世紀代の口禿の白磁碗や土師器皿が投棄されていた土坑SK133を壊して築造され、江戸期の柵列に壊されている点からみて、室町時代後期～江戸時代初期の時期に比定できる。（瀧本・田中）

遺構は、鴻臚館跡展示館内で保存し、完掘調査を行っていないので、遺物は調査時に確認したのみである。

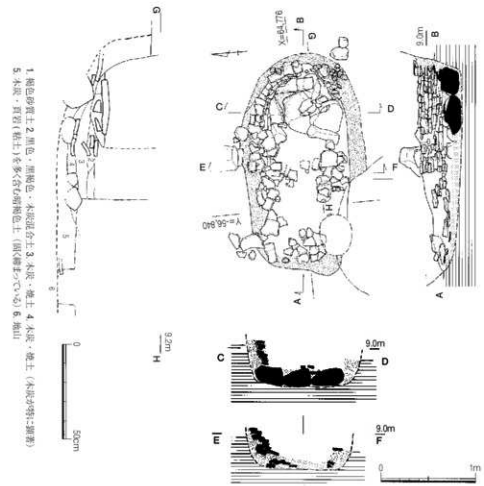


Fig.67　溶解炉 SK139 実測図（G-H断面図は 1/20、他は 1/40）

(8) 枡形遺構

南館台地・北館台地の東側落ち際で3基が確認された。南館台地上の2基は板組みを残し、水溜めを想定している。北館台地上の1基に板材はなく、北辺と西辺に石積みが確認された。

南館台地上のSK361・SK366は木質の残存状況が非常に良く、肥前陶器の出土があるため近世遺構の可能性を考えたが、類似する北館台地上のSK1235内石積みの位置が城内道路の真下にあたり、中世建物の雨落ち溝SD1222と直結する可能性が高いので、少なくとも城内道路が整備される前に機能したものとして、中世遺構で取り扱うこととした。SK361・SK366は、なお近世の溜枡である可能性がある。

SK361（第9次調査、E750グリッド） Fig.68、(『鴻臚館跡4』図版8)

第9次調査区東端部で検出した枡形遺構で、方形に組まれた板材が残っている。SK366と酷似する。板材は上下で組み合わせ、北側板中央には幅33cm、高さ32cmで方形に刳られた穴がある。樋がかけられたものか。板材外側上面は板石を配し平坦にしている。底面には板石を敷き詰める。掘方上端は周辺地形の標高と等しく7.9m、枡の内法は150cm四方、枡の深さは底面板石までで50cm、底面の板石上面の標高は7.0mである。

SK361出土遺物 Fig.68 **1**は明代の青花皿、**2**は朝鮮陶器または初期肥前陶器の皿である。上記のほかに、中世の白磁破片、古代陶磁器、肥前陶磁器や土製の型造り人形などの近世遺物が出土した。

SK366（第9次調査、A-a750グリッド） Fig.69

第9次調査区東端部で検出した枡形遺構で、遺構の北側と東側は調査区外である。方形に組まれた板材が残り、板材外側上面は板石を配し平坦にし、底面には板石を敷き詰める。規格・仕様などSK361と同様であり、同時期に存在した関連遺構と思われる。掘方上端は南側で8.1m、枡の内法は計測可能な南北線のみで150cm、枡の深さは底面板石までで60cm強、底面の板石上面の標高は7.0m強である。

SK366出土遺物 Fig.69 **1**は焼塩壺、**2**は明代青花合子の身で、内面に仕切りがある。**3**は備前焼きの擂鉢である。上記のほかに白磁皿を縁辺打ち欠いた加工品など中世遺物の破片と、古代遺物、近世の肥前系陶磁器が出土した。

SK361

No.	遺物名	遺物情報	法量(復元値)(残存値)
1	青花 皿	彰州窯 黄白色粗胎 上半と見込みに白化粧 上半のみ淡灰白色半透明釉	口10.7 底5.7 高2.5
2	朝鮮陶器か 皿	肥前の可能性 淡灰褐色粗胎 淡水色透明釉（細かな褐色斑多）見込に目痕7ヒビ割れ 貫入	口(11.6) 底(4.7) 高2.9

SK366

1	焼塩壺	淡橙黄色粗胎(白色粗砂多含) 被熱	口(5.4) 底(4.8) 高8.2
2	青花 合子身	内面仕切りあり 白色精良胎 水色帯びる透明釉	—
3	備前 擂鉢	淡灰色良胎(白色・黒色粒多含) 表面赤色帯びる	口(17.6) 高[7]

(cm)

SK1235内石積み（第19次調査、i750グリッド） Fig.70

SK1235は周辺の溝SD1222・1230（未掘）からの水を集める水溜め遺構である。一部に石積みが残るが、遺存状況は不良である。（池崎）

石積みが台地落ち際にある点、方形と思われる点などSK361・366と類似する。SK1235の石積みはほぼ1段のみ残り、底面に石敷はない。残存長・幅はともに1.2m、底面標高は7.1mである。

遺物は水溜め遺構SK1235として取り上げている。全て破片で、同安窯系青磁小碗・白磁・陶器・朝鮮陶器・備前焼き擂鉢・瓦質擂鉢・土師質擂鉢など中世遺物、古代遺物が出土した。

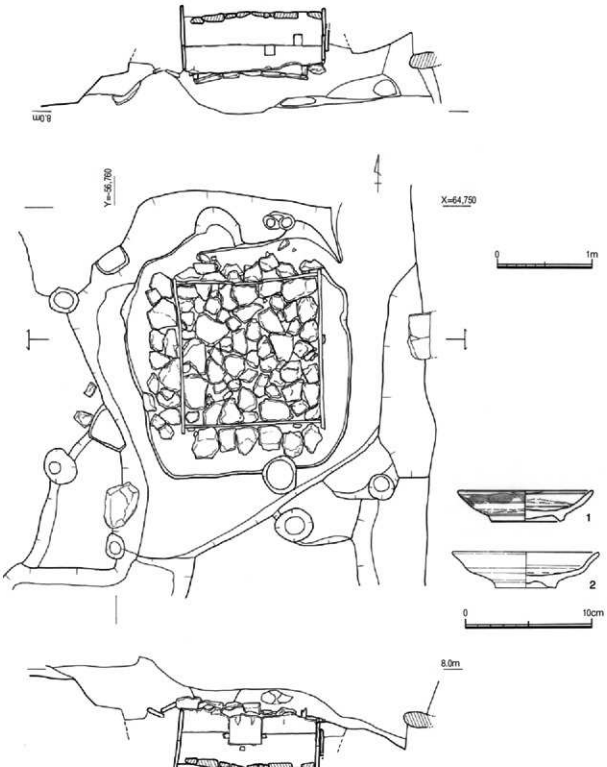


Fig.68　枡形遺構 SK361 実測図（1/40）、出土遺物実測図（1/3）

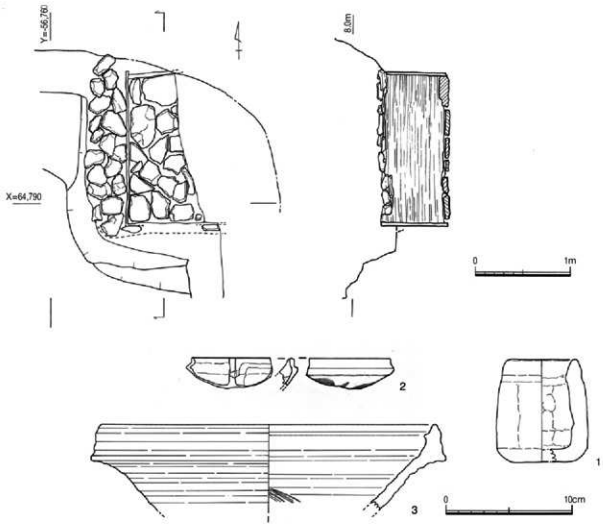


Fig.69　枡形遺構 SK366 実測図（1/40）、出土遺物実測図（1/3）

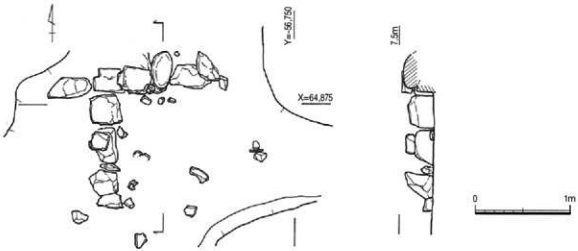


Fig.70　土坑 SK1235内枡形石積み 実測図（1/40）

(9) 地下式土坑

南館台地・北館台地の、主に落ち際で7基が確認された。本遺跡では古第三紀層の岩盤に掘り込まれている。時期を確定する遺物の出土はほとんどない。

地下式土坑は、構造上、比較的岩盤の強い場所で掘り込まれることが多く、樋井川A遺跡（Fig.2-18）の調査報告で整理されているとおり、市域では諸岡遺跡、板付遺跡、那珂遺跡などAso-4火砕流によって形成された台地に分布し（市報682集）、その後も調査例は増えている。

地下式土坑の性格については、墓説、宗教関連施設など見解が多岐にわたるが、樋井川A遺跡では、竪坑が全て開口であったこと、同一遺跡地内の墓で出土するような副葬品がないこと、のちに寺院となったにも拘わらずゴミの投棄穴として再利用されたことなどにより、少なくとも樋井川A遺跡では墓ではなかったものとし、時期は15～16世紀としている。

SK28（第4次調査、B840グリッド） Fig.71

調査区西側、古代遺構SB31の基壇内に検出した地下式土坑である。天井部が崩壊している。崩壊時期は比較的新しいと考えられ、崩壊したくぼみの穴には周辺の鴻臚館関連の遺物の他、江戸時代の陶器片、瓦類が含まれている。遺構は深く、作業に危険を伴うことと、SB31の礎石固め穴の崩壊の危険があったので、主室西半は未掘のままであるが、全形を推測するには支障ない。

竪坑は75cm×45cmの長方形プランで、垂直に1.55m掘り込まれている。竪坑の坑底は主室部（南）に傾斜しており、深い部分は1.65mを測る。入り口部分は崩壊しているので高さは不明であるが、あまり高くないと考えられる。幅は竪坑と同じ75cm、人間一人がやっと通れる程である。

主室部はさらに一段深く掘り下げている。竪坑の平坦面から0.8mの深さがある。地表面から主室床面までは2.5mを測る。主室は前壁部のコーナーはほぼ直角に曲がるが、奥壁部は明確なコーナーがなく、丸くなる。主室長2.5m、主室幅は軸線で左右対称と考えると3.1m。隅丸長方形の平面プラ

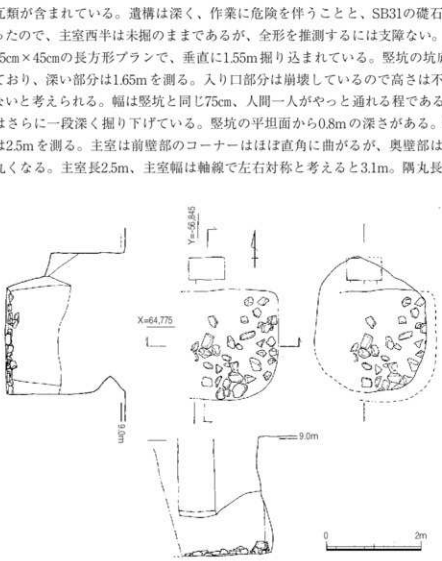


Fig.71　地下式土坑 SK28 実測図（1/80）

ンをなすと考えられる。

床面には砂岩、花崗岩の礫が側壁、奥壁にそって数十個配されている。敷石という程のものではなく、散在的である。入り口部よりおりた主室前面中央部1m四方に礫はみられず、側壁にそった部分の幅0.9m、奥壁にそった部分の幅1.4mのL字形に配置されていることからみれば、棺台としての使用が考えられる。配石は未掘部も入れるとコの字形配置になるかもしれない。

壁面は奥壁部が垂直に1.1mたちあがり、側壁はやや内傾しながら1mたちあがる。前壁は外傾しながら1.3mたちあがっている。それより上部は崩壊している。現存の上端部が天井部への移行点と考えることができる。床面から天井部までの高さは1.5m前後になると推定される。(山崎純男)

SK28出土遺物 Fig.73 遺構に伴う遺物はきわめて少なく、床面に配置された礫に混じっていた石臼と青磁器片1点がある。他は天井部が崩壊したくぼみに流れ込んだ遺物で、鴻臚館関連と福岡城関連の二者の遺物が混在している。(山崎純男)

1は土師質の焙烙、**2**は扁平の鉄釘、**3**は石臼で上臼、**4**～**6**は軒瓦である。ほかに朝鮮半島産の陶器壺破片、土師灯明皿、古代陶磁器、染付仏飯器などの近世遺物が出土した。

SK227（第6次調査、B-C780グリッド） Fig.72

鴻臚館南館台地の中央に位置する。天井部は崩落している。主室に対して北西に竪坑を設け、入り口とする。地表面から主室床面までは2.6mである。竪坑の幅は80cm程度。竪坑の坑底は地表面から1.5m下で奥行40cmのテラスとなる。竪坑内では、垂直50cm間隔で2つの窪みがあり、上の窪みと同じ高さで北西壁面に縦幅6～8cm、奥行5cmほどの溝状痕跡がある。足場など板状痕跡となるか。

主室は竪坑底から1.15m深く、竪坑底から床面までは足掛けの小さな段が2段設けられる。それぞれ床から30cmで奥行5cm、床から55cmで奥行10cm、いずれも内傾する。主室は床面が隅丸長方形で2.5×2.8m、天井部は半球状か。天井部の高さは推定1.8mである。

床面には30cm前後の礫が西寄りに散在する。南隅の石材は割れた石臼である。

SK227出土遺物 Fig.73 青磁などの古代遺物が出土した。床面検出の石臼は取り上げていない。**7**は、遺構の崩落上端の南に位置するPit.5から出土した石臼で、参考資料である。

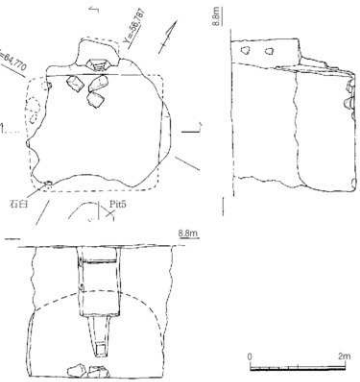
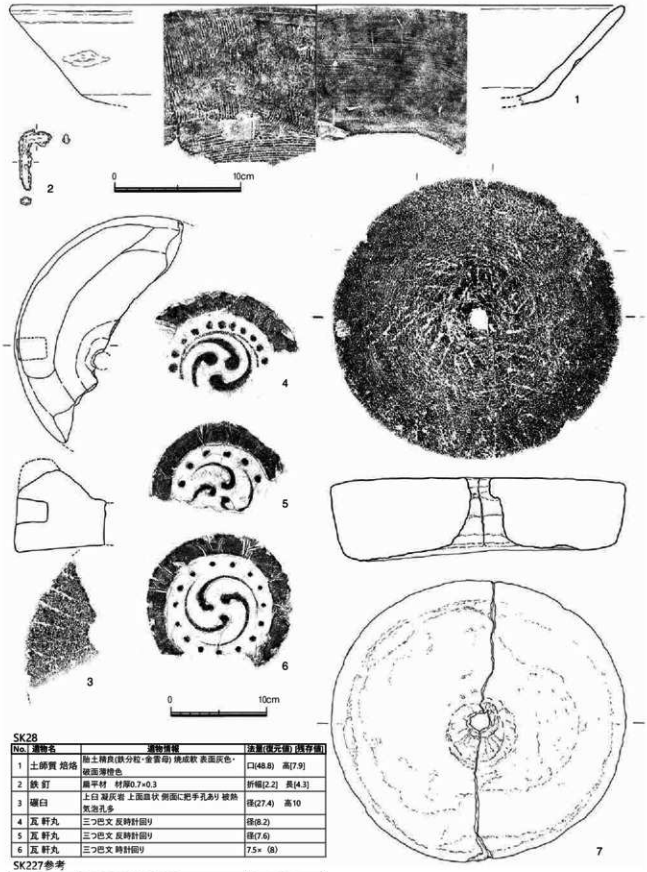


Fig.72 地下式土坑 SK227 実測図（1/80）

SK271（第7次調査、B790グリッド） Fig.74

鴻臚館南館台地の中央に位置する。土坑は完存し、竪坑入り口は1.2×1.0mの石を置き、周辺を40cm内外の石で詰め、塞がれていた。大ぶりの石は鴻臚館の礎石を利用したものと思われる。



SK28

No.	遺物名	遺物属性	法量(復元値) (残存値)
1	土師質 焙烙	胎土 精良(鉄分粒・金雲母) 焼成軟 表面灰色・破面薄橙色	口(48.8)　高[7.9]
2	鉄 釘	扁平材　材厚0.7×0.3	折幅[2.2]　長[4.3]
3	碾臼	上臼 凝灰岩 上面皿状 側面に把手孔あり 被熱 気泡孔多	径(27.4)　高10
4	瓦 軒丸	三つ巴文 反時計回り	径(8.2)
5	瓦 軒丸	三つ巴文 反時計回り	径(7.6)
6	瓦 軒丸	三つ巴文 時計回り	7.5×（8）

SK227参考

7	碾臼	下臼 安山岩 ほぼ完形 2分割	径31.2　厚(8.5)

(cm)

Fig.73　SK28 出土遺物・SK227 参考資料 実測図（1 ～ 2は 1/3、他は 1/4）

竪坑は主室に対して真西に設けられる。地表面から主室床面までは2.5mである。竪坑は入り口が70×40cmの長方形で、地表面から1.15mで奥行30cmのテラスと、地表面から1.5m下で奥行10cmのテラスがあり、これが坑底となる。

主室は竪坑底から1m深く、竪坑底から床面までは奥行10cm未満の足掛けが1段設けられる。主室床面は入り口側が直線的、奥壁側が弧を描く半円形であり、天井も半球状である。天井の高さは床から2mである。床面には壁に沿って石を配し。南側には石臼が置かれ、北側では細長い木が残っていた。石の上面が揃っているので、石は台となっていた可能性がある。

SK271出土遺物　Fig.75　1は床面で確認された石臼で、下臼である。被熱により一部剥落する。ほかに遺物は出土していない。

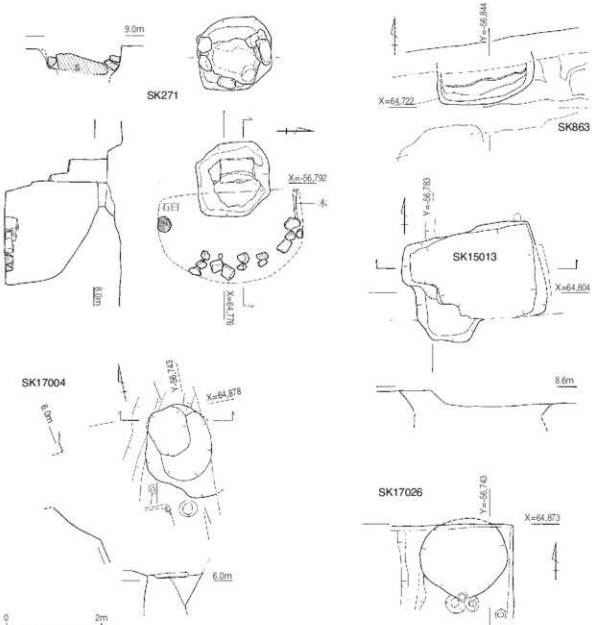
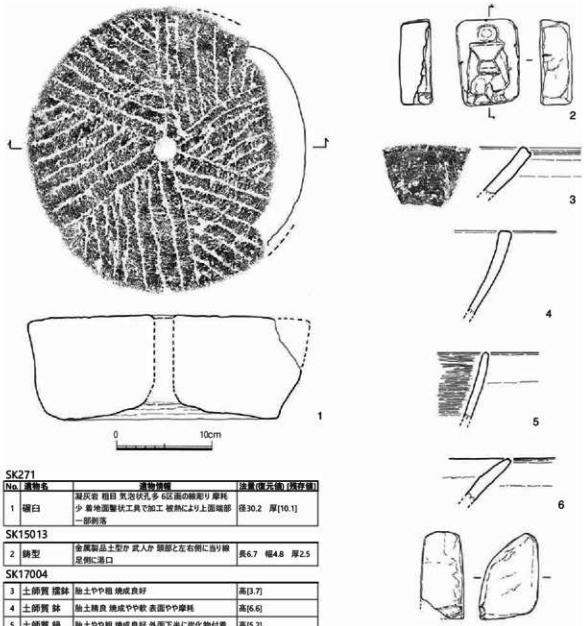


Fig.74　地下式土坑 SK271・SK863・SK15013・SK17004・SK17026 実測図（1/80）

SK863（第12次・第13次調査、G840グリッド） Fig.74

調査区北壁にかかって検出された。竪坑部は北側に位置しており、確認できたのは奥壁と東西側壁の一部である。昭和20年代の掘削によって上半部は失われている。床面は東西に1.95m、南北0.7m以上を測る。床面は平坦に整えられており、標高7.1mを測る。奥壁および東西側壁はほぼ直角に床面から立ち上がり、高さ0.8mあたりでオーバーハングしながら天井部へ続いている。天井部の形状は



SK271

No.	遺物名	遺物情報	法量(復元値)[残存値]
1	碾臼	凝灰岩 粗目 気泡状孔多 6区画の線彫り 摩耗少 倉地国製状工具で加工 被熱により上面端部一部剥落	径30.2　厚[10.1]

SK15013

2	鋳型	金属製品土型か 武入か 頭部と左右側に当り線 足側に湯口	長6.7　幅4.8　厚2.5

SK17004

3	土師質 擂鉢	胎土やや粗 焼成良好	高[3.7]
4	土師質 鉢	胎土精良 焼成ややもろ 表面やや摩耗	高[6.6]
5	土師質 鍋	胎土やや粗 焼成良好 外面下半に炭化物付着	高[5.2]
6	土師質 鍋	胎土精良 焼成良好	高[3.5]
7	砥石	尼岩 仕上げ砥石 全面砥面 短軸方向に溝状の砥面	長6.8　幅4.6　厚3.4

(cm)

Fig.75　SK271・SK15013・SK17004 出土遺物実測図（1は 1/4、他は 1/3）

不明であるが、その断面系は蒲鉾形をなしていた可能性がある。遺物は古代瓦片を初めとして越州窯系青磁、白磁等の小片が出土している。(田中)

SK15013（第21次調査、b780グリッド） Fig.74

地山岩盤を掘り込んで営まれている。西側に竪穴状の入り口を設ける。出入り口は一辺80cmの方形を呈し、180cm以上直に掘り込まれている。出入り口の正面壁面（西面）には足掛けのくぼみが、40～50cm間隔で縦一直線に掘り込まれている。

地下室部分は天井が大きく崩落し、内部に落ち込んでいた。若干掘り下げた状態で、南・東・北の各壁面が大きくオーバーハングしており、天井部以外は遺存しているものと思われる。しかし、検出面上で岩盤に層理にそって亀裂が走り、さらに崩落する危険性が高く、完掘は断念した。(大庭)

SK15013出土遺物 Fig.75 **2**は人形の鋳型である。頭部と左右側に当り線が、足側に湯口がある。遺構に属するものかどうか分からない。遺構の北東6mには、古代の梵鐘鋳造遺構SK15027が位置する。2の時期を判断する資料はなく、想像の域を出ないが、南館台地の谷側であるこのあたり一帯には工房的な役割があった可能性も考えられる。上記のほか、明代の龍泉窯系青磁破片、大量の近世遺物、鉄滓、杭の先端部が出土した。杭はおそらく近代以降である。鉄滓は上層でもよく出土している。

SK17004（第23次調査、i740グリッド） Fig.74、(Fig.29)

グリッド1調査区、平坦面SX17710北西隅に位置し、土坑SK17005を切っている。竪坑の東壁は標高5.5mで東側に屈折する。主室天井部へのラインであると考えられ、主室は東側にあり、西側に竪坑を設けるものと思われる。竪坑入り口は1m×80cmの隅丸長方形となっているが、崩落により変化している可能性が高い。崩落の危険があったので、完掘していない。

SK17004出土遺物 Fig.75 **3**～**6**は土師質の擂鉢・鉢・鍋の破片、**7**は砥石である。上記のほか、大型と思われる器壁の厚い滑石製石鍋の破片・13世紀頃の龍泉窯系青磁破片・12世紀頃の白磁碗破片など中世遺物と、瓦など古代遺物が出土した。

SK17026（第23次調査、i740グリッド） Fig.74、(Fig.29)

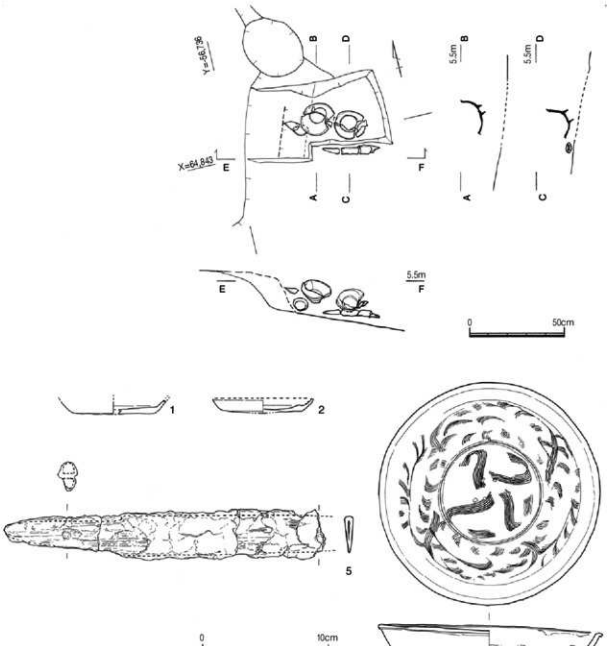
グリッド2調査区、平坦面SX17710西辺の中央あたりに位置する。遺構の北3mに地下式土坑SK17004が、南2mに板碑残欠を出土したピットSP17047がある。竪坑入り口と思われる痕跡は直径1.8mの円形である。掘削調査を行っていない。瓦質火舎の破片と古代遺物の破片を採集した。

(10) 土壙墓

SR23211（第29次調査、j730グリッド） Fig.76～77、(Fig.18、Fig.59土層断面19層)

トレンチ5調査区、斜面SX23200西側の落ち際で、池SG23206を構成する層の下位から11世紀末頃の白磁碗2個体と鉄刀がまとまって出土した。西側から斜面SX23200に向かって堆積する赤褐色粘質土に包含され、上面には灰色細砂層が被る（Fig.59）。遺構上端は検出できなかったが、下端は西側の白磁碗下で北方向に延びる痕跡があった。南方向は推定線である。碗は床面から浮いているが、鉄刀は床面に着く。鉄刀着地面の標高は5.3mである。掘方を失っているが、土壙墓または木棺墓と考える。遺構の上位に池の土手が設けられたので残ったものであろう。確認された墓はこの1基のみであるが、周辺に同時代の遺物が散見されるので、同時代遺構が破壊を免れ他にも残る可能性がある。

(吉武)



SR23211

No.	遺物名	遺物情報	法量(復元値) [残存値]
1	土師器 皿	糸切り 胎土に白色砂粒・赤褐色粒・微細雲母含む 焼成やや不良 表面摩滅	底6.3　高[1.2]
2	土師器 皿	糸切りか 胎土に白色砂粒・赤褐色粒・微細雲母含む 焼成やや不良 表面摩滅	口(8.0) 底6.4 高(1.2)
3	白磁 碗	ほぼ完形 明灰色良胎 硬質 やや黄味ある灰色透明釉 釉垂れ顕著大きな貫入	口17.8 底6.6 高8.0
4	白磁 碗	ほぼ完形 僅かに橙色がかる白色粗胎 軟質 灰色釉 釉垂れ顕著 内外面大きな貫入 ピンホール多	口16.9 底6.2 高7.7
5	鉄刀	錆化顕著 木質遺存	総長[25.4]　柄長9.4 刀身幅3　背幅0.8

(cm)

Fig.76　土壙墓 SR23211 実測図（1/20）、出土遺物実測図（1/3）

Fig.77　土壙墓 SR23211 遺物出土状況写真（左: 南東から、右: 南から）

SR23211出土遺物　Fig.76　**1・2**は土師器皿で糸切り底、**3・4**は白磁碗でいずれもほぼ完形である。**5**は鉄刀で、全体に木質が残り、茎部には目釘孔が見られる。

(11) 土坑

発掘調査を行った土坑を報告する。検出のみ行ったものは扱っていない。記載は遺構番号順である。

SK133（第4次・第11次調査、B840グリッド）　Fig.78

溶解炉SK139（Fig.67）に切られている。14世紀代の口禿の白磁碗や土師器皿が投棄されていた。標高8.9m地点、1m×60cmの楕円形で、深さ30cmを測る。遺構は鴻臚館跡展示館内で保存し、完掘調査を行っていない。

SK222（第6次調査、C780グリッド）　Fig.78

近世土坑SK209に切られる。標高8.3m地点、1.2m×80cmの略台形で、深さ20cm。

SK222出土遺物　Fig.78　**1**は白磁像の台座部分である。像は剝落している。脚部外面から内面は露胎で、台座正面には意匠がある。台座上面には像の剝離痕があり、一ヵ所には接着時に引っ掻いたような線押しが残る。正面向かって左側には径8㎜の孔がある。棒状のものが立てられた痕である。像は神像もしくは仏像か。

SK360（第9次調査、E-F750グリッド）　Fig.79

調査地の南東隅、鴻臚館Ⅴ期の溝SD357の東に位置する。遺構の一部を検出した。底の中心は東にあるのか、東下がりの様相を呈し、大半は調査区の東外に広がる。土坑内には子供の頭ほどの石や小塊が多くある。土坑内からは、染付等が出土している。（瀧本）

SK360出土遺物　Fig.79　**1・2**ともに明代の青磁碗である。ほかに陶器・高麗陶器・瓦質土器・土師器の破片が出土した。

SK222

No.	遺物名	遺物情報	法量(復元値)	残存値
1	白磁 人物座像	台座部 像剝落 白色精良胎 透明釉	幅4.7　長3.2　高3.7	

SK360

1	青磁 碗	龍泉窯系 淡灰白色精良胎 淡青緑色不透明釉	口(12.6)　高[3.3]	
2	青磁 碗	龍泉窯系 印花 外面蓮弁文 白味ある淡灰白色精良胎 淡青色半透明釉 貫入	底(5.6)　高[3.2]	

(cm)

SK1103（第18次調査、h830グリッド） Fig.78

グランド中央部分の岩盤と埋め立て前の旧地表面堆積層をかすめるように掘り込まれた廃棄物処理土坑である。2.2×2.0m、深さ40cmでほぼ隅丸方形、底は二段になり大礫が混じる。遺物には５世紀代の須恵器、新羅陶器、高麗陶器、越州窯系青磁Ⅰ･Ⅱ類、白磁Ⅰ･Ⅺ類、中国製陶器片等が混在しているが、土師質の擂鉢もあり、遺構自体は室町時代のものである。（池崎）

SK1249・1251・1252（第19次調査、g750・g770グリッド） Fig.78、（『鴻臚館跡13』Fig.21）

中世末の地形変換線の縁辺部に見られる径50cmほどの円形の土坑である。いずれも福岡城築城時の埋立土である風化頁岩礫が充填されており、福岡城築城直前の遺構であるが、性格は不明である。遺物は未検出である。（池崎）

調査時、周辺にも同様の遺構が確認されているが、中世遺構として確認できたもののみを掲載した。

SK17005（第23次調査、i740グリッド） Fig.80

グリッド１調査区、SX17710の北西隅外側に位置する長方形土坑である。地下式土坑SK17004に切られる。遺構の東側は地下式土坑構築時に破壊されているが、辛うじて北東コーナーの下端が残る。南北2.9m、東西2m、深さ１m、底面標高は6.2mである。埋土は西側から流れ込む埋没過程を表す。底面には暗灰色粘土が面上に広がり、床面が意識されている。

遺物は全て小破片で、龍泉窯系青磁・青白磁輪花・陶器・石鍋など中世遺物と、瓦・陶磁器など古代遺物が出土した。

SK17023（第23次調査、j740グリッド） Fig.81、（Fig.24）

グリッド１調査区の北境界際に位置する集石土坑である。すぐ東には溝SD1240が走る。土坑は東西90cm、南北55cmほどの楕円形で、深さ30cm、標高6.8mで、概ね20cm大の礫が詰められている。礫・土坑に被熱痕跡はなく、礫下面と床面の間には暗灰褐色シルト質粘土が見られた。遺物は未検出である。

SK17024（第23次調査、i740グリッド） Fig.81、（Fig.24）

グリッド２調査区の西境界際に位置する。南北3.1m、東西は推定1.8mで、楕円形。深さ50cm、底面標高6.7mを測る。南側はテラス状になっているが、形状から他遺構との切り合いであろう。

SK17024出土遺物 Fig.81 **1**は白磁碗の加工品で、碗自体は12世紀前後のものである。**2**は土師質擂鉢、**3**は土師質鍋である。ほかに明代青花碗の小破片と古代の瓦が出土した。

SK17024

No.	遺物名	遺物情報	法量(復元値)[残存値]
1	白磁 碗 加工品	縁辺打ち欠き 明灰色胎 透明釉 見込み粒状付着物少量	外径7.8　底7.3 高1.7
2	土師質 擂鉢	櫛目6条 粗胎(大粒石英含) やや軟質	—
3	土師質 鍋	やや粗胎(鉄分粒・石英粒含) 内面被熱 炭化物付着	—

(cm)

SK17057（第23次調査、h740グリッド） Fig.24、（『鴻臚館跡22』Fig.178 Gr.4西壁30・31層）

グリッド４・グリッド３にわたり検出された円形土坑である。南側は主に調査範囲外で、一部SD17059に切られたものと思われる。遺構は埋没後、中世の一時期の旧表土層（茶褐色壌土層）に覆われる（『鴻臚館跡22』Fig.178 Gr.4西壁土層）。確認できた限りでは円形と思われるが、南半部は不明である。土層確認できる範囲で、半径2.6m、深さ60cm、底面標高5.7mである。須恵器と青磁破片が出土した。

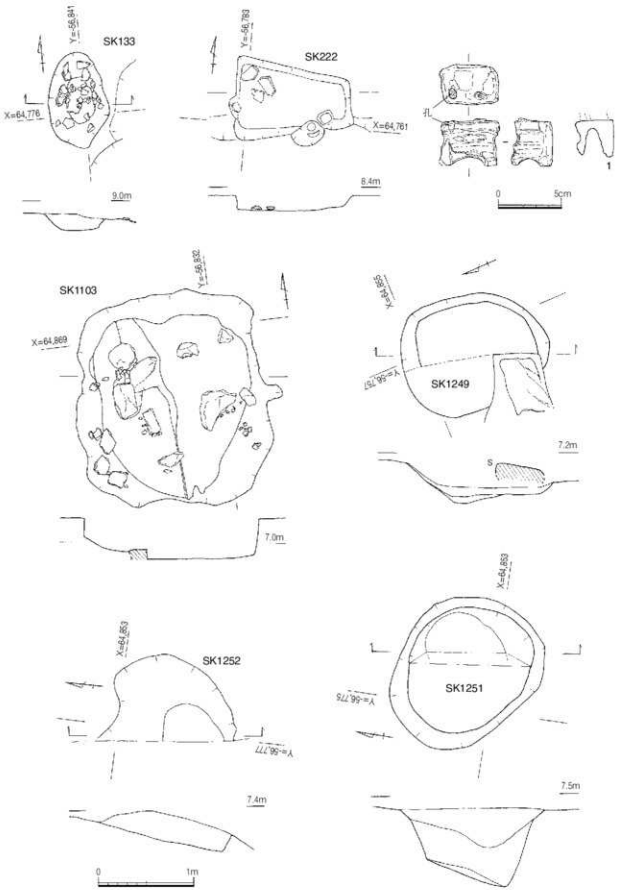


Fig.78　土坑 SK133・SK222・SK1103・SK1249・SK1251・SK1252 実測図(1/40)、SK222 出土遺物実測図(1/3)

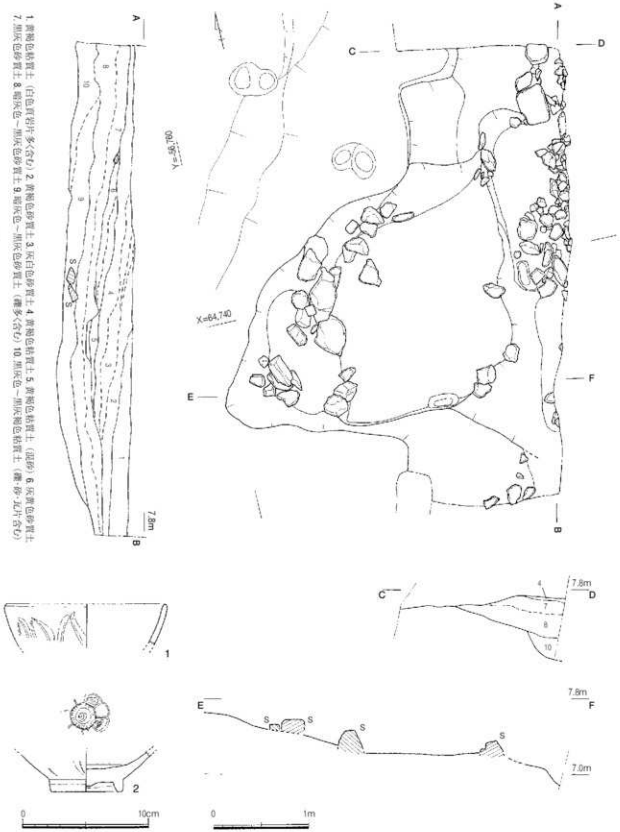


Fig.79　土坑 SK360 実測図（1/40）、出土遺物実測図（1/3）

SK17062（第23次調査、h730グリッド） Fig.82、(Fig.24、『鴻臚館跡22』Fig.178)

グリッド4調査区の南側、標高6m地点に位置する。径2.6mの円形土坑である。検出面では径2.2mであるが、当初設定したグリッド2トレンチの南壁土層（『鴻臚館跡22』Fig.178）で遺構の土層が確認できた。遺構は自然に埋没したもので、最上層（1層）暗青灰色粘質土の土質は、埋没後水溜まりとなっていた影響によるものと思われる。出土遺物はない。

SK17213（第23次調査、h720グリッド） Fig.83、(Fig.32)

グリッド4調査区下段の平坦面SX17711上、標高2.9m地点に位置する。楕円形の土坑で、平面1.6×1.2m、深さ70cm、底面標高2.11mである。遺構は現地で保存されるため、半裁での確認調査に留めた。柱穴の可能性がある。土師器皿の小破片が出土したが、図示できなかった。

SK17222（第23次調査、i720-h720グリッド） Fig.83、(Fig.32)

グリッド4調査区下段の平坦面、標高2.9m地点に位置する。平坦面SX17711の区画溝に先行するので、SX17711が形成される以前の遺構である可能性がある。隅丸長方形の土坑で、平面1.1×

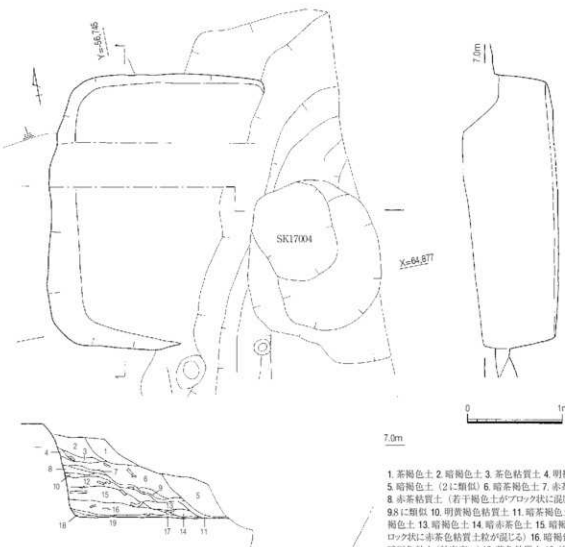


Fig.80　土坑 SK17005 実測図（1/40）

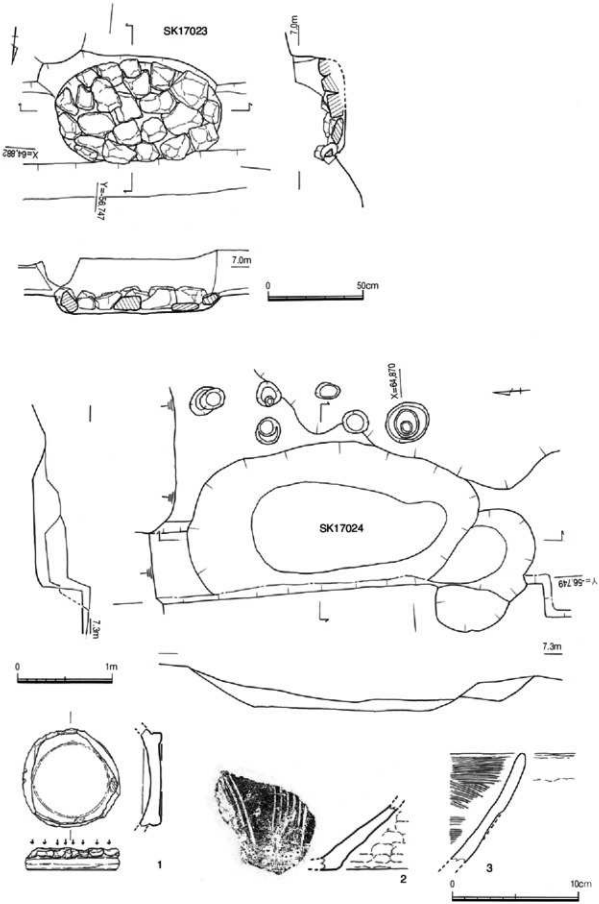


Fig.81　土坑 SK17023・SK17024 実測図（1/20、1/40）、SK17024 出土遺物実測図（1/3）

0.95m、深さ35cm、底面標高2.57mである。遺構は現地で保存されるため、半裁での確認調査に留めた。柱穴の可能性がある。14世紀頃の龍泉窯系青磁の小破片が出土したが、図示できなかった。

SK17231（第23次調査、i720グリッド） Fig.83、(Fig.32)

グリッド4調査区下段の平坦面SX17711上、標高2.9m地点に位置する。楕円形の土坑で、平面1.0×0.9m、深さ70cm、底面標高2.28mである。柱穴の可能性がある。出土遺物はない。

SK17240（第23次調査、i720グリッド） Fig.83、(Fig.32)

グリッド4調査区下段の平坦面SX17711上、標高2.9m地点に位置する。径1.3mの略円形土坑、深さ60cm、底面標高2.32mである。柱穴の可能性がある。遺構は現地で保存されるため、半裁での確認調査に留めた。遺物は未検出である。

SK17250（第23次調査、h720グリッド） Fig.83、(Fig.32)

グリッド4調査区下段の平坦面SX17711上、標高2.9m地点に位置する。2.4×1.8m、深さ46cm、底面標高2.34mである。遺構は現地で保存されるため、半裁での確認調査に留めた。龍泉窯系青磁の小破片と15世紀頃の白磁小破片が出土したが、図示できなかった。

SK17290（第23次調査、i720グリッド） Fig.83、(Fig.32)

グリッド4調査区下段の平坦面SX17711上、標高2.9m地点に位置する。隅丸長方形で、平面75×60cm、深さ30cm、底面標高2.58mである。遺構は現地で保存されるため、半裁での確認調査に留めた。遺物は未検出である。

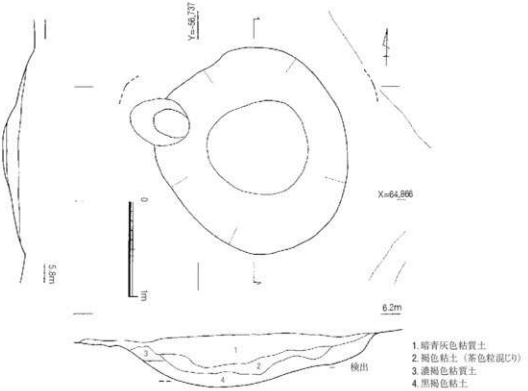


Fig.82　土坑 SK17062 実測図（1/40）

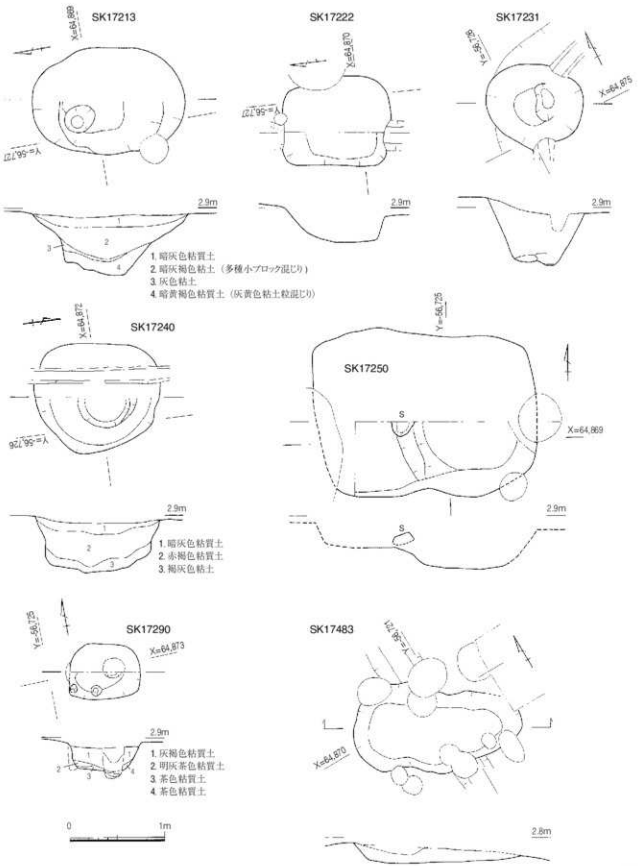


Fig.83　土坑 SK17213・SK17222・SK17231・SK17240・SK17250・SK17290・SK17483 実測図（1/40）

SK17483（第23次調査、h720グリッド） Fig.83、(Fig.32)

グリッド４調査区下段の平坦面SX17711上、標高2.8m地点に位置する。楕円形気味の不整形で、平面1.8×0.9m、深さ20cm、底面標高2.55mである。出土遺物はなかった。

SK18353（第24次調査、k800グリッド） Fig.84

トレンチ２調査区の岩盤上、標高7.5m地点で検出した。細長型で溝のようでもあるが、底面が

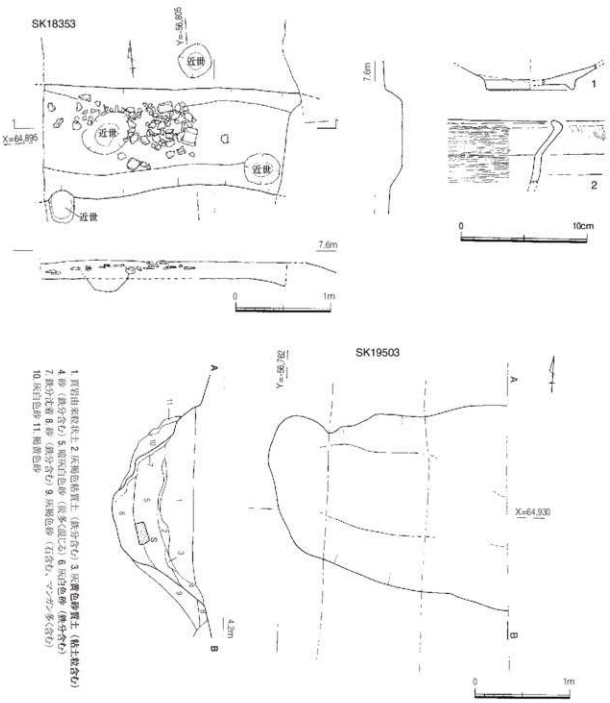


Fig.84　土坑 SK18353・SK19503 実測図（1/40）、SK18353 出土遺物実測図（1/3）

平坦であるので土坑としている。図示していないが、この遺構から東方1.8m地点に、中世ピットSP18371（k800グリッド）があり、土師質の周防系足鍋破片を出土している。ほかにも中世ピットが存在する可能性があるが、今回の報告時点では未検出である。土坑は、検出長2.6m、幅1.2m、深さ20cm、底面標高は7.3mである。

SK18353出土遺物　Fig84　**1**は白磁碗、**2**は瓦質足鍋の破片である。

SK18353

No.	遺物名	遺物情報	法量(復元値) [残存値]
1	白磁 碗	灰白がかる白色精良胎 灰白がかる透明釉 貫入	底(7)　高[2.1]
2	瓦質 足鍋	防長型 胎土C1mm前後 白色粒含む 暗灰褐色～暗灰色 焼成良好	口[24～25)　高[5]

(cm)

SK19503（第26次・第27次調査、o750-n760グリッド）　Fig84

トレンチ3調査区、北館台地下で検出された。東側は調査区外となり、溝の可能性もある。平面形は不明で、調査区東端での南北幅は2.2m、深さ1m、底面標高は3.0mである。青磁・土師器・須恵器など小破片と、古代の瓦が出土した。

SK19604（第26次・第27次調査、o760グリッド）　Fig85、(Fig34)

トレンチ3調査区、北側の低地面で検出された略円形土坑である。径60cm、深さ25cm、底面標高は3.8mである。遺物は出土していない。

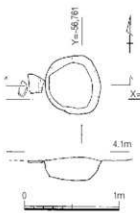


Fig.85　土坑 SK19604 実測図（1/40）

SK21113（第26次・第27次調査、m720グリッド）　Fig86、(Fig15)

トレンチ4調査区、東側の溝SD21111内で検出された。円形を意識した不整形土坑で、南北2m、東西1.6mを測る。完掘していないが、下方から明代の青磁が出土した。

SK21113出土遺物　Fig86　**1**は明代の大型青磁碗、**2**は白磁碗で見込み蛇の目削り、**3**は備前の擂鉢である。1は下層から、2・3は上層からの出土である。上記のほかに、滑石製石鍋破片、瓦・陶磁器などの古代遺物が出土した。

SK21118～21120・21137（第26次・第27次調査、m710-m720グリッド）　Fig86、(Fig15)

トレンチ4調査区、東側の溝SD21111の最下段（SX21116・SX21117）で検出された。この段は調査区が狭小であり、多くの遺構は性格不明であるが、本調査区の南側のトレンチ5調査区やグリッド4調査区では、北館台地の東側下段において、16世紀以降の平坦面と遺構群が確認されている。本遺構群も同様の様相である可能性がある。

SK21118は半裁のみおこない、遺物は未検出である。SK21120・21137からは小破片が出土したが、図示できるもの、時期がわかるものはなかった。

SK21119出土遺物　Fig86　**4**は龍泉窯系稜花の皿で明代、**5**は東播の擂鉢で軟質である。ほかに近世陶器の小破片が出土した。

SK21113

No.	遺物名	遺物情報	法量(復元値) [残存値]
1	青磁 大碗	龍泉窯系 底部内外面蛇の目釉剥ぎとハマ痕 灰白色精胎 濃オリーブ色透明釉 貫入	底(8)　高[2.5]
2	白磁 碗	見込み蛇の目削り・蛇の目釉剥き取り 底部内外面重ね焼き痕 明灰色精胎 内面のみ灰色透明釉	底(6.8)　高[2.8]
3	備前 擂鉢	精胎(石英・黒粒含) 鉄釉(濃茶褐色) 焼成良好 外面に重ね焼き痕	高[9]

SK21119

4	青磁 皿	龍泉窯系 稜花 明灰色やや精胎 緑味ある透明度の高いオリーブ色釉 細い貫入	–
5	東播 擂鉢	瓦質 擂目6条 灰色胎(石英粒多含) 軟質	–

(cm)

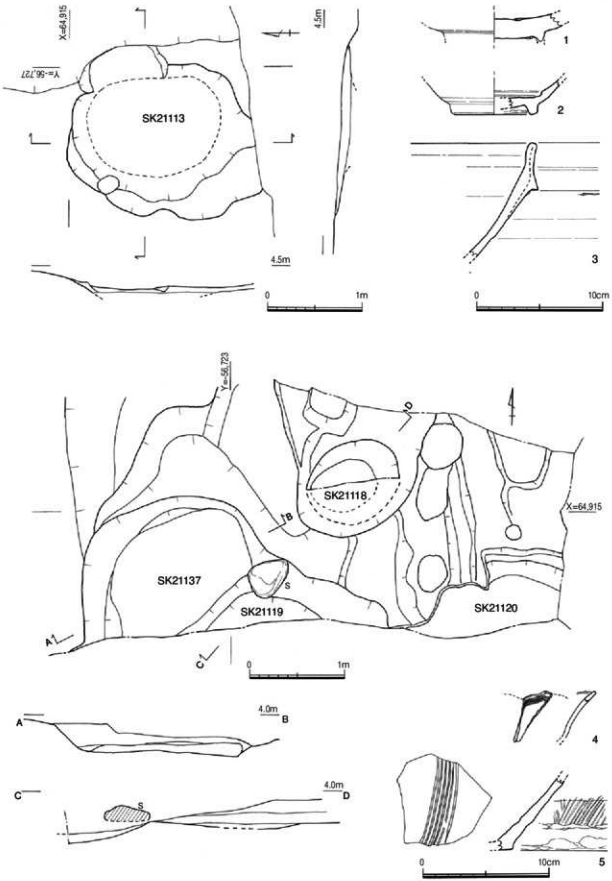


Fig.86　土坑 SK21113・SK21118～21120・SK21137 実測図(1/40)、SK21113・SK21119 出土遺物実測図(1/3)

SK23140（第26次・第27次調査、j740グリッド） Fig.87、(Fig.18)

トレンチ5調査区、旧北館台地岩盤上、標高7.2m地点で検出された土坑である。下端は長方形を呈し、上端は楕円形気味の不整形である。下端から20cmで南側のみテラスが残る。木棺などの箱形を彷彿とさせるが、墓である確証はない。上端1.5×0.8m、下端0.9×0.4m、深さ80cm、テラスからの深さ20cm、底面標高25cm、底面標高6.35mである。

SK23140出土遺物 Fig.87 **1**は明代青花皿、**2**は刷毛目粉青碗である。

SK23141（第26次・第27次調査、j740グリッド） Fig.87、(Fig.18)

トレンチ5調査区、旧北館台地岩盤上で検出された土坑である。SK23140から北へ80cm箇所に位置する。略長方形を呈する。上端は1.4×0.9mの隅丸長方形、中端は1.2×0.7mの長方形、下端は0.9×0.6mの略長方形である。深さは70cm、下端から中端までは50cm、底面標高は6.0mである。

SK23141出土遺物 Fig.87 **3**は瓦質湯釜の環付部である。このほか、同安窯系青磁碗・備前擂鉢、土師質鍋など中世の破片と、陶磁器など古代遺物が出土した。

SK23140

No.	遺物名	遺物情報	法量(復元値)	残存値
1	青花 皿	白色精良胎 青味あるガラス明釉 外面に白色堆線		
2	粉青 碗	褐胎 白泥刷毛 底部内外面に目痕	底5.5 高[3.8]	

SK23141

3	瓦質 湯釜	環付 胎土に鉄分粒多く含む 棒状工具による格子文 表面煤付着		—

(cm)

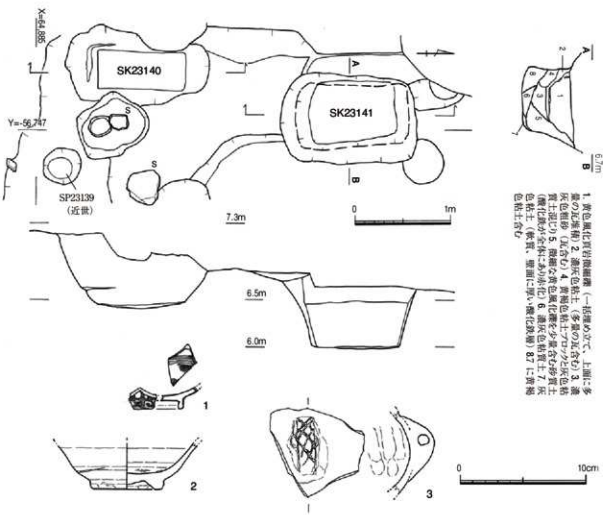


Fig.87 土坑 SK23140・SK23141 実測図（1/40）、出土遺物実測図（1/3）

(12) 遺構外の出土遺物

中世遺構以外から出土した中世遺物を掲載した。紙幅の都合により全点掲載はできなかったが、鴻臚館廃絶後の同地域が歩んだ時間を表す遺物や、重要な遺物を取り扱った。主に、南館台地上から出土したものと、北館台地上から出土したものにまとめたが、谷から出土した白磁1点を北館台地の白磁とともにおいた。遺物の詳細は一覧表とし、一部の石造物（Fig.93-97、Fig.94-99）と谷出土遺物（Fig.95-3）、青釉陶器梅瓶（Fig.95-20）について記述を加えた。種類は以下のとおりである。

白磁、青白磁、青磁、青花、中国産陶器、朝鮮半島陶磁器、その他地域の貿易陶磁器、土師器、瓦質土器、国産陶器、石製品、瓦

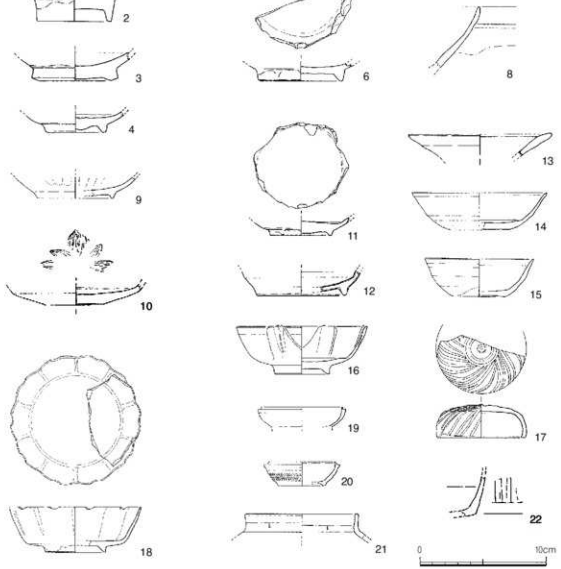


Fig.88　遺構外出土遺物実測図 南館域1（1/3）

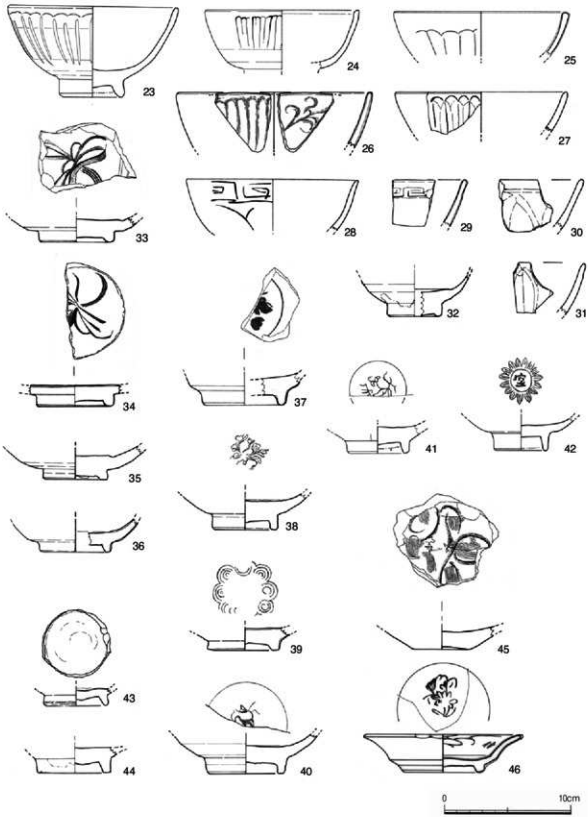


Fig.89　遺構外出土遺物実測図 南館域２（1/3）

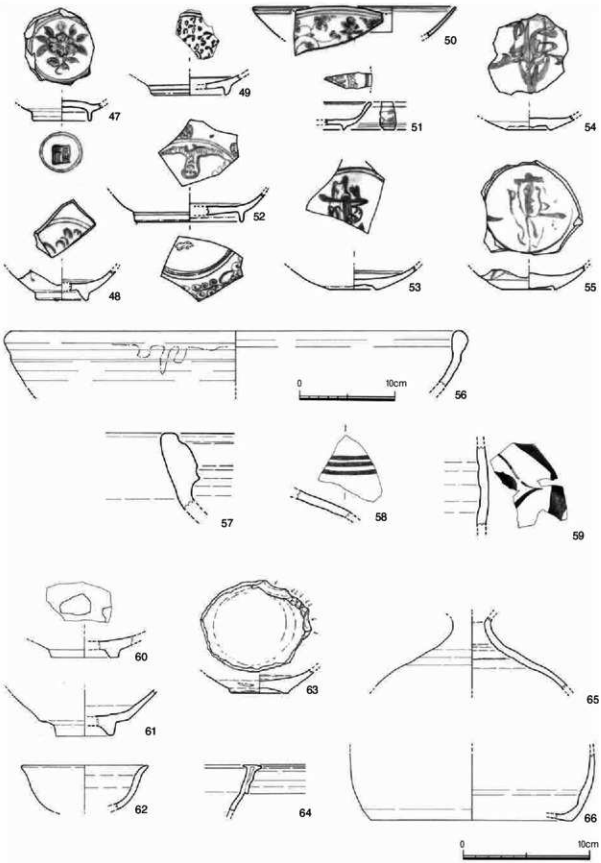


Fig.90　遺構外出土遺物実測図 南館域３（56は1/4、他は1/3）

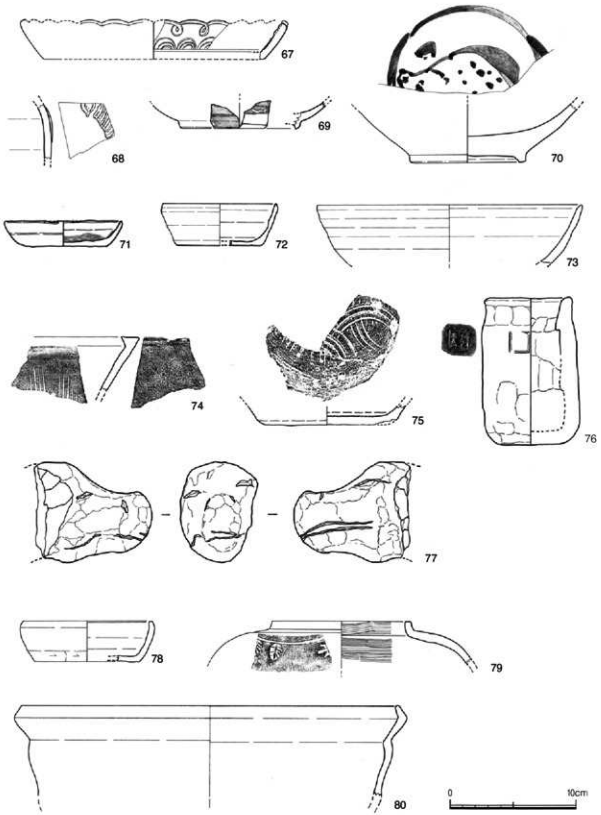


Fig.91　遺構外出土遺物実測図 南館域４（1/3）

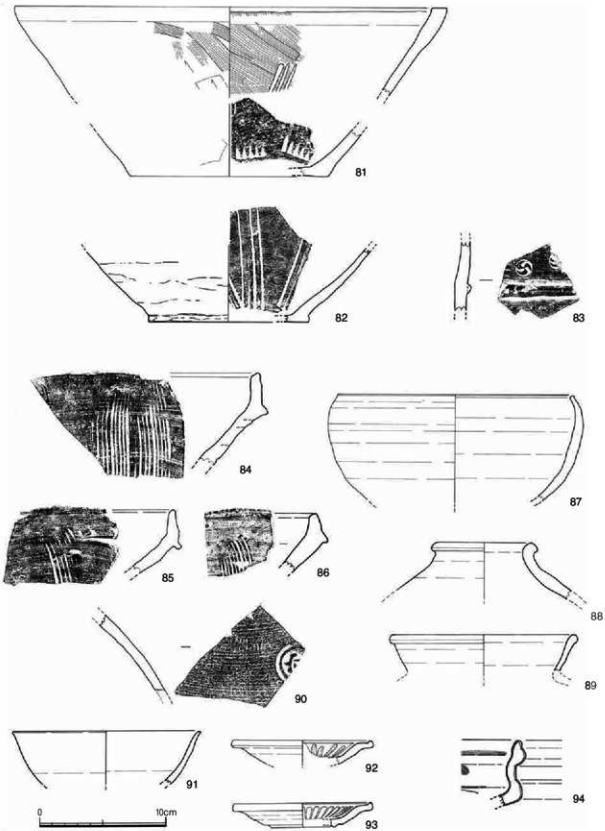


Fig.92　遺構外出土遺物実測図 南館域 5（1/3）

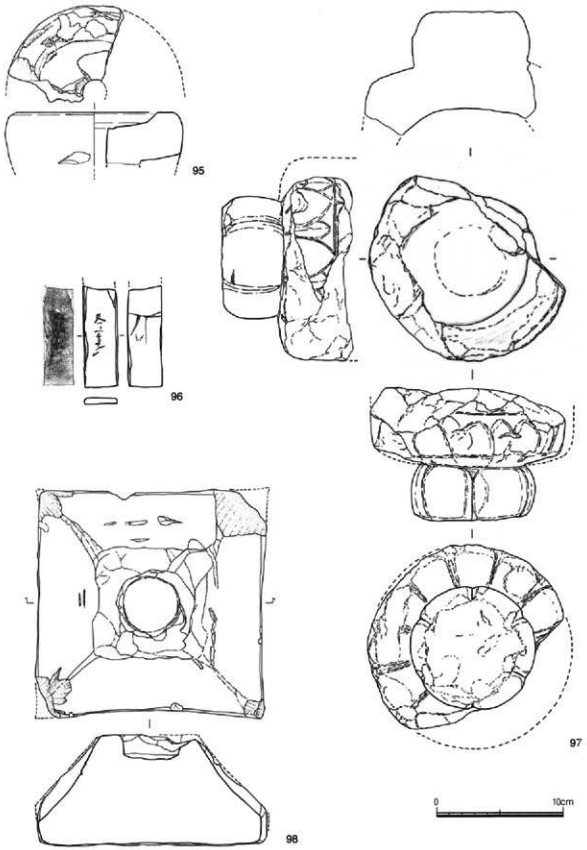


Fig.93　遺構外出土遺物実測図 南館域６（1/3）

Fig.93-**97**は凝灰岩質の香炉と思われる遺物である。南館台地北東エリアA750-780グリッドで第９次調査表採遺物として採集された。篠栗町太祖神社蔵の香炉と類似する。

太祖神社蔵の香炉には台座があり、同種の遺物と仮定すると、この遺物の台座は欠損していることになる。香炉部を受け、台座とつながるであろう扁平球状部の下面は平坦になっていて、自立する。 扁平球状部は６区の瓜破で、その上部は香炉の身となり、扁平球状部の付け根から蓮弁が彫られる。蓮弁は、重なって内側となるものに鎬があり、外側の蓮弁に鎬はない。

大陸由来の石造物は蓮弁に鎬がなく、球状のものには太極文が施されることが多い※。本遺物の球状部は瓜破であるが、蓮弁が平坦である点は合致する。

太祖神社蔵の石製香炉について、江上智恵氏は、南宋期頃の大陸由来の遺物の特徴を有するとしている。本遺物は太祖神社のものと共通する点があり、同じく大陸由来の遺物である可能性が高いと考える。

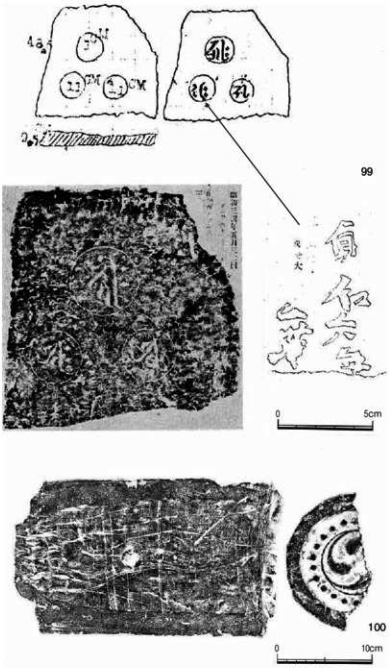


Fig.94　遺構外出土遺物実測図 南館域７

（99 描画は高野孤鹿氏『平和台の考古資料』より 1/2 転載、
99 拓本画像は長沼賢海氏『邪馬台と大宰府』から転載、100 は 1/4）

宋代大陸由来の石造物については、福岡平野周辺では首羅山、筥崎宮が注目され、周辺の石造物とともに研究が進められている。鴻臚館跡周辺では、北東2.5kmの博多遺跡群での出土のほか、福岡城から南西1.5kmの城南区別府（Fig2）に、将軍地蔵尊として祀られている石造物があり、大庭康時の確認のち江上智恵・桃崎祐輔の両氏により薩摩塔であることが改めて確認された。別府は中世前半には筥崎宮領であったとの指摘もある。

井形進2021「九州に偏在する大陸系彫刻の研究」
江上智恵2015「太祖神社所蔵の大陸系石製香炉」『歴史を歩く時代を歩く』服部英雄退職記念誌
福岡市別府公民館2014『「別府」のむかし、いま、あす』別府公民館創立50周年記念誌
※ 大庭康時教示による

Fig.94-**99**は、昭和34年バレーコート整地の際に高野孤鹿氏が発見した板碑で、出土地点は、南館台地東端E740-F750グリッドあたりである。

高野氏は『平和台の考古資料』に以下の通り記録している。「塔は自然石の、大人が一人で辛うじて抱え得る重さで、比較的扁平な9.5cm厚さのものである。頂頭部が33cm、ほぼ48.5cm平方で、文字は下部が切断されておるので全部を読取ることはできない。幸に頂頭より約11cm下にキリーク（阿弥陀如来）の梵字が径14cmの除刻円に圏まれており、その下、左右に各々径11cmの円に圏まれ、右はサ（観世音菩薩）左にサク（勢至菩薩）が　貞和六年の銘は、左サクの直下にあり（原寸大）その左に「+」*の字画らしい痕跡がある。「+」*菩薩？さらにキリークより11cm下って「+」*とサクの中間に「逆修善根」の四字が刻まれておる。」

また同遺物について、長沼賢海氏は高野氏から情報提供を受け、『邪馬台と大宰府』で拓本を掲載し以下のとおり紹介している。「碑の高さ約一メートル、其の下部の三分の一程を失ふ。碑面の文は「石造」（以下欠く）「逆修善根」（以下欠く）「貞和六年」（以下欠く）である。」

高野孤鹿1972『平和台の考古資料』稿本
長沼賢海1968『邪馬台と大宰府』太宰府天満宮文化研究所
※「+」は、くさかんむり

Fig.88

No.	遺物名	遺物情報	法量(復元値)/残存値
1	白磁 碗 加工品	灰色精良胎 硬質 透明釉 見込釉発泡 高台打ち欠き【外野スタンド盛土(現代) c810-d840】	底(5.2)　高[2.9]
2	白磁 碗	灰白色精良胎(中空薄) 整備 灰色がかる透明釉【SD869(古代) HB50】	底6.0　高[3.7]
3	白磁 碗 加工品	錆泥打ち欠き 明灰色やや精胎 透明釉(小気泡) 貫入【SD350(近世) D770-D780】	底6.9　高2.3
4	白磁 小碗	明褐色が加る白色胎 透明釉 貫入多【SD350(近世) D770-D780】	底4.8　高[1.6]
5	白磁 碗	明灰色胎(夾雑物少々) 透明釉 硬質【SD350(近世) D760-D780】	口(15)　高[2.3]
6	白磁 碗 加工品	錆泥打ち欠き 刃部あり スクレイパー使用か 爽味がかる灰白色精良胎 透明釉 貫入【SD350(近世) D770-D780】	底6.8　高1.5
7	白磁 碗	広東瀬州窯系 外面八方型ヘラ削り 淡灰白色精良胎 白化粧 透明釉【表土 C820-D850】	底[5.5]
8	白磁 碗	広東瀬州窯系 淡灰白色精良胎 薄かに水色がかる半透明釉 細かな貫入 艶やか【表土 C820-D850】	底[4.8]
9	白磁 皿	菊花皿 白色精良胎 ドすがに青味ある透明釉 全釉 見込みに隠印刻 封不明瞭【SK255(古代) A780】	底(6)　高[1.7]
10	白磁 皿	影花 灰白色精良胎 堅緻 透明釉 全釉【土塁 G830-I850】	底4.4　高[1.6]
11	白磁 皿 加工品	錆泥打ち欠き 白色精良胎 微かに緑味ある透明釉【SD350(近世) D770-D780】	底5　高1.5
12	白磁 皿	明灰色胎(微細黒色粒含) 透明釉【SD350(近世) D760-D780】	底(7.2)　高[2.1]
13	白磁 皿	口禿 白色胎 灰味強い白色不透明釉【SB1028(近代) c810-d840】	口(11.4)　高[1.8]
14	白磁 皿	平底 白色精良胎 白薄透明釉【SD1509b(古代) d750-e780】	口(10.7)　底(4.6)　高3
15	白磁 小鉢	平底 良胎 灰白色釉【SD1505②(古代) d750-e750】	口(9.2)　底(4.5)　高3
16	白磁 小鉢	輪花 精良胎 灰白色釉 【SD1505②(古代) d750-e750】	口(10.5)　底(4.4)　高4.1
17	白磁 合子 蓋	凹線拉花文 白色やや褐胎 やや青味帯びた透明釉【SD1509b(古代) d750-e780】	口(7)　最大(7.2)　高2.7
18	青白磁 小鉢	輪花 白精良胎 青味帯びた透明釉 貫入 艶やか【SD1505②(古代) d750-e750】	口(10.5)　底(4.8)　高3.6
19	青白磁 合子 身	景德鎮窯系 白色精良胎 優かに水色がかる透明釉【表採 A750-A780】	口(6.4)　受部(7)　高[1.7]
20	青白磁 合子 身	菊花并文 景德鎮窯系 白色精良胎 淡水色透明釉【表土 A760-B800】	口(5.2)　底(3.8)　高1.9
21	青白磁 壺	景德鎮窯系 白色精良胎 優かに水色がかる透明釉【表採 A750-A780】	口(9)　頸基部(9)　高[2]
22	青白磁 香炉	景德鎮窯系か 白色精良胎 青白色透明釉【SD357(古代) E760-F760】	—

Fig.89

23	青磁 碗	龍泉窯系 灰色胎良 青緑色透明釉 模倣品か【？次調査ピット494(不詳) B770】	口13.5　底4.7　高17.2
24	青磁 碗	龍泉窯系 淡灰褐色胎良 淡青色半透明釉 貫入【SK351(古代) D760】	口(12.1)　高[4.8]
25	青磁 碗	龍泉窯系 淡黄白色やや胎良 淡青緑色透明釉 貫入【8-12区遺構面 B760-B770】	—（参考図化）
26	青磁 碗	龍泉窯系 優品 明灰色精良胎 オリーブ色がかる透明釉 艶やか【SD350(近世) D770-D780】	口(15.6)　高[4.5]
27	青磁 碗	龍泉窯系 淡灰褐色胎良(微細砂粒含) 黄味の強いオリーブ色不透明釉 白濁 焼成やや不良【SK5(古代) e750-f780】	口(13.4)　高[3.3]
28	青磁 碗	龍泉窯系 灰白色精良胎 青緑色釉【表土 F750-H750】	口(13.8)　高[5.2]
29	青磁 碗	龍泉窯系 灰白色精良胎 深緑色透明釉【土塁 下第7層 中世末～近世初頭の包含層 G830-I850】	—
30	青磁 碗	龍泉窯系 明灰白色胎 堅緻 青緑色釉【土塁 G830-I850】	—
31	青磁 碗	龍泉窯系 明灰白色精良胎 堅緻 青磁釉発色良【土塁 G830-I850】	—
32	青磁 小碗	龍泉窯系 灰色やや胎良 硬質 わずかにオリーブ色がかる透明釉【外野スタンド盛土(現代) c810-d840】	底(4.4)　高[3.3]
33	青磁 碗	龍泉窯系 影花 灰色精良胎 硬質 濃緑色透明釉 細貫入 高台内八字削【外野スタンド盛土(現代) c810-d840】	底(6)　高[2]
34	青磁 碗 加工品	龍泉窯系 影花 錆泥打ち欠き 灰色精良胎 硬質 オリーブ色透明釉 高台内八字削【外野スタンド盛土(現代) c810-d840】	外径7.8　底6.2　高1.8
35	青磁 碗	龍泉窯系 灰白色精良胎 青緑釉全釉 高台内目直 底部破片【表土 G830-I850】	底5.2　高[2.7]
36	青磁 碗	龍泉窯系 鉄込絞白目輪剥式 精良胎(若干黒色間) 堅緻 若草色透明釉【SD869(古代) HB50】	底5.8　高[2.6]
37	青磁 碗	龍泉窯系 印花 明灰色精良胎 硬質 明緑色透明釉 高台内八字削【外野スタンド盛土(現代) c810-d840】	底(6.5)　高[2.5]
38	青磁 碗	龍泉窯系 印花 淡灰色精良胎 硬質 淡青緑色透明釉【包含層 A750-A760】	底5.2　高[3]
39	青磁 碗 加工品	錆泥打ち欠き 龍泉窯系 印花 淡褐色精良胎 硬質 明オリーブ色透明釉【包含層 A750-a750】	底(5.4)　高[2]
40	青磁 碗	龍泉窯系 印花 灰白色精良胎 硬質 淡青緑色透明釉【包含層 A750-a750】	底(6.2)　高[3.2]
41	青磁 碗	龍泉窯系 印花 外面縦走り線溝弁か 淡灰白色精良胎 淡青緑色透明釉 高台内焼色発色【SB32(古代) A820】	底5　高[2.2]
42	青磁 碗	龍泉窯系 見込印花花文内「宝」銘 白色精良胎 黄味強い淡オリーブ色透明釉【8-11区遺構面 B770-B780】	底(4.2)　高[2.6]

(cm)

No.	遺物名	遺物情報	法量(復元値)(残存値)
43	青磁 碗	灰白色精良胎 硬質 灰色釉 細かな貫入 同安窯系か【SX1029(近世以降)d840】	底5.8 高(2)
44	青磁 碗 加工品	練辺行5欠き後調整で円盤状 同安窯系か 灰色やや暗色 透明釉 硬質【SD350(近世)D770-D780】	外径5.8 底5.1
45	青磁 皿 加工品	舶来窯系 劃花 明灰色精良胎 硬質 明オリーブ色透明釉 外底八字銀 /外野スタジド盛土(現代)c810-d840】	外径(8.5) 底4.5 高1.8
46	青磁 皿	舶来窯系 後花 印花 淡灰白色精良胎 淡青緑色透明釉【A-8区遺構面 A790-A800】	口(12.6) 底(6.6) 高3

Fig.90

No.	遺物名	遺物情報	法量(復元値)(残存値)
47	青花 碗 加工品	練辺行5欠き 縁部心 見込花文 高台内方面「福」灰白色精良胎 透明釉【SD350(近世)D770-D780】	外径6.4 底4.6 高1.6
48	青花 小碗	黄白色やや精胎(微細黒粒多含) 白色釉 若干釉はじけ ややくすんだ呉須 骨付きハマ痕【SD350(近世)D770-D780】	底(4.2) 高(2.4)
49	青花 碗	ややくすんだ白色精良胎 水色帯びた透明釉【SK334(古代)E760】	底(5.6) 高(1.5)
50	青花 碗	白色精良胎 畳縁がある透明釉 呉須良好【SD350(近世)D770-D780】	口(16.2) 高(2.3)
51	青花 皿	白色精良胎 やや赤色おびる透明釉【表採 a750-F780】	高(2.2)
52	青花 皿	白色精良胎 わずかに青味ある透明釉 貫入【SD202(近世)D780】	底(8.6) 高(2.3)
53	青花 皿	暮鶏産 淡灰白色胎(黒色粒含) 水色帯び透明釉 梅花紋発色【遺構面 D750-F780】	底(3.4) 高(1.8)
54	青花 皿	漳州窯 暮鶏産 淡黄白色胎 乳白色白濁釉【表採 a750-F780】	底3.4 高(1.2)
55	青花 皿 加工品	練辺行5欠き(一部見込面に沿う)加工失敗 漳州窯 暮鶏産 わずかに灰色味帯びる白色精良胎 青味おびた半 透明釉 呉須良好【SD350(近世)D770-D780】	底4.2 高1.9
56	陶器 鉢	橙胎(白色粒多含) 褐色不連釉【SD1509(古代)d750-e780】	口(49) 高(6)
57	陶器 壺	胎土精良 橙 無釉 型跡【SD1509(古代)d750-e780】	—
58	陶器 壺	砲州窯系 白釉鉄絵 淡黄白色精胎(微細白粒含) 白化粧 透明釉【SK214(近世)C770】	—
59	陶器 壺	砲州窯系 白釉鉄絵 淡黄白色精胎 内面黒褐色不透明釉 外面白化粧のち鉄絵のち透明釉【SK201(近世)D790】	—
60	朝鮮白磁 碗	ややくすんだ白色精良胎 やや青味帯びる透明釉 全釉 貫入 見込砂目【SD357(古代)E760-F760】	底(5.2) 高(1.8)
61	朝鮮陶器 碗	淡灰白色精胎(微細白粒少含) 硬質 全釉 淡灰青色釉 白濁 見込・畳付に砂目【SPB12(不詳)A810】	底(4.8) 高(3.3)
62	朝鮮陶器 白磁 皿	淡緑白色やや精い胎 透明 不透明白色釉 軟質【土塁下第8-1層 15世紀以降の整地層 G830-B50】	口(10) 高(3.5)
63	朝鮮陶器 碗 加工品	練辺行5欠き 暗灰色やや精胎(白粒・黒色粒含) 透明釉全釉 内面一部貫入 畳付目痕【SD350(近世)D770-D780】	外径9×7.3 底4.7 高2
64	朝鮮陶器 鉢	砂褐色精 暗紅灰色精胎 型跡【SK160(古代)E790-E800】	—
65	朝鮮陶器 瓶	舟徳利か 釉剥落か あずき色精良胎 内外面白濁 硬質【SK262(古代)A760】	頸(3) 高(6)
66	朝鮮陶器 瓶	舟徳利 暗紅灰色精良胎(微細白色粒少含) 灰色がかる緑オリーブ色不透明釉【SK332(古代)E760】	底(15.8) 高(5.3)

Fig.91

No.	遺物名	遺物情報	法量(復元値)(残存値)
67	緑彩陶器 鉢	輪花 黄白色精胎 淡緑色不透明釉彩 表面銀化【表土 A760-C770】	—(参考資化)
68	華南彩陶器 皿	トラディスカント 淡黄褐色やや精胎 外面緑色釉 内面黒色釉【遺構面 A750-A780】	—
69	青磁陶器 皿	淡赤褐色やや精胎 青色不透明釉 梅下白化粧力 縁部により釉一部変色 イスラム陶器か【SK262(古代)A760】	—(参考資化)
70	タイ陶器 鉢	スジ付 暗灰褐色精胎(微細白色砂粒多含) 硬質 白色粒(黒点含) 黄灰色がかる白濁釉 鉄絵青黒色【表採 a750-F780】	底(9.2) 高(4.6)
71	土師器 皿	内面油だまりに油残存黒化付着 端部に打芯置きか打芯割り2a所 外面に煤【SD350(近世)D770-D780】	口9.2 底6.8 高2
72	土師器 坏	淡褐色精良胎 焼成良好【SD350(近世)D760-D780】	口(8.8) 底(6.8) 高3.3
73	土師質 鉢	白磁碗模倣か 淡褐色精良胎(微細白色粒・赤褐色粒含) 焼成良好【SD65(古代)F790-G790】	口(20.8) 高(4.6)
74	土師質 擂鉢	復元5条単位 端縁色精良胎 焼成良好【SK351(古代)D760】	—
75	土師質 鉢	煙鉢か 内面に板状工具押圧による円弧文 良胎(石英・金雲母・黒色・赤色粒含) 被熱剥落【SD350(近世)D760-D780】	底(10) 高(1.5)
76	焼塩壺	淡褐色胎(1mm白色砂粒多含)【SD350(近世)D760-D780】	口6.5 底5.3 高11.6
77	土製 馬形	橙胎(石英粒・黒粒含) 瓦質風 区色 目・鼻・口・手綱をヘラ描き【SD357(古代)E760-F760】	鼻長9.5 顔幅6 顔高(8)
78	瓦質 小鉢	平底 淡灰白色精良胎(微細白色粒少含) 焼成良好【SD65(古代)F790-G790】	口(10) 最大(10.6) 底(8.2) 高3.2
79	瓦質 壺	短頸壺 量文スタンプ 淡灰白色精胎(微細白色粒含) 焼成堅めで良好 近世か【SK353(古代)D760】	口(11) 胴(>20.6) 高(5)
80	瓦質 鍋	やや精胎(夾雑物含) 外面褐灰色 内面淡褐色 被熱【SB1028(近代)c810-d840】	口(31.5) 高(7.2)

Fig.92

No.	遺物名	遺物情報	法量(復元値)(残存値)
81	瓦質 擂鉢	復目5条単位 淡黄白色精良胎(微細白色粒少含) 焼成不良【SK64(古代)F780-G790】	口(34) 底(15.5) 高(13.4)
82	瓦質 擂鉢	復目4条 精良胎 硬質 須恵器に近い 厚判少【SD350(近世)D760-D780】	底(12.7) 高(5.8)
83	瓦質 火舎	三つ巴文スタンプ 精良胎(微細石英粒・黒色粒含) 硬質 内面黒色 外面灰色 凍み少【SD350(近世)D760-D780】	—
84	備前 擂鉢	9条単位の復目+2が1組単位か 明赤褐色精胎(微細白色粒少・黒色粒多含) 焼成良好【SK351(古代)D760】	高(7.2)
85	備前 擂鉢	復目7条 明赤褐色(微細白色粒含) 焼成良好【SK352(古代)E760】	高(5)
86	備前 擂鉢	復目9条 赤褐色精良胎(石英・長石含)【土塁F750-H750】	—
87	備前かき鉢	明赤褐色胎(微細白色粒少含) 焼成良好【SD357(古代)E760-F760】	口(18.6) 高(8.4)
88	陶器 壺	灰色やや精胎(黒粒含) 灰釉色不透明釉 一部銀化 被熱 やや軟【SD1509(古代)d750-e780】	口(8.5) 高(4.4)
89	陶器 壺	濃灰色精胎(白色・赤色粒含) オリーブ色釉うすくオ状に残る【SD1509(古代)d750-e780】	口(12.9) 高(2.9)
90	国産陶器 壺	無釉 須恵質胎 胴部スタンプ重圏内モチーフ(漢字か)【SX1519(古代)b730】	—
91	国産陶器 碗	微灰白 灰色精良胎 灰釉【土塁表土 G830-B50】	口(14.8) 高(4.2)
92	瀬戸 皿	菊弁皿 灰白色精胎 無釉色 貫入【SK160(古代)E790-E800】	口(9.9) 高(2)
93	瀬戸 皿	菊弁皿 淡褐白色やや精胎 淡黄緑色透明釉【遺構面 C750-D760】	口(10.8) 底(1.9) 高(5)
94	志野 向付	白濁釉下鉄絵 黄白色精胎 軟質 貫入 稲に気泡多【遺構面 D750-F780】	高(5.1)

Fig.93

No.	遺物名	遺物情報	法量(復元値)(残存値)
95	石臼	上臼 硬砂岩【P155(近世以降)C790】	外径(19) 高[5.5] 孔3 凹部径(13.5) 凹部深1.7
96	砥石	粘板岩か 針鐵含文字「天□□□」その背面に墨痕と墨書【遺構面 A750-A780】	長[6.1] 幅2.7 厚0.6
97	石製 香炉	香炉か 凝灰岩/砂岩? 台座欠損か 鼎平球状部6区画破の 香炉部外面墨痕で2段に区画された12基弁文 香炉部内面体部上面半球状の溝み 破面および香炉部内面摩滅・鼎平球状部下面は叩打により整形(再利用の可能性) 被熱 鼎脚後の細い打ち割り/穿孔痕あり 蝶黒町大宿神社蔵の香炉と類似【表採 A750-A780】	台座径残存最大径16.1 受け柱径9.9 受け柱高4.6+α 高(10.6)
98	石塔	火輪 砂岩【SK38の一部P138(古代)C840】	24×24 高12 孔径6 孔深2.7

Fig.94

No.	遺物名	遺物情報	法量(復元値)(残存値)
99	板碑	「貞和六年」(1350年) 梵字種子3字 (キリーク サク) 「逆修善根」【表採 E740-F750】 荒野舗装「平松台の考古資料」 荒沼駅舗19頁「郡馬台と大平寺」	厚9.5 頭頂部幅33 48.5平方 種子径 キリーク14 サ11 サ21
100	瓦 軒丸	三つ巴【表採 a750-F780】	瓦当径14 瓦(27.5)

(cm)

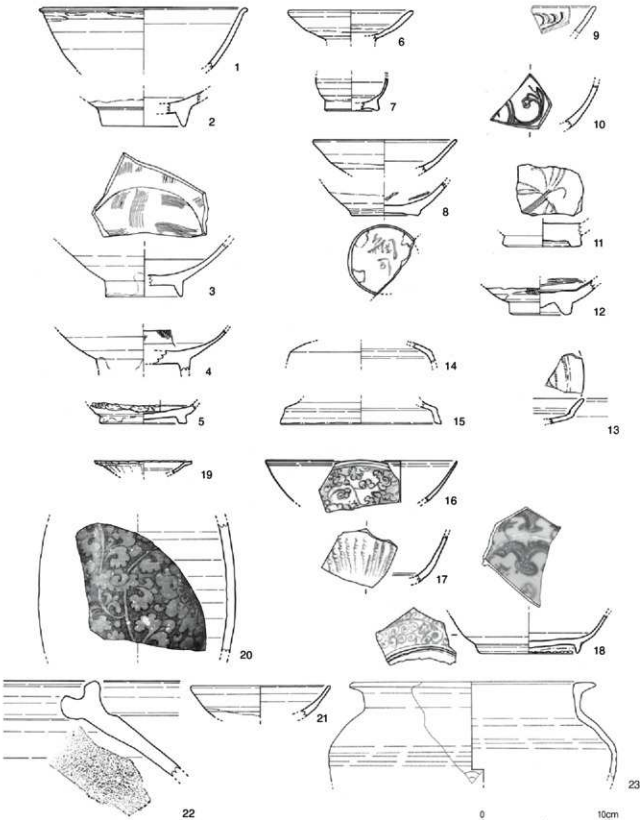


Fig.95　遺構外出土遺物実測図 北館域１（1/3）谷出土の3を含む

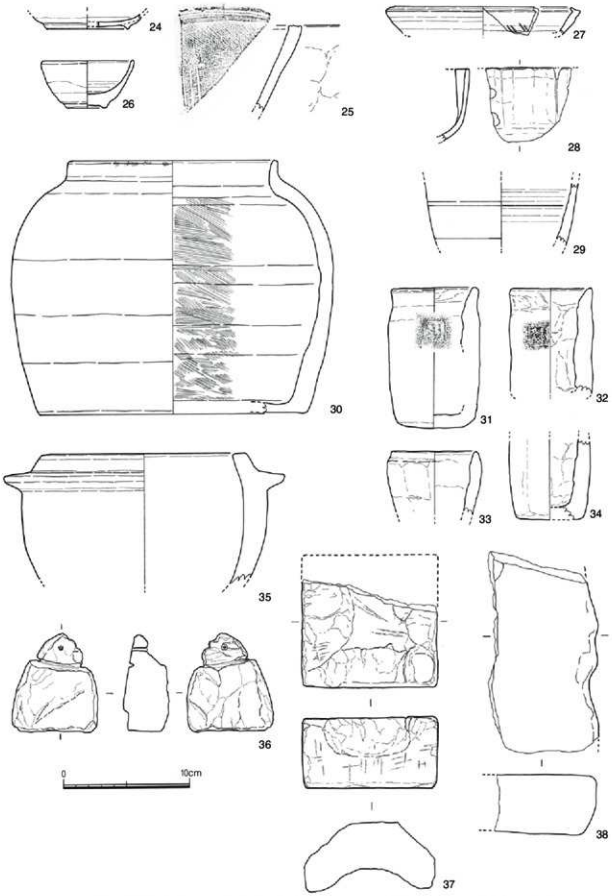


Fig.96　遺構外出土遺物実測図 北館域２（1/3）　31・32・34（近世初頭）、35（古代）は参考

Fig.95-**3**は、谷部の出土遺物である。第17次調査e770-f820グリッド、古代の堀SD1045から出土した白磁碗である。SD1045は、古代をとおして堀として機能するが、自然堆積・瓦など人工物の投棄により徐々に埋没し、鴻臚館廃絶後は池SG1046として残る。この遺物は鴻臚館廃絶期を示す4層から出土した白磁碗で、太宰府分類Ⅴ類に属する。Ⅴ類は12世紀前後にあてられている。4層については『鴻臚館跡18』に詳しい。土層図は『鴻臚館跡18』Fig.12(7)にあり、土層の平面位置は本書Fig.50(A-B)に示している。4層は、南北両側から大量の瓦が廃棄され、最上面には焼土・木炭層が互層をなす一群の層位である。4層下層からは中国製陶磁器・イスラム陶器が出土しはじめ、最上層の焼土層からは太宰府分類の白磁XⅠ類がまとまって出土したことから、4層の最上面は11世紀半ばに位置づけられている。Fig.95-3白磁はその次代にあたるもので、4層上位からの混入と考えられ、鴻臚館廃絶期の層を捉えるうえで重要な遺物である。

Fig.95-**20**（巻頭カラー）は、第30次トレンチ6調査で、北館台地上p780グリッドに位置する近世石組み溝SD24070から出土した孔雀種の梅瓶である。赤味の強い橙色陶胎で、夾雑物はなく精良である。外面は、白化粧を施し、褐色粘土で精密な花卉文を描き、地文の間を細線文で埋め、鮮やかな青釉を薄くかける。内面は露胎で、挽き上げ痕が明瞭である。二次被熱によりお釉の剥離が見られる。亀井明徳氏ご教示により、磁州彭城鎮窯の明代16世紀頃のものであることが分かった。（池崎）

Fig.95

No.	遺物名	遺物情報	法量(復元値)(残存値)
1	白磁 碗	明灰色精良胎 薄かに黄味ある透明釉 外面口縁直下に無釉箇所あり【築城盛土 o790】	口(16.5) 高[5]
2	白磁 碗	灰色が かるやや粗胎 わずかにイボ色がかる透明釉 【SP2409(近世以降) o780】	底(6.5) 高[2.8]
3	白磁 碗	灰色精良胎 硬質 灰色がかる透明釉 【SD1045(古代) e770-f820】	底(6.2) 高[4.1]
4	白磁 碗	灰白色精良胎 わずかにオリーブ色がかる透明釉 【築城盛土 j730】	—
5	白磁 碗	緻密灯ち次き優品 古代連物を再利用 優品 薄かに黄味がかる色精良胎 薄かにオリーブ色がかる透明釉 細い貫入【下層(不詳) m710-m750】	外径8.6 底7 高[1.7]
6	白磁 皿	福建辺り か 蛇の目釉剥ぎ 明灰色胎 やや暗い青味ある透明釉【築城盛土 j730】	口(10) 高[2.5]
7	白磁 小壺	明灰白色胎 わずかに水色がかる透明釉【築城盛土 j730】	底(4.4) 高[2.7]
8	青磁 碗	龍泉（銅可）か 東南水車陶窯系か 赤味ある淡橙色胎胎 オリーブ色透明釉 底部内面に目痕 外面目痕は明色【築城盛土 j730】	口(11.4) 底5.4
9	青磁 碗	龍泉窯系 灰白色精良胎 淡灰オリーブ色釉【SK1829(古代) m790】	—
10	青磁 碗	龍泉窯系 優品 灰色精良胎 青緑色胎【築城盛土 j730】	—
11	青磁 碗	龍泉窯系 灰色精良胎 硬質 オリーブ色釉 高台内に八字痕と墨痕か【SK1224(近代) j780】	底6.2 高[1.9]
12	青磁 碗	龍泉窯系 モチーフ全体は同安窯系を意識 灰色精良胎 オリーブ色透明釉 細い貫入【下層(不詳) m710-m750】	底5 高[2.8]
13	青磁 皿	同安窯系 明灰色胎 緑がかる青磁釉【築城盛土 o760】	—
14	青白磁 合子蓋	白色精良胎 青味ある透明釉 艶やか 貫入【下層(不詳) m710-m750】	鍔(11.2)
15	青白磁 蓋	景德鎮窯系 白色精良胎 わずかに青味がかる透明釉 貫入【築城盛土 j730】	口(12.8) 高[1.8]
16	青花 碗	景德鎮窯系 白色精良胎 透明釉 呉須鮮やか【築城盛土 p770】	口(15.1) 高[3.2]
17	青花 碗	白色やや粗胎 青味ある透明釉【築城盛土 j730】	—
18	青花 碗	白色精良胎 青味ある透明釉【築城盛土 o760】	底(8) 高[3]
19	青磁陶器 小皿	淡褐色胎 白化粧 青釉 微細貫入 型造り【築城盛土 p770】	口(7.8) 高[1]
20	青釉陶器 梅瓶	乳濃釉 磁州彭城鎮窯 橙色精良胎 硬質 白化粧の上絵具 青色透明釉 被熱 【SD24070(近世) p780】	胴部最大(15.6)
21	陶器 皿	口縁部 褐釉色胎 茶味ある透明釉 細かい貫入 【SD2409(近世) o770】	口(11.1) 高[2.5]
22	陶器 壺	下戸口縁 緑めて種加(瑞砂粒多含) 焼成良好 被熱により釉変質 暗茶褐色【築城盛土 j730】	—
23	タイ陶器 壺	暗赤褐色胎(白砂粒含) 焼成良好 【SK18290(古代) m790】	口(19.6) 高[7.9]

Fig.96

24	瓦器 碗	明灰白色胎(石英粒含) 内面黒灰色【築城盛土 j730】	底(6.4) 高[1.2]
25	東播か 擂鉢	瓦質 明灰色胎(石英粒微量・金雲母多含) 口縁端部黒灰色【SD2409(近世) p780】	—
26	唐津 小坏	赤味ある暗灰橙色胎 オリーブ色透明釉【築城盛土 o790】	口7.3 底3.4 高3.8
27	瀬戸 卸皿	橙色がかる明灰色精良胎 灰釉かすかにオリーブ色がかる透明釉【築城盛土 j730】	口(15.4) 高[2]
28	瀬戸 碗	鉢の可能性も 淡橙色胎 白化粧 灰釉(黄緑色釉) 被熱 釉剥落【築城盛土 o780】	高[5.8]
29	瀬戸 瓶	明灰色精良胎(石英粒少含) 灰釉(わずかにオリーブがかる透明釉) 微細貫入 刺落多 被熱【築城盛土 j730】	—
30	瓦質 壺	火消し壺 明灰色胎胎(石英粒・鉄分粒・金雲母含)【SG23025(近世) j750-j760】	口(16.6) 底(21) 高20
31	焼塩壺 身	奥州（謚完形 精良胎(石英粒・鉄分粒)含) 明赤褐色 被熱 内面全体に煤 器壁やや荒れ 押印不明瞭【築城盛土 o780】	口6.9 底6.4 高11.2
32	焼塩壺 身	奥州 赤味強い淡橙色 内面細い布目「こなと/藤左衛門」【包含層(近世) p760-n770】	口(6.5) 高[8]
33	焼塩壺 身	精良胎(微細鉄分粒少含) 赤味ある茶褐色 風化著しい【SX19500(古代-中世) o760】	口(6.3) 外径(7.5) [5]
34	焼塩壺 身	外面ボクキ 内面淡赤土質色 外面淡黄褐色【築城盛土 o780】	底(5) 高[6.5]
35	石製 鍋	滑石 内外面とも丁寧な加工 炭化物付着なし【SS16086(近世)g740-h740】	口(16.2) 鍔(22.4)
36	石製 権	滑石 細い刷りで全体を整形【表採 n760-p790】	幅6.7 厚3.6 厚7.8 257g
37	石塔	安山岩 笠部 砂岩 研磨なし【SD24100(近世) o760-o770】	10.5×10.5 厚5.5
38	赤間石か	自然面粗めで滑らか 人工的なものであるかは不明【SX19500(古代-中世) o760】	長[16] 幅[8.7] 厚4.8

(cm)

（13）銭貨

鴻臚館跡から出土した銭貨のうち、中世において流通が確認されているものを列挙した。中世遺構から出土したものは第19次調査出土の**13**崇寧通宝（Fig.8）のみである。史跡鴻臚館跡地内より広くみて、史跡福岡城跡地内となればさらに資料は増加するものと思われ、中世として捉えるならば、将来的にはむしろ福崎丘陵エリアとしてまとめたいところである。

1・**2**の開元通宝はともに古代遺構から出土し、ここでは参考情報である。

第６次調査では**3**祥符元宝が、第９次調査では**18**洪武通宝が出土した。第21次調査では２・**6**・**11**・12・15・**16**・**17**が出土した。**12**元符通宝・**15**洪武通宝は同一遺構出土である。第25次調査では**5**・８・９・14が出土し、**8**元祐通宝・**9**元祐通宝カ・**14**政和通宝は同一遺構からの出土である。第30次調査では４・10・19・**20**が出土し、**4**祥符通宝・**10**紹聖元宝・**19**洪武通宝は同一遺構からの出土である。第31次調査では**7**嘉祐通宝（Fig.11）が出土した。

No.	銭貨名（初鋳年）	遺物情報【出土遺構(時期)地点】	法量(復元値) [残存値]
1	開元通宝 (621)	X線判読 錆化著しい 完形【SK82(古代) D820】	外径2.29 厚0.13 方孔幅0.61 2.8g
2	開元通宝	対読 字溝れ 3分割未接合 完形 【SK15014(古代) b770】	外径2.44 厚0.13 方孔幅0.65 2.4g
3	祥符元宝 (1009)	回読【表採 B770-B800】	外径2.44 厚0.1 方孔幅0.6 2.3g
4	祥符通宝 (1009)	回読 60%残【SP24030(近世以降カ) o780】	外径2.20 厚0.12 方孔幅0.54 [1.2]g
5	景祐元宝 (1034)	回読【SK19112(近世) p760】	外径2.43 厚0.13 方孔幅0.65 2.8g
6	皇宋通宝 (1039)	皇宋通宝カ 対読 【03-3区上層(近世以降) b750-f750】	外径2.45 厚0.135 方孔幅0.66 2.6g
7	嘉祐通宝 (1056)	対読【整地層(近世以降) n850】	外径2.52 厚0.10 方孔幅0.72 2.4g
8	元祐通宝 (1086)	回読 錆顕著【SE19110(近世カ) p760】	外径2.51~58 厚0.28 方孔幅0.61 2.9g
9	元祐通宝ヵ	回読【SE19110(近世カ) p760】	外径2.39 厚0.15 方孔幅0.65 2.5g
10	紹聖元宝 (1094)	背上月 回読 【SP24030(近世以降カ) o780】	外径2.37 厚0.11 方孔幅0.70 3.1g
11	元符□宝 (1098)	折二銭 70%残【表採 d750-b780】	外径3.06 厚0.12 方孔幅0.6 3.0g
12	元符通宝 (1098)	回読【Pit15050(不詳) c780】	外径2.41 厚0.14 方孔幅0.62 2.3g
13	崇寧通宝 (1103)	当十銭 回読 完形【SM1208(中世) j780】	外径3.49 厚0.25 方孔幅0.75 7.3g
14	政和通宝 (1111)	対読【SE19110(近世カ) p760】	外径2.45 厚0.13 方孔幅0.67 3.5g
15	洪武通宝 (1368)	対読【Pit15050(不詳) c780】	外径2.25 厚0.13 方孔幅0.54 1.6g
16	洪武通宝	小平銭 対読 背面「一銭」カ 【03-3区上層(近世以降) b750-f750】	外径2.02 厚0.15 方孔幅0.49 2.0g
17	洪武通宝	対読【03-3区上層(近世以降) b750-f750】	外径2.29 厚0.125 方孔幅0.55 3.3g
18	洪武通宝	対読【表採 A750-780】	外径2.4 厚0.13 方孔幅0.55 2.9g
19	洪武通宝	対読【SP24030(近世以降カ) o780】	外径2.32 厚0.12 方孔幅0.59 2.8g
20	永楽通宝 (1408)	対読【SK24001(近代) p780】	外径2.44 厚0.14 方孔幅0.56 3.8g

(cm)

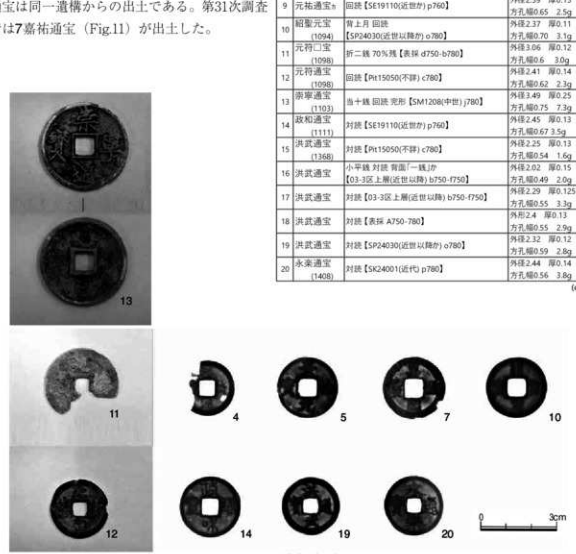


Fig.97　銭貨（2/3）

4.古代の遺構と遺物

中世遺構の整理調査中、新たに古代の遺構と遺物が確認されたので、ここに掲載する。

溝SD25054（第31次調査、n-m830グリッド） Fig.98、（『鴻臚館跡22』Fig.133）

トレンチ1調査区の南端で、鴻臚館時代Ⅱ期布掘り区画塀SA25055と同一主軸の溝が検出された。SA25055は岩盤上にあるが、本遺構はⅡ期以降かつ15～16世紀以前の造成土上に営まれる。本遺構SD25054がⅡ期布掘り区画塀の主軸と同一であることにより、本遺構が截っている造成土は古代の造成地である可能性が高いと考える。溝は北側の円形遺構に切られ、深さは10～20cm程度。雨落ち溝か。

SD25054出土遺物 Fig.98 **1**は白磁碗である。胎土は白色で精良、透明釉がかかる。若干の極微細発泡がみられる。破片であるが、艶やかな優品である。邢窯系か。復元口径13.4cm、残存高は2.7cm。

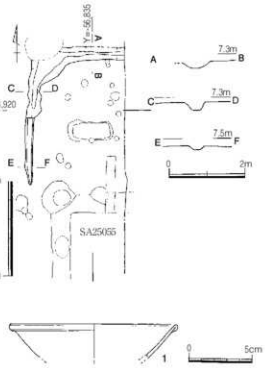


Fig.98 溝SD25054 実測図
（平面1/200、断面1/100）、出土遺物実測図（1/3）

SM24139出土遺物 Fig.99、（p.16、Fig.46）

トレンチ6調査区で検出された築城直前の整地層から出土した瓦である。**3**は外形を保ちアーチ形をしている。**4**と接合する可能性があるが、双方端部が摩耗し接点はない。断面は2層構造で、厚さ1.3cm前後の粘土板に、厚さ1.5cm程の意匠部分を合わせて焼成している。胎土良好で1cm以下の白色小礫を若干含む。表層は灰白色、断面は淡褐色を呈する。風化により表層は軟化し、一部剥落している。全容不明ながら獣面文となる可能性があり、平城宮式鬼瓦と類似点がある※。

※比嘉えりか教示による／九州歴史資料館1993『日本の鬼瓦』／山本忠尚1998『鬼瓦』日本の美術12

Fig.99 中世の整地層SM24139出土遺物（拓本は1/4）

5.まとめ

鴻臚館以前の自然谷は、鴻臚館時代において北館と南館を隔てる堀SD1045として整備され、堀は福岡城築城直前までSG1046として残った。谷部の土層断面では、古代から築城直前までの埋没過程を追うことができる。その土層断面の観察により、4層最上面は、白磁ⅩⅠ類がまとまって出土したことから11世紀半ばに位置づけられた（『鴻臚館跡18』p.31）。鴻臚館跡ではこの時期を境に出土遺物が極端に減少し、一方博多で膨大な貿易陶磁器が出土することから、11世紀半ばが鴻臚館廃絶の時期と考えられ、史資料で鴻臚館に関する記述が見られなくなる時期と一致する。

鴻臚館は第Ⅲ期と第Ⅳ期では土地利用に変化が見られる。第Ⅲ期では南館・北館ともに礎石建物が配されるが、第Ⅳ期では建物は北館に集約され、南館では梵鐘鋳造遺構SX15027や多くの廃棄土坑が営まれる。この様相はその後の土地利用にも影響したものと思われ、中世前半期は北館台地上で屋敷もしくは寺などが営まれ、南館台地上では時期を隔てて中世後半期に工房が営まれた。工房の存在は時期的に連続するものではないが、南館台地がもつ位置的な性格を彷彿とさせるものである。

(1) 中世前半期

南館台地では、古代東門の動線を踏襲するようにSD30（Fig.39）が門のルートを通り西に走る。古代以来の動線が徐々に道となり西進する溝となったものと思われる。

谷部では、堀SD1045が埋没し池SG1046となる。以降、池は埋没しながら存続する。

北館台地では11世紀末～12世紀中頃の土壙墓SR23211（Fig.76）と、12世紀中頃～後半の池SG23206が確認されている。土手が築かれ浚渫された痕跡もあるなど管理された池であり、北館台地上には管理者の屋敷や寺などの存在が想起される。土壙墓はSR23211の１基のみ確認され屋敷墓の様相であるが、調査箇所は限定的であり、周辺にも同様の遺構が残る可能性がある。また谷際の整地層SM1208ではⅣ類白磁碗・Ⅴ類白磁碗、13世紀前半の出土例が多い鎬蓮弁を有する龍泉窯系青磁碗などと共に銅製懸け仏が出土し、台地北西縁辺のSM25058では12世紀後半から以降の龍泉窯系青磁が出土している。これら整地層自体は中世後半期のものであるが、包含する遺物は中世前半期の北館台地上の営みを表している。また谷部の池SG1046から中国系瓦（Fig.54）が出土したことは興味深い。

13世紀末成立の『一遍上人絵伝』に筑前の武士の屋敷が詳細に描かれている。川添昭二ほか1997『福岡県の歴史』には『屋敷の周囲は堀と板塀で囲まれ、（中略）簀子縁をもつ板敷の母屋では酒宴がもよおされている。（中略）離れ家の後ろには、板敷の厩がある。離れ家・厩とも板葺屋根。』とある。また、右手には建物（持仏堂など諸説あり）があり、敷地を囲う板塀は掘立構造、母屋は礎石建物として描かれている。描かれたのは武士の屋敷であるが、建物配置や構造は参考になる。

(2) 中世後半期

谷部の池SG1046は埋没過程にあり徐々に浅くなっている。

南館台地ではひきつづき東西溝SD30が走り、この溝の西際には梵鐘鋳造遺構SK29と溶解炉SK139が営まれる。溶解炉SK139は室町時代後期～江戸時代初期とされ、梵鐘鋳造遺構SK29はSK139と位置的に近いことから同時期とされているが、撞座の蓮花中房は比較的オーソドックスに見え、中世後半以降に見られるデザイン的な変容は見受けられず、駒の爪の肥厚もさして大ぶりに見えない。また梵鐘鋳造遺構SK29と溶解炉SK139の間には後述する地下式土坑SK28が営まれている。SK29・SK139が同時期であるならばSK28が営まれた後に造られたとは考えにくい。SK28は15～16世紀と目される。これらにより江戸時代初期の可能性は除外できそうである。時期の解明については、将来的に炭の分

析や鋳型の精査などから導き出されることを期待する。

その後、南館・北館の両台地の縁辺に限らず台地上に地下式土坑が出現するが、遺構から時期を示す遺物の出土はなかった。福岡市内の調査成果では、地下式土坑の年代は15～16世紀とされている。

中世末期においては、北館台地縁辺に沿って台地の平坦面を拡張するために盛土が行われた。台地北西端（トレンチ１調査区）の盛土は、盛土上面を７ｍ強とする。この面には築城直前まで残った池SG25047が営まれた。台地東側の盛土は、盛土上面を台地の標高７ｍに合わせて行われている。また東側の斜面SX23200では犬走り状の硬化面が確認された。これら土地改変と同時期に、台地上では台地を大きく廻る溝SD1240が確認され、この溝について山崎龍雄氏は砦の横堀に似ると指摘する。北側の台地下には台地を意識するようにSD24137などの溝が東西方向に走る。北館台地平坦面の拡張や溝などは概ね16世紀代で、大内氏・大友氏・少弐氏の争いが顕著になった頃である。この時勢において防御の必要性は高まり、福岡平野の中にあって小高い福崎の地には防御的機能をもつ構築物が築かれた可能性が想定できる。本遺跡も例外ではなく、確認された遺構群は防御を旨とした施設の一部と考えることもできよう。黒田長政が福崎の地を城の用地とした背景には、当時この地に城を思い描けるなにか、例えば石山本願寺のような砦があった可能性が考えられ（p.7）、山崎龍雄氏が指摘する横堀のようなSD1240や斜面SX23200に設けられた犬走り状の硬化面など、台地をめぐる遺構群はその設定と合致する。

その後の黒田長政入城に際しては、本格的な築城以前に一部整備が行われたことが知られる。台地北側（トレンチ６調査区）では、台地の一段下、標高４～4.5m地点で築城直前の盛土が確認されている。またSX17711上層で見られた南北溝と東西溝は、この一時期に構想された石垣築造の痕跡と考えられる（p.37）。

発掘調査の成果によって鴻臚館の廃絶は11世紀半ばとされ、史資料でも永承二年（1047）大宰府が宋客宿坊放火者を追捕し禁獄したとする記録以降、鴻臚館に関する記録は見られなくなった。鴻臚館の放火は古代から中世へと移り変わる端境期に起きた事件であり、のちに寺社衆徒が押妨・放火などをはたらくようになる世相の初期を映し出しているようにも見える。

鴻臚館に代わって中世の中心地となった博多に対して、中世期の鴻臚館跡地は郊外の様相である。古代の環境が特殊であっただけに衰退とのみ語られることが多いが、博多以西の湿地の多い土地環境の中で小高く地盤のよい鴻臚館跡地は、中世期もなお利用価値があり、中世前半期には屋敷もしくは寺として、戦国時代には砦として活用されたものと思われる。

今回は鴻臚館跡のその後という限定された地点の報告であるが、将来的に、丘陵全体に視点を移して福岡城以前として語られるならば、この地が果たした役割が詳らかになるものと期待している。

川添昭二ほか1997『福岡県の歴史』県史40
奈良国立文化財研究所1993『梵鐘実測図集成』上・下　奈良国立文化財研究所史料 第37冊・第38冊
福岡市教育委員会2001『樋井川Ａ遺跡―樋井川Ａ遺跡第1次調査報告―』福岡市埋蔵文化財調査報告書第682集（加藤良彦）

報 告 書 抄 録

ふ り が な	しせき　こうろかんあと
書　　名	史跡　鴻臚館跡
副 書 名	― 中世編 ―
巻　　次	鴻臚館跡 26
シ リ ー ズ 名	福岡市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第 1524 集
編 著 者 名	中村 啓太郎、光吉 千里
編 集 機 関	福岡市教育委員会
所　在　地	〒810-8621　福岡市中央区天神１丁目８－１　　電話番号 092-711-4784
発 行 年 月 日	2024年３月22日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	発掘面積 ㎡	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
史跡 鴻臚館跡・史跡 福岡 城跡	福岡市 中 央区 城 内１、１	40133	0192	33°35′12″	130°23′11″	871225 ～ 140328	（計32,319）	範囲確認

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
史跡 鴻臚館跡・史跡 福岡城跡	官衙集落	古墳時代～現代	掘立柱建物 石垣 布掘り区画塀 礎石建物 便所遺構 生産遺構 溝 池 地下式土坑 土壙墓 土坑 柱穴 整地層 包含層	須恵器 土師器 中国陶磁器 朝鮮陶磁器 瓦 石製品 鉄製品 銅製品	古代の客館である鴻臚館（筑紫館）跡

史跡　鴻臚館跡

鴻臚館跡 26

― 中世編 ―

福岡市埋蔵文化財調査報告書第 1524 集

2024年（令和６年）３月22日

発　行　福岡市教育委員会

福岡市中央区天神一丁目１番８号

印　刷　有限会社プリコム

福岡市博多区冷泉町1-20 黒川祇園ビル1F